
俺，ツインテールになります。10
水沢夢
[イラスト]春日歩
GAGAGA

小学館ｅＢｏｏｋｓ

俺、ツインテールになります。10

水沢　夢

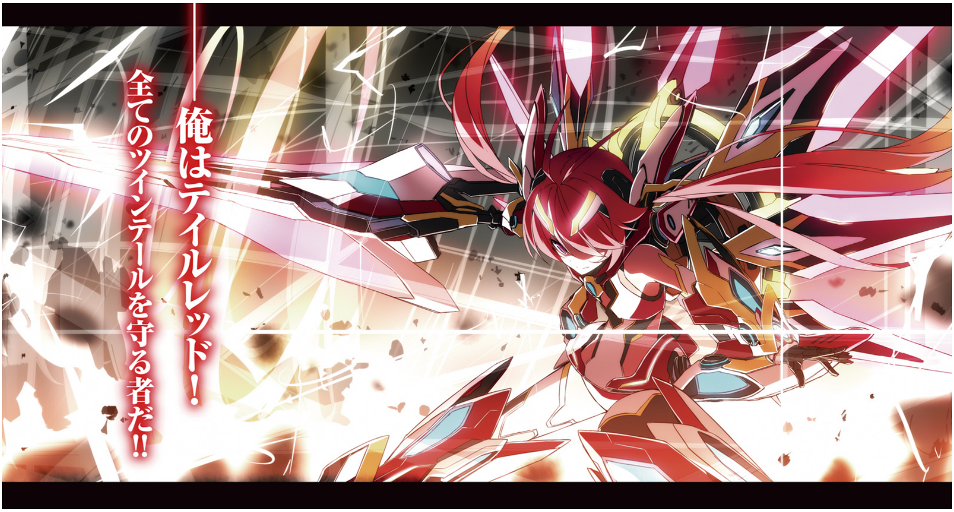
イラスト　春日　歩


俺、ツインテールになります。10
水沢夢
[イラスト]春日歩

CONTENTS

デザイン／新井隼也＋ベイブリッジ・スタジオ


桜川 尊
津辺愛香
トゥアール
神堂慧理那
メガ・ネプチューン=Mk.Ⅱ
観束総二
イースナ


――俺はテイルレッド！
全てのツインテールを守る者だ!!

目次

俺、ツインテールになります。10

水沢夢

[イラスト]春日歩

人物紹介

観束総二（みつかそうじ）

主人公。
ツインテールを世界一愛する高校一年生。
テイルレッドに変身しエレメリアンと戦う。

トゥアール

異世界からやってきた美少女科学者。
総二たちにテイルギアを託す。
痴女。

神堂慧理那（しんどうえりな）

総二たちの通う高校の生徒会長。
テイルイエローに変身。
ドMで総二をご主人様と慕う。

津辺愛香（つべあいか）

総二の幼馴染。テイルブルーに変身する。
貧乳を気にしており、ネタにされると激しく怒る。

イースナ

善沙闇子（いいすなあんこ）の名で活動するアイドル。
テイルブラックに変身。
普段はストーカーで引きこもり。

観束未春（みつかみはる）

総二の母親で、自宅で喫茶店を経営する。
現役中二病患者で、
常連客に慕われている。

結翼唯乃（いわばねゆの）

フェニックスギルディが
ポニーテールの少女となった姿。
圧倒的な戦闘力を誇る。

桜川 尊（さくらがわ みこと）

慧理那の専属メイド兼ボディガード。
婚期を焦っており、
必死に婚姻届を配っている。

アルティメギル組織図

? アルティメギル首領

全エレメリアンの頂点に立つ絶対の存在。



首領直属戦士
ダークグラスパー

四頂軍や各侵攻軍の統率者。
後に離反し、
テイルブラックとなる。

アルティメギル四頂軍(しちょうぐん)

一の部隊 | 最高科学者：マーメイドギルディ
――――詳細不明

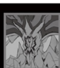
死の二菱(ダー・イノ・ランヴァス)



隊長：ティラノギルディ
右牙の副将(ライトファング)：プテラギルディ
左牙の副将(レフトファング)：トリケラトップギルディ

絶滅生物をモチーフとしたエレメリアンを擁する処刑部隊。一般兵に至るまで強力で、ツインテイルズも通常形態では歯が立たないことも多いほど。隊長のティラノギルディは、臆病だが凄まじい実力を秘めている。

貴の三葉(ノー・ブル・クラブ)



隊長：ユグドラシルギルディ
副隊長：ラフレシアギルディ
マンドラゴラギルディ

総二たちが訪れた異世界で総力戦を繰り広げた部隊。結束力が強い。

美の四心(ビー・ティフル・ハート)



隊長：ビートルギルディ
副隊長：アラクネギルディ
隊長補佐：スタッグギルディ

ダークグラスパーと共に参戦した部隊。永い死闘の末、完全敗北した。

9巻までのあらすじ

人間の趣味嗜好などが結晶化した精神エネルギー・属性力を狙う異世界の組織・アルティメギル。その組織に属する怪人・エレメリアンたちから世界の平和を守るべく、ツインテールへの愛・ツインテール属性を核に作られた空想装甲「テイルギア」をまとって戦う観束総二たち、ツインテイルズの戦いは続く。

結翼唯乃は、ツインテールを暴走させていく総二を止めようと戦いを挑んできた。禁断の形態フォーライザーチェインを発動するも、レッドは唯乃に敗北。しかもその隙を突かれ、急襲したティラノギルディにツインテール属性を奪われてしまった……！

各異世界の侵攻部隊



ドラグギルディ部隊
隊長：ドラグギルディ
隊員：スワンギルディなど

総二たちの世界に初めて侵攻してきた部隊。



リヴァイアギルディ部隊
隊長：リヴァイアギルディ



クラーケギルディ部隊
隊長：クラーケギルディ

・タイガギルディ部隊 隊長：タイガギルディ

ドラグギルディが倒されたことで侵攻部隊に増援された各部隊。
いずれも現在までに隊長がツインテイルズに倒されている。

■その他（引退戦士など）：ケルベロスギルディ



反逆者 フェニックスギルディ
ペガサスギルディ

組織に反旗を翻すなどしたエレメリアンたち。

プロローグ　ツインテールが生まれた日。

究極のツインテール。
私を最初にそう呼んだのは、誰だれだっただろうか。

どんなことにも、始まりはあるよね？
無から生まれた膨ぼう張ちよう加速がビッグバンを引き起こして、宇宙が作られたみたいに。
んー、それじゃわかりづらいか。
お魚が頑張って陸に上がったから、巡り巡って人間が生まれたよね？
見た目がグロテスクな生物だって、誰かが食べたから、食べ物として認知されたわけで。
万ばん物ぶつには始源がある。
そして人にまつわる全ては、必ず最初にそれにチャレンジした先駆者がいるんだ。

じゃあ、最初に髪の毛を二つに結んでみようって思った子は、何を考えてそうしたのかな？

きっと、一人が寂しかったんだと思う。
雲の上から、ガスとマグマの大地を見下ろす毎日が、孤独だったんだ。
だから──二つを求めた。一つが寂しくて、二つあることが、嬉うれしかった。
そんな風にして自分の髪の毛を二つに結んだ女神おんなのこがいて。
やがて土の上を人が歩くようになった時……やっぱり、誰かが思った

んだよ。
　二つあれば、嬉しいな……って。
　ツインテールの始まりはね、天空ソラだったの。
　ほんのちょっぴり幸せを感じた、一人の女の子の気紛れ。ただの、髪型だよ。
　それなのに、いつしかツインテールは……終わりのない争いを生み出す、災わざわいの根源となってしまった。
　ツインテールを巡って、無数の異世界が滅びていく。
　いったいどれだけの世界でツインテールが生まれ、消えていっただろう。
　そして、またここに……ツインテールが悲劇を生んでしまった。
　ねえ、もう十分でしょう？　十分すぎるほど、傷ついたでしょ？
　総そう二じ。
　君は――もう戦わないで。

第一章　ツインテールの消えた日。

　ポニーテール属性を極めたエレメリアン・フェニックスギルディが変身した人間体の少女──結いわ翼ばね唯ゆ乃のは、突然俺にデートを申し入れてきた。
　もっと人間と交流を深めることで、唯乃はエレメリアンではなく人間として生きられるかもしれない……。そんな希望を抱いた俺はその提案を受け、デートを通じて彼女とわかり合おうと決意した。
　だが、唯乃もまた、その胸にある決意を秘めていたのだ──。
　一日かけたデートで俺を観察し、俺のツインテールの進化の在り方を危き惧ぐした唯乃は、俺に一対一の真剣勝負を挑んできた。
　俺のツインテールの間違った進化を止めるために、俺から戦う力を奪う。それが、彼女が出した答えだったのだ。
　宿敵との死闘を迎え、俺もあらん限りの信念で立ち向かった。
　あらゆる技を出し切り、持ち得る全ての武器を振るった。
　それでもまだ唯乃に及ばないと悟った俺は、決死の覚悟で限界を超え、禁断の変身・フォーライザーチェインへと到達した。
　自身のツインテール属性そのものにダメージが及ぶ、まさしく禁きん忌きの力──だが、そうまでしてもポニーテールの頂点を極めた唯乃には通用しなかった。
　俺のツインテールは、ポニーテールに完膚なきまでに敗北した──。
　そして力なく地面に倒れ伏した俺を、死の二菱ダー・イノ・ランヴアス隊長・ティラノギルディが急襲。
　あっけないほど一瞬で、俺のツインテール属性は強奪されてしまったのだ。

◇

　俺と唯乃の戦いの余波でほぼ更地と化した廃工場には、全てを焼き尽くした炎の残ざん滓し──目と鼻を衝つく煙と焦げ臭さが漂っている。
　その苦ささえ、今の俺には無臭も同然だった。
　身体からだに力が入らない。力を込めているのかも実感できない。全ての感覚が薄れていく。
　周囲の夜や闇あんに、心身もろとも溶けていってしまいそうだ。
「ッ、あ……」
　苦く悶もんの吐息が絶え間なく漏もれる。
　力なく顔を上げると、倒れた俺を境界線にして挟むように、ティラノギルディとフェニックスギルディが激しく睨にらみ合っていた。
　互いに剣を手にすれば、相手に届く距離だ。一触即発の様相を呈している。
「太古の覇者の頂点が、ハイエナの真ま似ね事ごとたぁな」
「そういう貴様は、大層な翼とは裏腹に蝙こう蝠もりにでも堕だしたようだが？」
　フェニックスギルディの怒気を孕はらんだ軽口にも、ティラノギルディは余裕で返す。
　ティラノギルディの面おもてに漲みなぎる覇気を感じたのは、今俺が気を失いかけているせいで見た錯覚ではないだろう。明らかに、これまで見てきた自信なさげな姿とは一線を画している。
　そんなことを考えていると、ティラノギルディは俺に視線を向けた。
「見よ、その少年を。属性力エレメーラを奪われただけでその有様だ。普通の人間にはあり得んことだ」
　その言葉にかっとなり、俺はよろめきながら立ち上がる。
「……だけ、だと……!!」

すぐに足から力が抜け、膝ひざをつく。再びティラノギルディに見下ろされる形となった。
「おい総そう二じ、じっとしてろ!!」
フェニックスギルディに制止される中、俺はあらん限りの怒りを込めてティラノギルディを睨み付けた。
「奪われただけ、じゃない……俺にとってツインテール属性は、脳や心臓と同じ、生きるために必要不可欠なものだ……！　俺のツインテールを……返、せ……!!」
ティラノギルディは、驚くほど穏やかな口調で俺の怒りに応えた。
「──なるほど。ではその脳や心臓を失ってなお、そうして稼う働ごく貴様は、果たして人間と言えるのか」
「……!!」
俺は言葉を呑み込んだ。
「臓ぞう腑ふ無く生きる知的生命体など、我われらエレメリアンの他において存在しないはずだが」
喩たとえを皮肉で返したのではない。
「属こ性こ力ろが血肉臓腑と化してゆく──少年よ、そんな危うさを疑問に持たず、今まで戦ってきたのか」
ティラノギルディは、大真ま面じ目めに俺へ問いを投げかけていた。
「アルティメギルが愛するテイルレッドが実は男だったと知った時は、ひどく裏切りを覚えたが……それが人間性を犠牲にしてまで到達したツインテールと思えば、同情もする」
そうまで言われ、俺はティラノギルディへの怒りが頂点に達する。
「ふざけるな……よくもぬけぬけと……!!」
だが、虚勢に等しい一言を絞り出すだけで、吐血しそうな苦痛に襲われた。
人間性を犠牲に……。ティラノギルディの言葉が、胸に刺さる。

　俺が初めて戦った日、ツインテール属性を奪われた慧え理り那な。
　ユグドラシルギルディの能力で一斉に属性力エレメーラを奪われた、異世界の人々。
　今までに見てきた、属性力エレメーラを奪われた人たちは、気絶したり、憔しよう悴すいしたりはしていたが、生命に関わるほどの苦く悶もんを訴えてはいなかった。
　本来制御するべき属性力エレメーラに、自分の身体からだが逆に支配されつつあったということだろう。
　属性力エレメーラを奪われて初めて、人間ではなくツインテールそのものになりかけているという、フェニックスギルディの忠告が確信に変わるなんて──。
「……む……」
　振り上げることすらできない俺の拳こぶしに、ティラノギルディの視線が注がれる。
「……そのブレスレット……！　ツインテール属性を感じる……!!」
「□□□□!!」
　しまった、気付かれた……！
　反射的に右腕を背に隠すが、属性力エレメーラを感じ取られた以上、視線を遮さえぎっても何の意味もない。
　俺たちツインテイルズの変身デバイスであるテイルブレスは、非変身時には俺たちの属性力エレメーラを秘匿する機能に特化する。それと同時に、普通の人からはブレス自体が認識されないようにもなる。使用者とブレス、それぞれの強大なツインテール属性を外界から隠匿し、アルティメギルに感知されることを防ぐためだ。
　だが認識攪かく乱らんの能力は、使用者のツインテール属性を動力源として作用している。
　自身のツインテール属性を失った今の俺では、ブレスに秘められたも

う一つのツインテール属性を隠し通すことすらできない……！
「そういうことだったのか。数あま多た屈強なるアルティメギル戦士たちがことごとく貴様に敗れ去ったその理由──今ようやく識しったぞ、テイルレッドの少年」
　俺の目に、幾いく許ばくかの怒気を孕はらんだティラノギルディの双そう眸ぼうが映る。
「自分自身のツインテール属性と、そのブレスレットに秘められたツインテール属性。よもや、二つのツインテール属性を用いて戦っていたとはな……」
　ティラノギルディの言葉に、遠くから響いてくる足音が重なる。
　巻き添えにしないよう大きく距離を取ったのに、それでもトゥアールは俺たちの元まで追いついてきてしまったのだ。
「来るな、トゥ……仮面ツインテール……!!」
　俺の制止も届かず……僅わずかに熔とけ残った瓦が礫れきに蹴け躓つまずきながら、仮面ツインテールは懸命に走り寄ってくる。
　彼女を軽く一いち瞥べつし、脅威ではないと悟ったのか、構わずにティラノギルディは続けた。
「その戦闘システム。ダークグラスパー……いや、テイルブラックも原理は同じだろうな。道理で人間でありながら首領様にも一目置かれる強さを持っていたわけだ、かの処刑人は」
　挙動不審で、頼りない帝王。
　だが、気弱さに封じられた本来の実力が発揮されれば驚きよう愕がくの強さを誇り、それと共に顕あらわになる洞察力は、これまでのエレメリアンに類を見ない鋭さだ。
　このまま俺たちの秘密が、全てこいつに曝あばかれる……そんな得体の知れない不安が蠢うごめく。
「不意打ちで弱らせた相手に、随分と上から目線だな、帝王さん

よ……！」
　睨にらみ合いに痺しびれを切らし、フェニックスギルディは何のてらいもなく堂々と銃剣武器・フェニックスラッシューターを右手に出現させる。
　不意打ちを糾弾する自分は、この一撃の間合いにあっても小細工はしないとばかりに。
「ツインテイルズに敬意があんなら、何で正々堂々と喧けん嘩かしねえんだああああああああああ!!」
　炎のように迸ほとばしる怒り……フェニックスギルディも、俺との真剣勝負に水を差されたことを激しく憤っているんだ。
　フェニックスギルディの愚直で鋭い斬ざん撃げきが、ティラノギルディの喉のど元もとへ迫撃する。
「人間への敬意は当然！　だがそれに留とどまらず肩入れまでする故ゆえ、貴様は反逆者なのだ!!」
　いかに速かろうと、正面からのシンプルな攻撃だ。大剣を出現させ、悠々とその一撃を受け止めるティラノギルディ。鍔つば迫ぜり合いしたまま刃と刃が擦こすれ、火花が周囲に飛び散る。
　二体は同時に刃を弾き上げ、互いに渾こん身しんの一いち斬ざんを放ち合う。
「おらあああああああああああああああああああああっ!!」
「ディユリャーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーッ!!」
　恐竜王と不死鳥の全力の剣撃が激突したその瞬間──激しい衝撃波が波紋となって周囲に拡散し、俺の身体からだにも叩たたきつけられた。
「ぐあああっ……!!」
　俺はたまらず地面を転がる。まるで紙かみ屑くずのような有様だ。
「はっ……！　総そう二じ!!」
　フェニックスギルディが俺に気を取られた隙すきに、後方に跳躍し距

離を取るティラノギルディ。
　苦く悶もんする俺の目に、息を切らせて駆け寄ってきたトゥアールが映った。
　自慢の銀髪も、白衣も、煙や煤すすで薄黒く汚れてしまっている。
「総二様!!」
　トゥアールは俺を支え起こし、ティラノギルディたちから庇かばうようように背に隠した。
「駄目だ、離れてろトゥアール……危険だ……！」
　小声で訴える。今の俺には、敵に知られないように通信する手段すらない。
「……もういいでしょう！　属性力エレメーラを奪ったのに……これ以上総二様を傷つけないで！　そんなに喧嘩がしたいなら、エレメリアン同士仲良く死ぬまでやっていればいいんです!!」
　仮面ツインテールの悲痛な訴えに、血気逆巻いていた二体のエレメリアンは、どちらからともなく剣を下ろした。
　今の俺では、エレメリアン同士の抗争の余波だけで軽く絶命しかねない。守るべき少女の背に守られる無力感に、俺は歯は噛がみする。
「……そこな仮面の少女の言う通り……これ以上の諍いさかいは、少年を傷つけるだけだ」
　ティラノギルディはそう牽けん制せいし、じわじわとフェニックスギルディとの距離を広げ始める。背を見せれば即座に攻撃される──即座に退却したいティラノギルディと逃がすまいとするフェニックスギルディ、その相反する思惑が闘気となって周囲を焦がしている。
　このままあいつを退却させたら、ツインテール属性を完全に奪い去られる……焦燥が俺の意識を明滅させ始めたその時、ティラノギルディに異変が起こった。
　わなわなと震ふるえ出し、身体からだを丸めて掻かき抱いている。

「ぬ、ぐ……！　まさか、これは……!!」
　ティラノギルディの身体が発光し、その大きな胸板に、透かしのようにツインテール属性の紋様が浮かび上がった。
「な、何だ……!?」
　俺は身を乗り出して力なくつんのめり、トゥアールに抱き留められる。
「この俺ですら抑えきれぬなど……この、属性力エレメーラ……は……おあああ!!」
　内側で何かが爆発したように、激しく上体を反らす。直後、ティラノギルディが体内に格納したリングが突如として宙空に飛び出し、猛烈な勢いで暴れ始めた。
「ぐうう……リングに吸収したツインテール属性そのものが暴れている！」
　ティラノギルディが血相を変えて宙を暴走するリングを掴つかもうとするが、ねずみ花火を思わせる無軌道な動きに手を焼いていた。
　それだけではない。リングの外周に、細かなヒビが入り始め、今にも砕けてしまいそうだ。
「ば、馬ば鹿か、な……一世界全ての人間の属性力エレメーラを吸収しても、全く問題ないよう設計されているのだぞ！　その許容量を遥はるかに超えているというのか!!」
　想定外の事態にとことん弱いのは変わらず、ティラノギルディは目に見えて狼狽うろたえ始める。
「へっ、んなしょうもねえ小道具に頼ってっからそうなる!!」
　混乱するティラノギルディとは真逆に、冷静にその渾こん沌とんとした動きを見極めていたらしきフェニックスギルディが、見切ったとばかりにリング目掛けて跳躍した。
「いいのか悪いのか……総そう二じのツインテール属性はやっぱ規格外

バカだぜ!!」
　フェニックスギルディは天高く右腕を振りかぶり──
「フェニックス
チョーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーップ!!」
　炎の手刀で、見事リングを真一文字に斬きり裂いた。
「今だ、総二！　ツインテール属性を取り込め!!」
　リングが割れ、俺がブレイザーブレイドで斬り裂いた時と同じように、中からツインテール属性の光が溢あふれ始める。それが、スローモーションのように感じられた。
　俺は感覚の無い足で地面を蹴けり、弾かれるようにリングの方へと手を伸ばす。
「かくなる上は……ぬうん!!」
　だが、俺よりも先に、ティラノギルディの手がリングの残ざん骸がいに触れていた。
　飛び出しかけていた光が、ティラノギルディの身体からだに吸い込まれていく。
「なっ！」
「んなにいっ!?」
　同時に意図に気付いた俺とフェニックスギルディが、思わず絶句する。
「ンユっ!!　ユユユユユユユユユユユユユユユユユユユリ……!!」
　高圧電流に感電したが如く、激しく全身を震ふるわせるティラノギルディ。
「ツインテール属性を……直接体内に取り込みやがった!?　正気かティラノギルディ!!」
　フェニックスギルディの驚きよう愕がくも目に入らず、ティラノギルディは机の上でバイブ着信した携帯電話のようにガタガタと振動し続け

る。
「こ、こうでもせねば、貴様のツインテール属性は持ち帰れそうもないのでな……!!」
　太古の地球に轟とどろいた雄お々おしき覇者の咆ほう哮こうと共に、拳こぶしを天高く衝つき出すティラノギルディ。
「百ゆッ合
りーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
　瞬間───奴やつの側頭部から、左右それぞれ一条の炎が激しく噴き上がった。
　炎が大気に梳くしけずられ、鮮烈な紅の光が形作ったのは──
「……ツインテール!?」
　呆あっ気けに取られ見ていたトゥアールがさらに驚愕する。
　ティラノギルディの側頭部からは、ツインテールが形成されていた。
　それは──かつて死闘を繰り広げた強敵・ドラグギルディの最終闘体を思わせる。
　テイルレッドのツインテールは、太陽の光波紋のような鮮あざやかな光彩を放っていたが、ティラノギルディのそれは純粋な真紅……そのことを除けば瓜二つのフォルムだ。
「おお、見事なツインテール……!!」
　咄とつ嗟さの冒険がもたらした不可思議に、ティラノギルディは快かい哉さいを謳うたう。
　フェニックスギルディは対照的に、苛いら立だたしげに吐き捨てた。
「クソッ、そりゃテイルレッドのツインテールなんだ、見事なのは当たり前じゃねえか……！　おい総そう二じ、ぼやっとしてんな、次はちゃんと掴つかめよ!!」
　その見事なツインテールを見ても……俺は、何の感慨も湧わかない。ただの髪の毛に見えた。

「……完全に食われちまった……のか……？　俺のツインテール属性が……」
　悲観に支配され、俺は膝ひざから地面に崩れ落ちる。三度、仮面ツインテールに支えられた。
「違います、エレメリアンは人間の属性力エレメーラを直じかには取り込めません！　それができるなら、わざわざリングで奪って持ち帰らず、一部はその場で摂取するはずです……!!」
　仮面ツインテールと、それに続きフェニックスギルディが俺を勇気づけようとする。
「そうだ！　こいつは、盗んだ宝石を取り返されないように口いっぱいに頬ほお張ばっただけだ！　だが、鋭い鉱石を入れっぱなしじゃあ口ン中は傷つくし、さらに深く飲み込めば腹の底がズタズタになる！　命懸けの博ばく打ちをやらかしやがったのさ!!」
　やっぱり、ティラノギルディはあり得ない無茶をやらかしているのか。
「とにかく、今ここでお前さんをブッ倒せば万事解決ってことだ!!」
　渾こん身しんの斬ざん撃げきを繰り出そうとしたフェニックスギルディが矢庭に足を止め、夜空を見上げた。
　危機意識に何より敏感なティラノギルディもまた、迫撃する眼前の斬撃を捨て置いてなお、空へと最大限の警戒を放つ。
　瞬間──

「ッ────があああああああああああああああああああああああああ!!」

　青い流星が、星空よりティラノギルディ目掛け急墜する。
　双そう眸ぼうを紅くれないに血走らせ、ブルーが襲いかかってきたの

だ。
「ほわあ！　テイルブルー!!」
　思わず尻しり餅もちをつくティラノギルディ。そのままカサカサと後あと退ずさり、脳天をブチ抜かんと振り下ろされた槍やりを間一髪で回避する。ランスはコンクリートの地面に深々と柄えまで突き立った。
　二、三度力を込めて引いてもランスは抜けず、あっさりと見捨ててブルーは素手でティラノギルディに掴つかみかかった。暴走を超えて最強形態に辿たどり着いたはずなのに……それはそれ、と言わんばかりに元気よく暴走している。
「のおおおお何だあの現世の物とは思えん怪魔は！　悪霊退散！　悪霊退散!!」
　金切り声を上げるティラノギルディ。悪霊なら誠心誠意頼めば見み逃のがしてくれるかもしれないが、暴走したブルーは悪霊ほどの情も無い。力尽きるまで止まらないのだ。
「げっ！　青のねーちゃん、いきなり暴走してるじゃねーか!!」
　ブラックと並び、遅れてやって来たイエローが、しどろもどろになりながら説明する。
「レッドのツインテール属性が奪われたと聞いて、ブルーが先行を……！　ブルー！　あなたとブラックは戦いで消耗しすぎていますわ！　わたくしに任せて──」
　暴走状態では仲間の声も届かない。ブルーの猛追は続く。
「はわわわわわわ……怖いよう……」
　簒奪者ハイエナと呼ばれたその次は、子猫のようにか細く身を震ふるわせるティラノギルディ。
「返せ！　そーじのツインテールを……返せえええ!!」

大気をつんざくような絶叫を迸ほとばしらせるブルー。
ここにいる二体は俺の正体を知っているとはいえ、エレメリアンの前で俺の名前を叫ぶなどいつものブルーからは考えられない。僅わずかに理性が残りつつの暴走……厄介な状態だ。
迫力に圧倒され続けるティラノギルディ。
「この地球はどうなっておるのだ……！　妙な生命体を産み出しすぎではないのか!!」
その妙な生命体の筆頭・エレメリアンの暴言を聞かず、ブルーの血走った双そう眸ぼうが夜や闇あんに光の尾を描く。
離れて呆あっ気けに取られていたのも一拍、
「ドＭ！　この際貧乳に続け！　わらわたちも一緒にティラノギルディを倒すぞ!!」
「はい、サポートしますわ！　属性玉エレメーラオーブ──濡れ透け属性クリアウエット!!」
ブルーに続けと、ブラックが突貫。イエローもその後方で属性玉変換機構エレメリーションを発動する。
「う、あ、ああ……来るな……来るなあ!!」
ティラノギルディの怯おびえが限界に達したかに見えた瞬間。その全身を、薄青い光が包む。
突き出した掌てのひらから猛烈な勢いで水流が放たれ、ブルー、ブラック、イエローはカウンターでもろにそれを浴びてしまった。
「ぐっ……何じゃこいつ、水を操るじゃと!?　先刻の戦いでは隠しておったか……!!」
皆がたじろいだ隙すきに距離を取り、ティラノギルディは背後に帰還用のゲートを出現させた。
「テ、テイルレッドのツインテール属性……これは貴様たち全員のツインテール属性を奪うまで、俺個人が預かる。この意味がわかるな──」

　ブラックが空を振り仰いで叫ぶ。
「まずい！　撃て、メガ・ネ!!」
「りょーかい！」
　天からの応答。伏ふく兵へいとして空中に待機させていたのだろう、メガ・ネが両手のバルカン砲でティラノギルディの逃走を阻止しようとするが──それでも一歩遅かった。
　降り注ぐ機銃掃射に先んじて、ティラノギルディは必死の形相でゲートへと飛び込む。
「……あ、ああ……」
　俺は、ティラノギルディが極彩色の光の中に消えていくのを、ただ黙って見ているしかできなかった──。

　属性力エレメーラの輝きも、マズルフラッシュも消え、夜闇と静寂に包まれる工場跡。
　全員言葉を失い、思い思いに立ち尽くしている。
「……ティラノギルディは……」
　俺は一いち縷るの望みを託して、手元の端末を操作している仮面ツインテールに尋ねた。
「完全に反応が消えました。基地へ──帰投したと思われます」
　俺たちは、アルティメギル基地へ乗り込む術すべを持たない。
　それ故ゆえにこれまで戦いにおける最優先事項は、属性力エレメーラを奪取したエレメリアンを絶対に基地に帰してはいけない、というものだった。
　初めての完全敗北。その代償が、俺自身……俺のツインテールだった。
　ブルーが俺を見て、千鳥足で近付いてくる。
「……だ、大丈夫、そーじ……？　身体からだが痛かったり、苦しかっ

たり……」
「ん？　あ、ああ……大丈夫。ちょっと気け怠だるいだけで、他に問題はないよ……」
　平気なふりをするんだ。せめて、身体には異常がないと誤魔化すんだ。
　勘の鋭い愛あい香かには程なく悟られるかもしれない。俺の演技力など、たかが知れている。
　それでも今は──これ以上、みんなに不安を与えたくなかった。
「よ、よかったあ。……心配しないで、あたしたちが絶対に取り返すから！」
　……そう。これでいい。悔しさを乗り越えて、次に備える……今はそれが必要だ。
　仮面ツインテールも、腰に手を当て大きく頷うなずいた。
「取られたなら取り返せばいいんです！　とにかく、基地に帰って作戦会議です!!」
　フェニックスギルディが鼻息荒く俺のジャケットを引っ掴つかみ、強引に脱がせようとしてきた。
「本当に平気か総そう二じ！　ちょっと服を脱ぎな、俺様の炎で火傷やけどしちまったかもしれねえ!!」
「エレメリアンの姿で迫るなああああああああああああああああああ!!」
　ブルーに蹴けりを入れられ、フェニックスギルディが地面を転がる。
「……フェニックスギルディ。あなたにも来てもらいます」
　仮面ツインテールにそう告げられ、フェニックスギルディは不敵な顔で立ち上がる。
「ほおう？」
「何!?」

トゥアールの予想外の提案に、俺は思わず声を上げた。
「本気で言うておるのか、トゥアール!!」
仲間になってしばらく経たっても、散々基地に入ることを渋られていたブラックに至っては、なおさら聞き返さずにいられないだろう。
イエローは先ほどから何か気がかりなのか、思案顔で自分の左腕を凝視しているが……意外にもフォローをしたのは、真っ先に反対すると思われたブルーだった。
「……そうね。妙な真ま似ねしたら、女の姿に化けてようが粉々にしてやるから」
ブルーは淡々とどころか、凍いてつくような冷徹さを込め吐き捨てていた。
「おっかねえなあ。ま、そのぐらいのもてなしの方が気楽でいいぜ!!」
苦笑して後頭部を掻かき、フェニックスギルディは同行を了承した。
「う……」
強い目め眩まいに、俺は心ならずもよろけてしまう。支えがなくても大丈夫だとトゥアールに言った手前、しゃがみ込んでしまうわけにもいかない。
「ねえ、やっぱりどこか痛むんじゃない？」
早くもブルーにぎこちなさを気け取どられたことに焦り、俺は少しわざとらしく屈伸を始めた。
「少し疲れたかもな。大丈夫、先に歩いててくれ」
ブルーは何も言わずただ頷うなずくと、俺の申し出通り先行しようと踵きびすを返した。空に輪を描きはためくツインテールの毛先が、俺の顔に当たる。
視界を遮さえぎられ、反射的に俺はツインテールを払っ――
「……!?」
――バカな……。俺は今、何をした？

自分の顔に触れたブルーのツインテールを、咄とつ嗟さに手で払ってしまったのか……!?
今までの俺なら、ツインテールが肌に触れることは、天からの恵み。穏やかな日差しを身に受けるように、心地よく受け止めていたはずだ。
いつまでもいつまでも触れていたはずだ。
それなのに、俺は今……なんてことを……。
一瞬でツインテールに関する思い全てを失うわけではない。
こうして、じわじわと喪失の事実を思い知らされていくんだ。
震ふるえる両手を眼前にかざす。こんな自覚の仕方、辛つらすぎる。
やっぱり俺は……本当に、ツインテールを愛する心を奪われてしまったんだ。

◇

俺たちツインテイルズと……フェニックスギルディ。
それぞれの長い一日たたかいが終わり、全員言葉なく基地へと帰還する。
〝エレメリアンの姿のままでは、基地には入れさせない〟
基地に転送する前に出したその条件は、自らもエレメリアンと戦い続けたトゥアールの譲れないこだわりなのだろう。
フェニックスギルディはすんなりと受け容いれ、再び人間の姿・結いわ翼ばね唯ゆ乃のへと変身した。
一方、俺の不調は深刻で……身体からだの感覚がおぼろげだ。
道場で正座をした後すぐ立ち上がると、足が痺しびれて床を踏む感触が知覚できず、たまらずよろけてしまうことがあるが……あの無感覚が全身に回ったような印象だ……ぞっとしない。

　基地最奥の転送ゲートを潜くぐり終えると、唯乃は感慨深げに極彩色のゲートを見つめた。
「……あなたたちエレメリアンが使っているものでしょう。何がそんなに気になるんですか」
「だからだよ。すげえな、あんた！　これを作れる人間なんて、全異世界を探し回ってもいねえだろうよ!!」
　純粋な賛辞で目を輝かせる唯乃に、トゥアールは少し苛いら立だっているようだった。
　どれほどいい奴やつでも、エレメリアンは総じて許せない……トゥアールの反応が当然なんだ。彼女は、エレメリアンに故郷を滅ぼされたのだから……。
「……すまなかったな、トゥアールさん。あんたのツインテールを見たいとか言っちまって。まさか……あんたのツインテール属性が、総そう二じのテイルギアだったなんてな……」
　唯ゆ乃のの謝罪に、トゥアールは何も返さなかった。
　かねてから唯乃は、トゥアールと会い、そのツインテールを目にすることを心待ちにしていた。本人の言葉通り、思いもしなかっただろう。トゥアールの愛がテイルギアへと姿を変え、アルティメギルの侵略を食い止めていただなんて。
　続く廊下を足早に歩き、コンソールルームへ。そして中央のテーブルに向かうまで──やはり、誰だれ一人口を開こうとしなかった。
　ブルーとイエローは変身を解除し、仮面ツインテールはマスクを外して縮小変形させ、板状の携行状態へ。ブラックは変身を解いてイースナになるのではなく、弁の立つ善いい沙すな闇あん子この状態へと移行し、皆話し合いに備えた。
「…………」
　着座を促うながされる前に、唯乃は部屋の壁を裏うら拳けんで軽く小

突くと、続いて手の平をゆっくりと押しつけた。丹念に材質を確認しているように見える。
　それぞれがいつもの席に、唯乃はいつも母さんが座っている上座についた。
　愛あい香かは前置きなどもはや不要とばかりに、有無を言わせぬ迫力で唯乃に詰問する。
「洗いざらい話してもらうわよ。何でそーじを襲おそったの」
「何でもなにも、そもそも俺様とお前らツインテイルズは、友ダ達チであっても仲間じゃねえだろう。時には殴ってでも間違いをわからせねえと……それが友情ってもんだ!!」
「友達でもないわよ！」
　愛香も拳こぶしと拳でわかり合うことを好んではいるが……さすがに今は唯乃の意見を否定した。
「少なくとも、俺様は総二のことを友ダ達チだと思ってるぜ!!」
　まあ、俺様は仲間だろうとも拳で語り合うがな、と笑うポニーテールの少女。
　愛香の怒気を感じていないはずはないが、唯乃はいつも通りの飄ひょう々ひょうとした態度で受け流す。
「そうやって友情の殴り合いとか息巻かなきゃ、こんなことにはならなかったでしょ!!」
「じゃあ逆に聞くが、こんだけその友達や仲間がガン首揃えて、今まで誰も総二がおかしいとは思わなかったのか？　何かこう、ツインテールすぎる……ってよ」
　俺が、ツインテールすぎる。
　今となっては、ぐうの音も出ない的確な指摘だ。誰もそれについては反論しようとしない。
　愛香がテーブルを両手で叩たたいて身を乗り出す。

「そーじがツインテールすぎるのは、ツインテイルズになる前からよ。そーじのことは、あんたよりあたしが……あ、あたしたちの方がずっとよくわかってるわ！　あんた、いつもいつも後先考えないで脊せき髄ずい反射で行動しすぎなのよ、この脳筋!!」
　我われらツインテイルズが全異世界に誇る脳筋ファイターにそう揶や揄ゆされ、何をう、と唯ゆ乃のも負けずにテーブルを叩たたく。デートの時にも着ていた薄赤色のチュニックは存分にその振動を受け止め、ふくよかな胸を弾ませた。
　愛あい香かの視線が唯乃の胸元に突き刺さる。
「胸揺らすんじゃないわよ！」
「揺れちまうんだよ！　俺様は!!」
　不毛な応酬を挟んで愛香と睨にらみ合いながら、唯乃は続けた。
「時間がねえから急いだんだ！　総そう二じがあの時戦ったのが俺様じゃなくティラノギルディなら、死んでたかもしれねえぞ！　ティラノギルディじゃなく、自分自身のツインテールに倒されてな!!」
「あんたまでそんな何でもかんでもツインテールなそーじ語を……どういう意味よ!!」
　イースナともよく喧けん嘩か腰になる愛香だが、唯乃とはなおのことお互い一歩も退ひかず、まさに火と水の関係だ。一緒になって向かっていくはずのトゥアールが言葉少ななのは……すでに知っているからだろう。
「今のテイルレッドじゃ、これからどんどん強くなっていくエレメリアンには勝てねえ。だが総二は、ツインテールを守るためなら平気で限界を超えやがる。そうして到達した最後のパワーアップが、フォーライザーチェインとかいう最悪の自滅変身だ!!」
　唯乃は顎あごで壁に面したメインモニターを示す。
　もちろん事前の打ち合わせなくタイミングよく映るはずもなく、あ

れ、とトゥアールを二度見する。やれやれと溜ため息いきをつき、トゥアールはモニターに戦闘映像を映した。
　フォーライザーチェインが発動したところで映像を止め、自滅変身と揶揄されたその姿が皆の眼前に晒さらされる。
「属性力エレメーラそのものにダメージを負わせながら、力を際限なく高める自傷形態。俺様が戦わなくても、この先の敵との戦いで総二はいずれ必ずあの変身をしていたはずだ」
「あれが……フォーライザーチェイン……」
　自身だけではなく仲間の進化をいつも満面の笑みで喜んでいた慧え理り那なも、今回ばかりは画面に映る俺の決死の姿を前に、表情を曇くもらせている。
「お前ら揃いも揃って総二のヤバさに気付いてなかったんだろ。それとも、気付いててスルーしてたのか？　ティラノギルディでさえ、属性力エレメーラを奪った瞬間に気付いたみたいだぜ。こいつは属性力エレメーラが肉体を侵食し始めていてやべえ、ってな」
　属性力エレメーラの問題なのだ、見た目は今のように人間そのものな唯乃だが……フェニックスギルディ、精神生命体エレメリアンである彼女だからこそ気付けたのではないだろうか。
　俺自身、自分に何の疑問も持たなかったのだから。
「観み束つか君の変調に気付けなかったこと……それはわたくしたちの落ち度かもしれません。ですが……何も観束君を戦いで屈伏させなくても、最初から全てを説明して話し合えば！」
　話し合い、わかり合う……慧え理り那なの提案は、唯ゆ乃のと戦う前に俺も望んだことだ。けれど結局俺たちは、戦いを通してしか互いの信念を語れなかった。
「仮に俺様が、これ以上強くなったらまずいぜ、と忠告したとするぜ。んで、総そう二じもその場では聞き入れたとしてだ。さっき言ったみて

えな強つええ敵が現れた時、こいつがパワーアップを躊躇ためらうと思うか？　絶対に、自分を犠牲にしてでも力を求めるぜ!!」
　唯乃は語調を和やわらげつつも、俺自身より俺の身体からだを知っているような確信と共に、慧理那の問いを返した。
「もっと言やあ、ツインテールを愛することをやめろってこいつに言って、できると思うか？　気持ちで抑え込めるもんじゃねえさ、属性力エレメーラは。気持ちそのものなんだからな!!」
　太陽が常に膨張を続けるように。俺のツインテール属性もまた、どこまでも大きく成長していくだろう。
　好きだという気持ちは、止めようとして止められるものではないのだから。
「つうか俺様も、一応今回はちゃんと早とちりな可能性を考えてよ、総二のことはデートしながらずっと観察したんだぜ？　デートしながらな!!」
　強調するように二度言う唯乃を睨にらみながらしばらく黙っていた愛あい香かだが、トゥアールに向き直り、思いのたけをぶつけた。
「トゥアール……あんた知ってたの⁉　強くなりすぎた属性力エレメーラは、持ち主の身体を蝕むしばんでいくって……!!」
　ビクリと身体を震ふるわせるトゥアール。
「やめろ愛香。たとえ知ってたとしても……トゥアールは悪くない」
　唯乃の言う通りなんだ。
　もし、属性力エレメーラが高まり続ければ危険だと知っていて……俺は、我わが身の安全のために弱くあろう、あいつらに負けても仕方がない、と思えたか？　そんなの御免だ。
「すみません愛香さん……知りませんでした。私はずっと、属性力エレメーラを安定して運用することを最優先に考えていて……長い戦いで、一度もそんな危機に直面しませんでしたから……」

「……ごめん。あたしもヒートアップしすぎた」
　トゥアールのあまりに悲痛な表情を見て我われに返ったのか、矛ほこを収める愛香。
「むしろトゥアールは、俺たちのストッパーだった。悪いのは、その忠告を無視して暴走した俺だ」
　闇あん子こは眼め鏡がねのブリッジを指で押し上げ、
「……トゥアールもわらわも、そこまで考えが及ぶはずがなかろう。何せ、この世界の今の状況はあまりにもイレギュラーじゃ」
　粛しゅく然ぜんとした口調で補足した。
「──他の世界は全て、ここまで戦士の力が強くなる前に滅ぼされておるからのう」
　無数の平行世界。その中で繰り広げられる、同じだけ無数の戦いがある。だが今や俺たちの戦いは、そんなエレメリアンと人間の戦いの歴史の中でも、完全に未知の領域へと突入してしまっているんだ。
　その未知の最たるもの。今日明らかになってしまった俺の間違った進化についての説明を、トゥアールは唯ゆ乃のに求める。
「結いわ翼ばね唯乃。肝心なことを話していませんよ」
　唯乃はポニーテールの結び目を抱くように後頭部で手を組むと、観念したように嘆息した。
　そして、デートの最後に俺へ語り聞かせたツインテールの真実を、今度は愛あい香かたちに詳つまびらかにしていく。
　唯乃への殺気に強こわ張ばっていた愛香の表情が、見る見る困惑を張り付かせていった。
「……究極の……ツインテール？」
　ある程度通信で聞いていたはずのトゥアールも、改めて聞くその度外れた特性に疑念を抱く。
「世界中の人間を、強制的にツインテール属性に……やはり信じられま

せんね」
　皆が訝いぶかしむその荒こう唐とう無む稽けいな伝説を補足したのは、闇あん子こだった。
「いや……。そういえば、首領がほざいておった。最強のツインテール属性を持つ者は、全次元全異世界を支配すると。話半分に聞いていたが……焼き鳥の言う通りの特性を持つならば、合点がゆく」
　やはりアルティメギル首領は、知っていて求めているということか……全ての属性力エレメーラを支配する、その存在を。
「それが……究極のツインテールという存在なんですの……？」
「だが焼き鳥、貴様以前わらわと戦った折、総そう二じが成長するのを喜んでおったではないか」
「あん時はまだ、ちっとはヘンテコだが普通の進化をしているように見えたからな。四し頂ちよう軍との戦いが激化していくうちに、いよいよおかしな方向に行き始めたんだろうよ!!」
　ライザーチェインとフォーラーチェインへの進化。そしてその後経験した異世界での戦いで、ツインテールによる五感突破を果たした。
　そのあたりから、俺のツインテールは暴走し始めたということか……。
「俺様の親友は……究極のツインテールの真実を知って、危き惧ぐしたみてえだ。トゥアールの姉ちゃん、あんたの世界であんたに技術を託したエレメリアン……ペガサスギルディはな」
「その世界で最初に現れるエレメリアン──この世界ではリザドギルディでしたが、どうやら私に接触したエレメリアンは、他の異世界とは事情が違うようですね」
　椅い子すを回転させ、身体からだごと唯乃に向き直るトゥアール。彼女の真剣な眼まな差ざしを受け、唯乃も同じように向き合う。
「ペガサスギルディは、一般の尖せん兵ぺいじゃねえ。アルティメギル

史上最高の頭脳を持つと言われた科学者だ。そいつは、首領にバレねえように組織の規定外の技術を人間に渡して、強い戦士が生まれることを望んでた。それを受け取ったのが、たまたまあんただったんだな」
　これまでに何度か名前を聞いた、こいつの親友だというエレメリアン──ペガサスギルディが渡したアルティメギル最高の技術を、最高の天才であるトゥアールが受け取った。その果てに生まれたのが、テイルギアだった。
　そして、その親友であるフェニックスギルディが、何の因果か巡り巡った果ての別世界で、俺たちに真実を語っている。これも、運命と呼べるのだろうか……。
　唯ゆ乃のは先ほど壁を触っていた時のように、テーブルを撫なで擦さすっていたが、何かを確信したかのように笑って、横に座るトゥアールに目を向けた。
「アルティメギル基地に使われてる素材に似てるが、こっちの方が柔軟性があるな。大したもんだ、自分で合金カスタマイズしたのか、あいつのデータを!!」
「私が、運で今の科学力を手に入れたとでも言いたげですね」
「とんでもねえ、その逆さ。運がよかったのはあいつの方だ。あんたのおかげであいつは自分の研究が飛躍的に進んで、感謝してた。テイルギアの技術を逆輸入したのを見てもわかるだろう？」
　トゥアールは言葉の裏に糾弾を感じたようだが、唯乃はそこまで皮肉屋じゃない。
「ペガサスギルディは、人間の心を奪わなきゃ生きられないことを、ずっと気にかけてた。あいつ自身、本来の意味で人間に……ポニーテールの少女に心奪われちまったからな……」
　それが、唯乃が最終闘体である人間の姿の基にしたという、ポニーテールの少女か。

「だからあいつは、人間の進化を望んだ。それこそ、正面からアルティメギルと喧けん嘩かできるぐれえ強い人間が現れることを願って……侵略者とそれを受ける側じゃない、もっと平等な関係を模索したかったんだろうな。それを託した人間が、あんただってこった!!」
「私が……」
「ペガサスギルディが、究極のツインテールについての研究に熱を上げたのもわかるぜ。人間の最大到達点がそこじゃあ、あいつの望む関係とはほど遠い」
　ペガサスギルディは、人間とわかり合おうとした……ということなのか……。
「ところが組織アルテイメギルとしてはそれが最後の目標だからな。元々色々問題児だったのに、ますます目をつけられちまったってわけさ……俺様同様にな!!」
　親友との組織への反逆を誇らかに語り終えて満足したのか、唯乃は軽く伸びをした。
「……さてと、話すことは話したし、俺様は帰るぜ！」
「ちょっと待て、まだ話し合いは……」
　引き留めようとする俺の眼前に、手の平を突き出す唯乃。
「ティラノギルディの野郎の不意打ちを防げなかったのは、俺様の落ち度だ。だから、お前らに色々話した！　だが、こっから先はツインテイルズの作戦会議だろう？　俺様はツインテイルズじゃないんでね！」
　からっとした口調とは裏腹、そこには強い意志を込めた拒絶を感じた。
「これからあんた、どうするつもり？」
　愛あい香かに問われ、唯ゆ乃のは、
「どうもしねえ。ティラノギルディには頭に来てるが、だからってお前らツインテイルズと一緒に戦うのも違うからな。今まで通り、俺様はこ

の世界の行く末を見守るだけだ」
「……ハナっから期待してなかったけどね」
　あくまで、自分自身の正義で動くという。
　俺を戦えなくするという目的自体は結果的に達成されたのだ、それも当然だが。
「デートが中途半端に終わっちまったのは心残りだな！　またしようぜ、総そう二じ!!」
「お前な……」
　この掴つかみどころの無さ、尊敬さえする。
　トゥアールはしっしっと手を振り、出入り口のドアを示して退出を促した。
「さっきのゲートで帰ってください。一方通行で一度だけ使えるように用意してありますから、何もせずに潜くぐればいいです。手近な出現ポイントに飛びます」
　対応は相変わらずぞんざいだが、誰だれの付き添いもなく一人で基地の廊下を歩かせようとするあたり、トゥアールの唯乃への警戒心は薄らいだのかもしれない。
「──おう、トゥアールの姉ちゃん！」
　唯乃が軽く放り投げた何かが、弧を描いて飛ぶ。トゥアールはそれを、危なげなく両手でキャッチした。
「……何ですか、これは」
　渡されたのは、スマートフォン大の白い板だった。
「ペガサスギルディの研究室ラボに残してあったデータだ。あいつが研ま究とめた、究極のツインテールに関する考察が入ってる」
　皆でそのデータ端末らしきものに注目する。入出力のための端子がどこにも無く、完全な板状にしか見えない。
「他にも色々入ってるみてえだが、プロテクトがかかって俺様は読めな

かった。ま、あんたなら何とかなるかと思ってな!!」
「そんな重要なものを、私に……」
「諸々の侘わびと……基こ地こへ招待してくれた礼だ。あんたに渡すなら、あいつも文句はねえさ！」
……とんでもないものじゃないのか、これは。
今まで俺たちは、現れるエレメリアンを倒すばかりで、奴やつらの内部事情を知る術すべはなかった。長く組織に在籍していたイースナでさえ同様だ。
だがこれは、組織でも最上級レベルの機密事項が記載されたファイルなんだ。
「それと総そう二じ」
「あ、ああ」
出入り口へは向かわず、唯ゆ乃のはポニーテールをはためかせて俺の元へと歩み寄って来る。
立ち止まり、真まっ直すぐ俺を見つめるその瞳ひとみは、不覚にも意識が吸い込まれてしまいそうなほど凛り々りしく輝いていた。
「気付いてるか？　お前、ティラノギルディにちゃんと怒れたんだぜ。普通は属性力エレメーラを奪われたら、覇気も気迫もからっきしになっちまうってのによ」
唯乃は乱暴に俺を引き寄せると、うって変わって優しく抱き締めてきた。押し当てられた胸からは、穏やかな鼓動が伝わってくる。
「唯乃……」
「……お前はこんなところで終わる奴やつじゃねえ……俺様の惚ほれた男だからな」
どぎまぎする俺を見上げてにかっと笑うと、唯乃は突然バックステップして俺から離れた。
直後、愛あい香かの飛び蹴げりが唯乃のいた空間を掠かすめていく。

「本当に手も足も速はええ姉ちゃんだ！　いつかあんたとも思う存分喧けん嘩かしてえな!!」
「いつかじゃなくていいい、今あたしと戦いなさい！　気が収まらないのよっ!!」
　愛香は掌しよう底ていを突き出し──うっかり唯乃の胸に触れてしまった。



「お？」
　嘘うそだ、嘘であってくれと、愛あい香かは神に縋すがるように唯ゆ乃のの胸を揉もみしだく。
「……何よ、本当に柔らかいじゃない……エレメリアンのくせに……!!」
「身体からだがポニーテールにくっついてきたんだよ。胸のことまでは知らねえよ」
「興味ないならこの胸寄越しなさいよ！　エレメリアンなら取り外しできるでしょうが!!」
「さすがに無理だなあ」
　見る見るうちに愛香は気迫を萎なえさせ、可哀想になるくらい項うな垂だれてしまった。
　唯乃は自分の胸を掴つかみ続ける愛香の手を払いもせず、不思議そうに俺の方を見てきた。
「総そう二じに胸触られた時は、何かむずむずして気持ちよかったんだけど、この姉ちゃんじゃ全然だな。何でだ？」
「ッ……そ、それ……は……」
　ようやく手を唯乃の胸から離し、何か言葉を探し倦あぐねているように見える愛香。
　答えを求めず、唯乃は俺たちに手を振った。
「じゃーな!!」
　ダンスを踊るように回転し、流れ星のようにポニーテールを舞わせる唯乃。
　今度こそ振り返ることなく、コンソールルームを後にした。
　それを見送る闇あん子こや慧え理り那なからは、やるせない心情が窺うかがえた。
「焼き鳥の奴やつめ、本当にどんどん人間に近くなっておるのう……こ

の非常時に、何な故ぜか気が緩んでしまうわ」
「……彼女を見ていると、つい考えてしまうのも無理はありませんわね。人間とエレメリアンが、わかり合えないかと──」
　人間らしくなっていくエレメリアン。そして、俺は逆に──。

◇

　ツインテイルズ基地最奥の転送ゲートへと向かう最中、唯乃は不意に足を止めた。
「見知った気配があると思ったら……あんただったのか、マスター」
　廊下の曲がり角からゆっくりと姿を見せたのは、未み春はるだった。
　いつもの女幹部コスを披露すれば、唯乃ならばノってくれただろうが、今は普通の私服だ。
「……驚かないの？　唯乃ちゃん」
　珍しく憂いを帯びた表情を浮かべ、肩をすくめる未春。言葉にも、どこか影が見える。
　行きつけの喫茶店の店長マスターが、こともあろうかツインテイルズの基地の中にいる。突き抜けた偶然をすんなりと享受するその理由を、唯乃は嬉うれしそうに語った。
「実はよう、喫茶店みせで初めてあんたを見た時、何か懐かしいような気がしたんだ。……まさか、総そう二じがあんたの息子さんだったなんてな」
　初対面で懐いだいた既視感が、今、言葉なく未み春はると総二の関係を唯ゆ乃のに理解させた。
「まさかはこっちよ。デートの締めに、総ちゃんと戦い始めるなんてねー……違う運動にしておけばよかったのに」
　未春は表情を和やわらげ、いつもの剽ひよう軽きんな口調で負けじと

冗談を返した。
「ん？　そういやあん時マスター、俺様にデートしてみたらどうだ、って……ああ！　あんた、最初っから俺様の正体知ってたのか!?」
「まあね」
「それで客として迎え入れるなんざ、総二の母ちゃんだけあってすげえ肝っ玉だな！　一応怪物だぜ、俺様は!!」
「何言ってるの、今はそんな可愛かわいいのに。総ちゃんを好きな女の子なら、元怪人でも大歓迎よ！」
　元じゃねえんだけどなあ、と笑う唯乃。
「何で総二たちのとこに来なかったんだ？」
「今回は総ちゃんが本当に落ち込んでるんですもの……母親の出る幕はないわ！　愛あい香かちゃんたちが代わる代わる身体からだで慰めてくれるのを、陰から見守らなくちゃ!!」
「今のあいつなら、胸とか触って喜ぶかな？　やっぱ俺様も、もう一度戻っかな……？」
　未春は真顔で思案している唯乃を、嬉うれしそうに見つめた。
「私があげた服……着てくれたのね、唯乃ちゃん」
「ああ。総二も喜んでたみてえだ。ありがとよ、マスター」
「その服ね、総ちゃんが着るはずだったものなのよ」
「…………………………マジか？」
　総二がスカートをはいている姿を想像したのか、思わずたじろぐ唯乃。
「と言っても、一度女の子の姿になったまま戻れなくなった時にね。レッドちゃんより少し成長してたの」
「あいつ、いろんなこと経験してんなあ……」
「──だから、今回のことも数ある経験の一つとして……総ちゃんたちは乗り越えるはずよ」

　未春の瞳ひとみに宿る光の強さを見て、唯乃は安あん堵どしたように苦笑した。
「俺様とあんたのこと。他の奴やつには黙っておいてくれよ」
「わかったわ」
　それはむしろ、未春を思っての提案だった。
　未春がいつもの好奇心でデートを焚たきつけ、結果的にそれが総二のツインテール属性消失の遠因になってしまったと知れば、皆の胸中は複雑だろう。
「そのうちまた、店に行くぜ。あの店のコーヒーは気に入ってるからな!!」
「……ええ。待ってるわよ！」
　去りゆくポニーテールを見つめる瞳ひとみは優しい。
　遊び半分でデートを焚たきつけたわけではない。未み春はるは信じていた。かつてここに転がり込んできたイースナがそうだったように、総そう二じと触れ合うことで、唯ゆ乃のは変われると。
　そして総二自身にも、必ずいい影響があるはずだと……。
　もちろん、トゥアールたちに期待している、総二を中心としたハーレム。
　賑やかな日常を、等しく唯乃にも期待していることが、一番大きいのだが。

◇

　唯乃が去った後、トゥアールは彼女に託されたデータ端末を無造作にテーブルの上に置いた。愛あい香かはそれが気になっているらしく、ちらちらと視線を送る。
「トゥアール。その中に、アルティメギルの本拠地の情報とか入ってな

いかな？」
「それに連なる情報は私も期待していますが……すぐに解析するわけにはいきません」
　トゥアールは、リスクを考慮して慎重さを説いた。
「ハッキングプログラムが組み込まれていたら、この基地を乗っ取られてしまいますからね。フェニックスギルディが知らない間に、第三者の手で細工が施ほどこされ罠わなにされている可能性は大いにあります」
　解析され、望みの情報が手に入ったら、愛香はすぐにでも行動に移すだろう。アルティメギルの基地に攻め込みたいというのは、かねてからの愛香の悲願だったからだ。
「……それでは、これからについて作戦を立てましょう」
　唯乃の説明で得るものは大きかったが、当面の問題はティラノギルディをどうするかだ。
　と、その時、メガ・ネがおずおずと申し訳なさそうに手を挙げた。
「あんな、ウチ、気になってたんやけど……」
　普段、会議では滅多に意見を出さず、いつも黙ってイースナの側そばに控ひかえているメガ・ネが先陣を切って意見を出すのは珍しい。皆彼女に注目する。
「イースナちゃんが大事にしてたトゥアールはんの写真……ツインテール属性が無くなったら、写真の中のトゥアールはんまでツインテールじゃなくなってしもてん」
　属性力エレメーラは過去にまで遡さかのぼって本人の有様を改かい竄ざんする。ツインテール属性を失ったトゥアールは、過去に撮影された写真までツインテールではなくなってしまったのだが──

「───今世界中にあるテイルレッドちゃんの写真とか映像……まさか、総そう二じ君の顔になってまうんかな……」

全員、血の気が引いていくのがわかった。俺に至っては、引いた血が逆流して口からシャワーになってもおかしくない衝撃だ。

テレビの映像が。写真が。グッズが。

テイルレッドを映したあらゆる媒体が、一斉に俺に置換されてしまったら。

テイルレッドの正体が全世界に知れ渡ったら、俺はもう、普通に生きていけなくなる──。

◇

総そう二じたちとは真逆に、ティラノギルディは堂々と胸をそびやかして基地へと凱がい旋せんした。

サプライズがあるとだけ事前に伝え、大ホールに兵を集結させている。

これを見た時の兵たちの驚く顔を想像し、ティラノギルディは貫禄ある笑いを浮かべた。

ホールへの道すがら、突如として生えてきたツインテールに改めて触れる。

よりサプライズを確たるものにしようと、ティラノギルディはボロボロになったマントを外してほっかむりにした。

ツインテールが見事に隠れたが、頭が巨大化して頭身が下がったように見える。

ホールに入るなり、大おお仰ぎように周囲を見渡す。戦士たちは微動もせず静寂を守っている。

ティラノギルディはホールの壇上に立つと、念のため用意したカンペを皆に見えないように補助台に乗せた。
そして、厳おごそかな語り口で顛てん末まつを報告する。
「──皆の者。知っての通り、先頃この俺自ら出撃し、ツインテイルズと一戦交えて参った」
勿もつ体たいつけた動作で全身の傷を皆に見せるティラノギルディ。
剛戦士が歴戦の勲くん章しようとして傷痕を誇るというよりは、擦すり剥むいた膝ひざをクラスメイトに見せてはしゃぐ小学生を思わせる。
次の言葉に、場はさらに引き締まった。
「共に戦ったブラキオギルディは、勇猛な戦いの果てに散った。だがそれは大いなる戦果の礎いしずえとなった！」
「……ブラキオギルディ殿……」
戦士たちが微かすかに口にするは勇者の名前。心に押し抱くように、すぐに静寂が戻る。
これまであえて部下の最期を悪あし様ざまに嗤わらい、続く部下たちを奮い立たせてきたティラノギルディが、偽りなく部下の栄光を讃たたえる。大いなる戦果を手にした今、憎まれ役を引き受ける必要はなくなったということだ。
テイルレッド打倒の事実を明かせば、かつてないほど士気は上がるだろう。
存分に溜ためを作り、ティラノギルディは諸もろ手てを空に広げ、勝利を高らかに謳うたい上げた。
「よく聞けい皆の者──この帝王ティラノギルディ、先ほどの戦いでテイルレッドを堂々打倒に至った！　我われらアルティメギルの勝利をここに宣言する‼」
だが、ホールは変わらず完全なる静寂を敢行した。
「……あれっ」

　期待していた歓声がいつまで待っても到来せず、ティラノギルディは目を白黒させた。
　思い返せば、最後の方が少し噛かみ気味だったかもしれない。もう少し感情を乗せた方が心に届きやすいだろう。カンペのペーパーノイズが入った可能性も捨てきれない。
　検討できる限りの反省点を脳内で列挙し終えると、今度はホールの奥にも届くよう腹から声を出すティラノギルディ。
「よく聞けい皆の者───この帝王ティラノギルディィ……、先ほどの戦いでテイルレッドを堂々ッ！　打倒に至った！　ン我われらアルティメギルの勝利をォ、ここに宣言するッッ!!」
　一人で台本カンペを作成し、一人でレコーディングを行い、一人でディレクションして一人でリテイクする。
　流れるようなセルフアフレコも、二度目でいよいよ完成を見た。
　今度こそ割れんばかりのウイニングコールを一身に浴びるだろうと確信していたティラノギルディの期待は──変わらず続く静寂に裏切られる。
　本人は気付いていないが、兵たちのティラノギルディへの対応は、かつての指揮官ダークグラスパーがわかりやすすぎる偽りの武勇伝を語る時と同じ、大人のスルーだった。
　因果応報。日頃の行いは、人生で最も輝くべきその日に跳ね返ってくるのだ。
「……スパロウギルディよ」
「は、ははっ」
　多分に怒気を孕はらんだ声で呼びつけられ、参謀スパロウギルディは姿勢を正した。
「俺は今、こやつらにとっても今世紀最大のニュースを伝えておると思うが、この無反応ぶりはいかがなことか」

「は……も、もしよろしければ、ティラノギルディ様の勇姿を収めた戦闘映像を我々にもお見せ頂きたく……」
「ない」
「左様でございますか」
　極限まで気を使った「証拠見せろ」という進言をあっさりと切って捨てられ、スパロウギルディが困り果てている。
　当然の処置だ。戦闘映像を残してなどいたら、テイルレッドが男だと皆にばれてしまう。
「……ダークグラスパー様もかつて、テイルレッドとちゅーをしたという一大ニュースを記録せなんだですが、やはり大一番の勝負とは記録に残しがたきものなのでしょうか……」
　もっともテイルレッドのキスに関しては、その時ダークグラスパーが全裸でお股にＱＲコードのシールを貼はっていただけの異次元ファッションだったせいなので、また別の事情だが。
「貴様たち雑ざ魚こどもは、帝王の一挙手一投足に歓声を上げるのが仕事であろう！　つい昨日も、戦闘中にうっかりくしゃみをしたテイルレッドをスクリーンに大写しになったのを見て、割れんばかりの歓声を上げていたではないか！　あれを俺に捧げよ‼」
　帝王が早くも憎まれ役として再デビューし始めているが、一般兵とはいえプライドがある。ティラノギルディのために歓声を上げる仕事など、まっぴら御免だ。
　レッドのために歓声を上げる栄職なら、喜び勇んで就職するが。
「くしゃみですか、あれはキュートでございましたからな……」
　テイルレッドのくちゅん、という可愛かわいいくしゃみを思い出したのか、好こう々こう爺やよろしくスパロウギルディは顔を綻ほころばせる。
　相変わらず場の空気が読めず、ティラノギルディはわなわなと拳こぶ

しを握り締めた。
「貴様ら、それほどこの帝王のくしゃみが見たいか!!」
〝こより〟をどこからともなく取り出し、聖剣よろしく大仰に構えるティラノギルディ。
　レッドのプリティなくしゃみの記憶を、いかついおっさんの記憶で上書きされてはマジで困る。戦士たちは脳内の記憶領域の上書き不可のツメを下ろし、まばらな拍手を贈り始めた。
「うぬう！　何としょぼいリアクションか！」
「ティラノギルディ様……恐れながら、皆、その被かぶり物が気になっておられるのかと」
　自分も大分気になっていそうな口調で、スパロウギルディが進言する。
「ふん、これか」
　突如として出撃した司令官。その戦闘の様子が中継されるわけでもなく、いざ帰還すれば、頭が丸めたマントでアフロのようになっている。
　ツッコミどころか否かの判断は難しく、兵たちが黙りこくるのも無理なきことだった。
「よかろう。場の温めも満足にできん貴様らには、サプライズなど上等な演出すぎたわ!!」
　ティラノギルディはほっかむりを取り、ツインテールをまざまざと見せつけた。
「───見よ！　このツインテールを！　レッドを打倒した記念に、この帝王もツインテールを我わが身に宿したわ!!」
　テイルレッド撃破の報と双そう璧へきを成す──総そう二じ風に言えばツインテールのもう一房。この二房目のニュースを以もつてして、サプライズは完成を見る。
「……ツインテールだが」

　さあ見なさい、とばかりに指でぴこぴことツインテールを指し示すティラノギルディ。
「□□□□□」
　──無慈悲なり、０デシベル。
　今度こそ！　という淡い期待は、あくまでも続行される静寂でついに打ち砕かれた。
「……わかった。もういい。解散しろ」
　しょんぼりと項うな垂だれ、重い足取りでホールを去ろうとするティラノギルディ。
　直後──雪崩なだれを打ったようにホール内の兵たちが殺到し、あっという間にティラノギルディを囲んだ。
「ティラノギルディ様！」
「おお、我われらが帝王!!」
　まずは、咄とつ嗟さに沸わけなかったことを謝罪する部下たち。だが、その理由はティラノギルディの想像の範はん疇ちゅうを超えていた。
「……面めん目ぼくありませぬ。その、あまりのツインテールの美しさに見とれておりました……」
「えっ」
　サプライズをサプライズで返され、きょとんとするも、すぐに威厳を取り繕つくろう帝王。
「……あ、ええと……フッ……フフフ、華々しいか、この帝王のイメチェンが!!」
「「「何と、イメチェン!?」」」
　雄お々おしい帝王が放ったチャラい一言にも、一同は感嘆交じりのどよめきで応じる。
「だから何な故ぜ信じぬか！　見よ、テイルレッドと同じ真紅のツイン

テール！　これこそが、勝利の証！　勝利者のみに許されし聖なる杯さかずきよ!!」
「では……テイルレッドを倒したというのは、真でございますか……!?」
　部下たちにずーーーーーーーーーっと疑われていたらしい。証拠がないとはいえひどい話だが、皮肉にもツインテールこそがその雄弁な証拠となった。
　部下たちが拳こぶしを突き上げて帝王の勝利を讃たたえる。
「写真を撮ってもよろしいか……!!」
「ふはははははははははは！　とうとうこの帝王の威光に気付いたのだな、貴様ら!!」
　携帯、コンパクトカメラ、果ては一眼レフ。
　戦士たちはこぞってカメラを取り出し、ティラノギルディのツインテールを撮影していく。
　オーディエンスの期待に応え、百変化の帝王ポーズを披露する。
　熟練のコスプレイヤーでも、ここまで千差万別に全角度のレンズを意識した立ち振る舞いはできまい。
　床に寝そべって極限のローアングルからのツインテールをフォーカスするという蛮勇を見せる者まで出る始末。ホールは、沸きに沸いていた。
　至福に包まれるティラノギルディだったが──
「───うぐ……！」
　小さな呻うめき声は、歓声に掻かき消えた。
　生えたツインテールが律動している。
　自分の胸に、光のヒビのようなものを幻視し──ティラノギルディは、慌てて胸を押さえる。無茶の代償に、身体からだは確実に蝕むしばまれていた。

（だ、大丈夫なはずだ……）
　リングに格納できない以上、テイルレッドのツインテール属性の隠し場所は自分の体内を置いて他にない。
　せっかく部下の人気を得始めたこの好機、断じて逃のがせない。
　この痛みはブラキオギルディ……それにプテラギルディやトリケラトップギルディら、多くの部下たちの殊しゅ勲くんなのだから。
　苦痛を噛かみ殺し、ティラノギルディは部下たちにポーズを提供し続けた。

◇

「ど、ど、どうしよ、レッドの正体がバレたら……普通に生活できなくなるよ!!」
「もう、世界でテイルレッドを知らない人はいませんわ……大変なことになります!!」
　メガ・ネの意見で、愛あい香かと慧え理り那ながパニックになる。メガ・ネが申し訳なさそうに二人をなだめるが、その不安を払拭したのは、彼女の相棒である闇あん子こだった。
「落ち着け貧乳、ドM。先ほどレッドの戦闘映像を見たじゃろう、今のところは無事じゃ」
「今のところって何よ、もうすぐそうなるっての!?」
　闇子が貧乳と言っているのに反応しないあたり、愛香の狼ろう狽ばいは相当なものだ。
　俺も取り乱しそうになったのだが、ここで狼狽した姿を見せたら追い打ちをかけてしまう。背に冷たい汗を感じながら、俺は平静を装った。
　トゥアールはしばらく考え込んでいたが、闇子の言葉を補強するように続けた。

「……属性力エレメーラの消失による記録改かい竄ざんは、肉体と属性力エレメーラの繫つながりが完全に断ち切れた後に始まると考えられます。その前に取り戻せば、大惨事は避けられるでしょう」
　ただし、サンプルケースが限られているので、何もかも不確定事項です。トゥアールはそう付け加えた。
　その少ないサンプルケースとは……当然、トゥアール自身のことでもある。だがそれ自体、エレメリアンに奪われたのではなく、彼女が自ら摘出したという例外中の例外。参考にはできない、と。
「皆さん……アルティメギルの世界侵略の常套作戦、その概要を覚えていますよね？」
　より深刻な、危き惧ぐすべき問題を提起するトゥアールに、各々、続けざまに頷うなずく。
　アルティメギルは意図的に技術を流出させて自分たちに対抗するツインテールの戦士を誕生させ、その少女の活躍で世界中にツインテール属性を拡散。機を見計らって戦士を倒し、人々に芽吹いたツインテール属性を奪取する。
　俺たちの世界は、ツインテール属性が世界にかなり広まった中、アルティメギルの侵攻を食い止めている状態だ。
「ティラノギルディの行動は明らかに時期尚早です。今テイルレッドの正体が世界に広まれば、困るのはこちらだけではありません。せっかく広まったツインテール属性が消えてしまうのですから……」
「！　むしろ、アルティメギル側にデメリットですわ！」
　慧え理り那なが気付き、イースナがそれに続ける。
「……一度芽吹いた属性力エレメーラは、多少のことでは減衰はしない。じゃが、完全に興味を失えば消滅してしまう。そうじゃったな、トゥアール？」
　トゥアールはアルティメギルの作戦を途中で見破り、世界中の人々の

ツインテール属性を消滅させれば世界に侵略価値がなくなることまで突き止めていた。
　それでも、最後の最後まで実行できず、最終侵攻の前に敗れた。
　自分自身でツインテールを消し去る。それは、その世界で最強のツインテール属性を……ツインテールへの愛を持つ彼女にとって、世界の征服と比するほどの絶望だったからだ。
　俺を気遣ってか、愛あい香かが冗談めいた口調で言った。
「あいつ、テイルレッドが男だって知ってヤケになって、この世界を侵攻する気がなくなった、とか……」
「それなら御しやすい……というか、対策も立てやすいです。が、怖いのはもう一つの可能性です」
　トゥアールは俺に目線を送り、申し訳なさそうに俯うつむきながらも、意を決して口を開いた。
「──花を咲かせるための種としてのテイルレッドの役目は終わった……」
　世界に、十分なツインテール属性が拡散した、と判断した……と。
「属性力エレメーラと総そう二じ様の繋つながりが断たれ、世界のテイルレッドの記憶が改かい竄ざんされる前に、総攻撃を仕掛けてくるかもしれない……ということです」
　やはり、そう来るか……。
　作戦の概要を知る幹部ティラノギルディにとって、テイルレッドのツインテール属性を奪うことそのものが、最終侵攻の口火なのだ。

　基地にツインテイルズのメンバーが集まっているこんな時、いつもならとっくに母さんが覗のぞきにやって来ている頃だが、その気配がない。
　そのまま九時を回ろうとした頃、桜さくら川がわ先生が慧理那を迎え

にやって来た。
　桜川先生にも知っておいてもらわなければ。俺は今日の出来事を簡潔に説明した。
「……何だって⁉　ツインテール属性を……奪われた⁉」
　焦るあまり俺に詰め寄ろうとした桜川先生だったが、回りの愛香たちの反応を見て、十分話し合った後だと察したのだろう。大人らしく、すぐに落ち着きを取り戻した。
　桜さくら川がわ先生を見て、俺はもう一つ覚悟を決めなければならないことを悟る。
　自分の右腕を見つめた。
　ツインテール属性を失ったことで、恒常的に可視化されたテイルブレス。鮮烈な輝きに、今は翳かげりがあるように見える。
「……」
　俺は歯を食いしばり、震ふるえる右手に力を込め、ブレスを抜き取った。盗難防止のためのプロテクトなど、あらゆる機能が停止している。
　持ち主にツインテール属性がない限り、これはただのブレスレットなんだ。
　あっさりとブレスは外れたが、俺はなおも未練がましくそれを握り締めた。
　思いを断ち切るように視線を切ると、俺は外したブレスを桜川先生の右手首に填はめ込んだ。
「お？　何だ、どうした観み束つか」
　きょとんとする桜川先生に、俺は願いを伝える。
「俺の代わりにこのブレスを使ってください、桜川先生」
　当然、愛あい香かに猛反発される。
「何言ってるのそーじ、自分で言ってたじゃない！　このブレスは絶対に貸せないって‼」

「……そうだな……。ほんの数日前のことなのに。まさかこんなことになるなんて思わなかったよ……」
　ブレスをたまに交換しないかという慧え理り那なの提案を断ってまで、俺はこのブレスを持つことに固執してきた。
　トゥアールから託された魂を……易やすく々やすと他の人に貸すことができなかったのだ。
　だが今は、俺の個人的感情で我わが侭ままを言っていい場合じゃない。
「桜川先生に戦って欲しいんじゃない。このブレスを、俺の代わりに守って欲しいんだ」
　属性力エレメーラを失った今の俺では、このブレスの認識攪乱装置イマジンチヤフを稼働させることもできない。
「今の俺じゃ、ブレスを隠し通すこともできない。自分のものだけじゃなく、トゥアールのツインテール属性まで奪われてしまうなんて……俺は耐えられない」
　愛香や慧理那は、言葉なく顔を伏せる。
　情けない。
　歯は痒がゆい。
　自分の弱さを吐と露ろするのは、こんなにも悔しいことなのか。
　桜川先生は軽く溜ため息いきをつくと、ブレスを眼前にかざす。
「……ふむ、私も変身すると年齢が下がるのかな。レッドが観束の半分くらいの年齢だから、私なら女子高生になるのかもな」
「え、待──」
　愛香が手を伸ばすよりも早く、桜川先生は変身機構起動略語スタートアツプワードを紡つむいだ。
「テイルオン」
　桜さくら川がわ先生がテイルレッドに変身する……その光景を目に焼

き付けようと立ち尽くしていると、程なく、何の変化も起こらないことに気付いた。
「やはり変身できんな」
　まるで、愛あい香かが初めてイエローのブレスを使おうとした時のように、反応が全く無い。
　アナザーテイルブルーには、あっさりと変身できたというのに。
「わざとやっているわけではないぞ。そんな器用な真ま似ねはできん」
　苦笑する桜川先生。
　どこか冗談めいた口調が不自然だとは思ったけど……桜川先生は、変身できないって最初からわかっていたのか。
「お前たちに交ざって、今まで色々と話を聞いてきたものの、どうも私は属性力エレメーラの理屈についてはちんぷんかんぷんだ。……だがな、そんな私でもこれだけはわかるぞ」
　桜川先生は俺にブレスを返すと、俺の指に自分の指を重ねてブレスを握らせた。
「──これはお前のものだ、観み束つか。この強い思い、私には余る。本音を言えば、お前をそんな目に遭わせた憎き怪人だ、変身して私がこの手で倒してやりたいがな……」
　本当に、他のメンバーではテイルレッドに変身できないなんて……。
　慧え理り那なが歩み寄ると、俺の手を包む桜川先生の手の甲の上に、そっと自分の手を乗せた。
「恐らく尊みことはわたくしのブレスでもブルーの時のように変身できるでしょうが……観束君のブレスは、きっと無理ですわ。それはわたくしも、津つ辺べさんも同じだと思います」
　横から見守る愛香が、同意するように頷うなずいた。
　手の平から伝わる温ぬくもりが、ほんの少しだけ不安を和やわらげてくれる。

「そうじゃ。テイルレッドはわらわの元カノ、その笑顔を取り戻すのもわらわの役目じゃ」
　果てしなく身に覚えのない関係を提示しながら、闇あん子こもその上に手を置いた。
「じゃあ……ウチも！」
　そして、メガ・ネがイースナの上に手を重ねる。
「色々小面倒な話が山盛りだけど……とにかくあたしは、そーじの分まで戦うから」
　そのメガ・ネの硬質な手の上に、心なしか出遅れたという雰囲気を滲にじませながら、愛香が慌てて自分の手を重ねる。
「私の属性力エレメーラを守るためだというのなら──レッドのテイルブレスは、総そう二じ様だけが持っていてください。それが、私の願いです」
「……わかったよ、トゥアール」
　最後に残ったトゥアールも、自分の手を差し出し──何な故ぜか、直前でＵＦＯのような軌道を描いて急降下し、俺の股間へと伸びてきた。
「あんたはこんな時ぐらい照れないでちゃんとやりなさいよ!!」
「てててててててて照れてないですぅー！　愛あい香かさんの手に私の手を重ねたくなかったからですぅー!!」
　みんなとブレスに重ねた手は離さず、しかし残ったもう一方の手でトゥアールの手首を万まん力りきのようにガッチリとホールドする。
　地球人に囚とらわれたトゥアールという名のＵＦＯは、宇宙へと投げ返された。
「……ま、尊みことさんもツラだけはいいですから？　ブレスで変身して小ちっちゃくなるのも見てみたかったですけど」
　皆が俺から手を離すと、トゥアールは白衣のポケットから手の平サイズの機械を取り出した。

「総そう二じ様、とりあえずこれを。簡易版の認識攪乱装置イマジンチャフです」
　桜さくら川がわ先生に渡してあるものと同じやつだな……。
　トゥアールは桜川先生と同じように指を重ね、俺にそれを握らせた。
「それでブレスのツインテール属性は探知されなくなります。だから大丈夫。……私の属性力エレメーラを守るなんて、簡単なんですよ？」
　しんみりとした空気を吹き散らすように、桜川先生はいつものように婚こん姻いん届とどけを俺に差し出してきた。
「そもそも観み束つか、お前が私にはめるのはブレスではなく婚約指輪だろう」
「首輪なら観束君にはめてもらいましたわ!!」
　桜川先生と慧え理り那なを遮さえぎるように、トゥアールが俺目掛けて弧を描き飛来する。
「ええい、ハメたハメられたと実にフェイバリットな会話ですね、私もハメ……交ぜてください!!」
　表情すら変えず、愛香がトゥアールを華麗にレシーブする。バドミントンの羽根のように、緩やかに滞空しては打ち上げられてを繰り返す。
　トゥアールは諦あきらめずに着地しざまに、ぽいぽいと躊躇ためらいなく服を脱ぎ始めた。
「譲りませんよ！　疲れてらっしゃるのにこんなめんどい話ばかりで参っているでしょう、たとえ魂だけとなろうとも総二様を全裸にします！　私も全裸になります!!」
「あんたの魂は引きずり出し飽きたわよ!!」
　脱いだ服の全てをジャグリングの要領で一枚も落とさずキャッチすると、愛香はトゥアールに飛びかかった。
「…………もう！　そーじごめん、ちょっと外出てて！　入念に弱らせて無理矢理服着せたら呼ぶから!!」

「……ああ。わかった」
　俺は素直にコンソールルームを立ち去ることにした。
　……多分トゥアールは、俺の前では話しづらい話をしようとしているだろうから……。

◇

　総そう二じがコンソールルームを出た後……絡み合っていたトゥアールと愛あい香かは、ほぼ同時に動きを止め、互いに離れた。いそいそと服を着て、手早く席に戻るトゥアール。
「……ちょっとわざとらしかったですかね」
「まあ、気付いたでしょうね……。でも、そーじの前じゃ話せないわよ」
　不安にさせないよう、本人の前では聞かなかったことを……愛香は質問した。
　先ほどはぐらかした、具体的な部分を。
「──奪われた属性力エレメーラは、いつまでに取り返せば持そちー主じに戻せるの……？」
　黙り込むトゥアールを見かねて、闇あん子こが代わりに答える。
「大抵は二四時間……長くとも二日程度が限度のはずじゃ。個人差はあれ、それ以上保もった試しを知らん。それを過ぎれば、たとえ取り戻しても属性力エレメーラは所有者との繋つながりが切れる」
「「「……!!」」」
　揃って息を呑のむ慧え理り那なと愛香、尊みこと。
　これまでのエレメリアンの出現スパンから考えれば、僅わずか数日で戦って取り戻すのは不可能と言ってもいい。
　たとえ、ティラノギルディが侵攻を急がなければならないにしても

だ。
「──普通の人間なら、そうですが……」
　だがトゥアールは、闇子の説明に異論を挟んだ。
「皆さん、属性力エレメーラを奪われた人間がどうなったか、見たことがありますよね」
　愛香や慧理那、尊は、ロエルやリルナの住む異世界で。イースナやメガ・ネ、トゥアール自身は数え切れないほど見てきただろう。
　属性力エレメーラを奪われた人間は、愛を失った心の隙すき間まを埋められず、どこか無気力になる。
　アルティメギルに侵略された世界が、色彩を失うと言われる所以ゆえんだ。
「観み束つか君は……無気力になるどころか、属性力エレメーラを失ってもツインテールと懸命に向き合っているようでしたわ」
〝ちゃんと怒れたんだぜ──。〟唯ゆ乃のが去り際、総二にかけた言葉を思い出す慧理那。
「総二様の超人的な属性力エレメーラは、精神力そのものも超人的に育はぐくんだということでしょう。その影響でタイムリミットが短いのか、逆に常人より長いのか……私は、後者に賭かけます」
　無気力にならない代償に、喪失の痛みにさらに相乗して抗あらがいの痛みを上乗せしてまで、ツインテールを完全に失うまいと必死に抵抗しているのだろう……。
　トゥアールは、見抜いた総二の気遣いを皆に伝え、その苦しみを慮おもんぱかる。
「総二様の復活のためには、ツインテール属性を取り戻すまで総二様の心が折れずに保つことが最大の条件です」
「観み束つか君が心を強く持ち続けられれば、タイムリミットが延びる可能性がある……というわけですわね」

　神妙な顔でそう告げるトゥアールに、慧え理り那なたちはもう一度、思い思いの表情で頷うなずいた。
「では、皆さんに明日からの作戦を伝えます。私たち全員で──総そう二じ様を支えましょう」
　いつもなら我われが我がと総二に迫るトゥアールが、共同戦線を提案する。
　さすがの愛あい香かも無い胸を熱くさせたが──提案された作戦は、とんでもないものだった。

◇

　俺はエレベーターで基地から喫茶店まで上がり、そのまま外に出た。
　肌を撫なぜる、一〇月の夜風はもう冷たい。
　以前、トゥアールが言っていた。属性力エレメーラは持ち主の身体からだから離れて一定期間が経過すると、二度と元に戻すことができなくなると。
　真っ先に考えなければいけないタイムリミットという問題に誰だれも触れなかったのは、俺を不安にさせまいとしてのことだろう。恐らくは今、その話をしているはず。
「待っててくれ、俺のツインテール……大丈夫さ。きっと取り戻してみせるから……」
　恐怖を払拭し、自分自身を奮い立たせるよう。か細い強がりを星空に紡つむいだ途端。
「……はあ、はあ……ぐ……！」
　我慢していた咳せきを一気にして咽むせるように、荒く息をつく。
　やせ我慢をすることさえ許されないのか。ただ「大丈夫」と口にするだけで、心が軋きしむ。

こんな姿、愛香たちには絶対に見せられない。

全部俺の責任なのに、みんな罪悪感に苛さいなまれていた。これで今のこのザマを知られたら、みんなどれだけ自分を責めることか。

現状は……絶望的だ。

心に穴─どころじゃない。

俺の心の大半はツインテールだった。

それを奪われた今、身体の中に残っているのは、ピースが全て抜け落ちた、ただのパズルフレームだ。

胸がざわつく。

ツインテールはどこだと。

ツインテールはまだかと。

全身の細胞が、俺にツインテールを求め訴えてくる。

だけど、この感覚を疎んではいけない。

痛みさえ感じなくなったその時─俺は、完全にツインテールを失ってしまう。

これは、ツインテールと共に戦い続け、誰だれよりも強くツインテールへの思いを高め続けた俺だからこそ与えられた、僅わずかな猶予リミットだと思うんだ。

未練を感じられることは、元に戻れるという希望でもある。

トゥアールが言っていたじゃないか。痛みは必要なんだと。暴走した俺は、骨折に気付かないでマラソンをしているようなものなんだと。

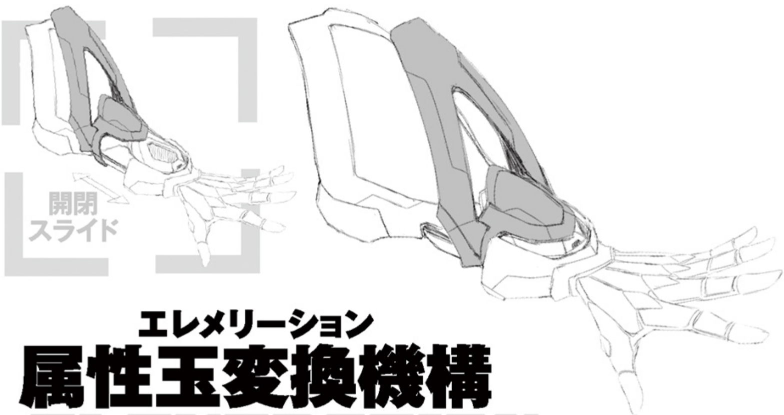
むしろこの痛みに感謝し、自分を奮い立たせろ。

何としてもツインテールを取り戻すと、力の限り燃え盛れ。

この戦いは、今までで最も辛つらく、厳しいものとなるだろう。

──相手は、俺自身だ。

テイルギア設定補足 03



属性玉変換機構（エレメリーション）

ELEMERATION

トゥアールがテイルギアを開発した際、切り札として搭載した装備。倒したエレメリアンの属性玉（エレメーラオーブ）を装填することにより、様々な戦闘補助能力をテイルギアに付加する。必ずしも属性玉（エレメーラオーブ）の持ち主のエレメリアンが所持していた能力を反映するわけではなく、その属性玉（エレメーラオーブ）から抽出される能力の中で最も戦闘補助に適したものをテイルギアが自動的に選別、発動している。そのため、戦闘力に大きく開きのある同属性のエレメリアンであっても、獲得した属性玉（エレメーラオーブ）が発動する能力は全て同一である。逆に言うと、属性から抽出される能力はある程度決まっており、それを発動できるかどうか、別の強力な能力を獲得できるか、あるいは剣術などの戦闘技術に特化するかは、全てエレメリアン次第ということになる。巨乳に縁が無い愛香、母性に縁遠い愛香（あいか）など、使用者との属性の相性や、そもそもテイルギアが能力を認識できず、発動できないこともある。

設定補足02（9巻参照）の通り、同属性の同時使用はあまりに危険であり、持ち主とブレス、役割を別々にしたテイルギアだからこそ安定して運用が可能。そのため、属性玉変換機構（エレメリーション）にツインテール属性の属性玉（エレメーラオーブ）を装填することは、トゥアールに禁止された経緯がある。もし、テイルギア装着者があと一つツインテール属性の属性玉（エレメーラオーブ）を獲得してしまえば、それはツインテール属性の禁じられた共鳴使用となり、自滅をもたらす禁忌のはずなのだが……。

第二章　まともな思春期大作戦。

　ツインテール属性を失うという、人生でも一番の大事に見舞われたのだ。きっと今夜は一睡もできない――そう思っていたが、心身ともに参っていたのだろう。ベッドに横になるやあっさりと眠りに落ち……そして翌朝、俺は日の出を待たずに目を覚ましていた。

　手の平に視線を落とし、緩ゆる々ゆると握り開きしてみる。無感覚に近い痺しびれと、度を超した倦けん怠たい感――やはり睡眠を取っても、身体からだの衰弱は回復の兆しも見えない。

　ベッドから上体を起こし、自室を見渡す。机の横の小屋には慧え理り那なはおらず、クローゼットにイースナの気配もない。

　愛あい香かとトゥアールの喧けん嘩かによる破壊音も聞こえてこない。

　うすら寂しい無音が、仄ほの暗ぐらい自室にはびこっていた。

　風邪など病を患った時、不安で人恋しくなるが……今、まさにそんな心境だ。静寂が怖い。

　登校まではまだ時間がある。もう一度横になろうかと考えていると、遠慮がちに部屋のドアが開けられた。

　小柄なシルエットが像を結ぶ。それが誰だれかはすぐに判別がついた。

「――――慧理那？」

　呼びかけると、慧理那はわかりやすいぐらい大おお仰ぎように身体を震ふるわせた。

　珍しいな。愛香やトゥアールならともかく、慧理那がノックも無しに入室するなんて。

　俺が明かりを点つけて向き合うと、慧理那は挙動不審になり出した。

「お、おはようございますわ、観み束つかく……いいえ！　そ、総そう二じ！」
「え」
　その新鮮な響きに、俺は思わず目を白黒させる。
「ああ……前に電話で俺の呼び方を変えたいって相談してきて、結局そのままだったっけ。今日からそうするのか？」
　慧理那はえっへんと胸を張る。普段の彼女には見られない、珍しく子供っぽい仕草だ。
　こう言うと不名誉かもしれないが、様になっている気がする。
「わたくしたちは幼おさな馴な染じみですもの、名前で呼び合うのは当然ですわ！」
「………………幼馴染？」
　楚そ々そとした寝起きドッキリに、俺は声が上うわ擦ずる。
「今日からわたくしたちは、幼馴染です。毎朝、み……総二を起こしに来ますわ!!」
　この真剣な瞳ひとみ……どうやらいたずらやノリではなさそうだぞ……。
「ずっと津つ辺べさんが羨うらやましかったんですの……わたくしも少しでも多くの時間、観み束つか君の傍そばにいたくて…………あ、あ、あ、あの、傍にいるというのは助けになりたいという意味で」
　なるほど、毎朝のように俺を起こしに来てくれる愛あい香かを見て、それがサポートになると思ってくれていたわけだな。昨日の俺を見れば、寝坊をすると思うのも無理はないか……。
　慧え理り那なは俺の勉強机の横に、別れを惜しむような物憂げな視線を馳せる。
「すっかり愛着が湧わきましたが……この犬小屋とも、しばしお別れですわ。幼おさな馴な染じみとは、平等な関係ですものね……」

差し出がましい意見だが、犬小屋とのお別れはしばしで留めない方がいいと思うんだ。俺たち、今まで不平等な関係だったことが一度でもあったか、慧理那……。
さらに廊下から響いてくる、フリー音源めいた自己主張の強い足音。
「総そう二じく～ん……幼馴染の総二くぅ～ん……」
そして奏でられるは、艶なまめかしくもどこか幼さを演出したような声。妙に身体からだをくねくねさせながら、制服姿のトゥアールがドアを開けた。
「幼い頃から家が隣で一緒にお風呂入ったりお医者さんごっこしたり大人になったら結婚しようねって約束したり最近は互いの身体を意識するようになってきてたまたま今日ムラムラが頂点に達して一緒に宿題やっている途中で押し倒す予定の幼馴染の総二君、起きてぇ～」
「いきなりどうした⁉」
妙に演技がかった言動で、プロフィール紹介じみた長台詞ぜりふを淀よどみなく紡つむいでいく。
「今まで黙ってたけど……実は私、トゥアール星からやってきた宇宙人なんだよっ☆」
「どうやらそのようだな……」
コンタクトの難解さが、明らかに地球の生命体と一線を画している。
「こてん！　はわわ～転んじゃったよう～」
俺のレスポンスの悪さにもめげず、部屋の入り口で豪快に転ぶトゥアール。
こてんと転んだ擬音を自ら口にするあたり、むしろ古典だ。
デジャヴを感じたが……イースナが初めて俺の部屋でやったゲームのヒロインそっくりだ。
昇り来るお日様に先んじ俺の眼前に開帳されたパンツ。
俺の精神力が減衰しているからだろうか、いつも以上に色気を感じな

い。でんぐり返し……いや、お尻をかなり上に掲げた体勢で、足をＭ字どころかW字に曲げて堂々とパンツを晒さらしているのだから無理もない。
「ひゃうう、パンツ見えちゃって恥ずかしいよう」
　羞しゆう恥ちらしき言葉も、突き出したお尻の向こうから申し訳程度に聞こえてくる。
「……」
　慧理那が俺の部屋の只ただ中なかで観葉植物と化したトゥアールに、厳しい眼まな差ざしを向けている。生徒会長として、生徒の服装の乱れを注意せねばと考えているのかと思いきや──
「こてん、ですわ」
「えええええええええええええ!?」
　さすがトゥアールに弟子入りしただけあり、師匠の擬音を早くも体得。慧え理り那なも柔道の受け身の練習じみた軌道で可愛かわいらしく床に転がり、パンツを丸出しに足でW字を描く。
　その横には、依然として微動だにせずパンツ丸出しの体勢を固守するトゥアール。
　俺の部屋が、悪サ魔バ宴トの拠点と化してしまった。
「恥ずかしいですわ……ひゃうう、ですわ……」
　真剣に恥ずかしそうだが、慧理那もまた、どうしてトゥアールに倣ってこんなこと……。
「はっ……」
　Wの字……Ｄｏｕｂｌｅ……二ツインを表す数。
　──そうか、二人は体文字でダブルを表すことで、ツインテールを失った俺を勇気づけようとしてくれているのか。
　弱気と衰弱が先行して、そんな二人の心遣いを危うくスルーするところだった。

　そんな明るさを無尽蔵に振りまくニュー幼おさな馴な染じみ二人とは裏腹に、部屋の隅から感じる鬱うつ々うつとしたオーラ。俺はほとんど習慣のように、クローゼットに視線を送った。
「……総そう二じーさーん……あーさーだーよー……」
　クローゼットの中から、サバトの入会希望者が追加される。多分来ると思っていたので驚かないつもりだったのだが……現れたイースナの出で立ちは、さすがに予想外だった。思わずじっと見つめてしまう。
「……あ、あの……」
　俺の視線に、恥ずかしそうに身をよじるイースナ。
　その初々しいリアクションも当然だ。彼女は、陽よう月げつ学園高等部の女子制服に身を包んでいたのだから。
「……いや、イースナの制服姿……初めて見たから、新鮮で……」
「え、えへ、へ……似合います、か……」
「ああ。似合ってるよ。その制服、どうしたんだ？」
「メ、メガ・ネが……作ってくれました……。そ、総二さんの、幼馴染になる、から……」
　娘のために夜なべするおかん。裁縫道具を手にしたメガ・ネの三角巾にエプロン姿がまざまざと脳裏をよぎり、俺は目頭が熱くなる。
「でも、イースナまで幼馴染って……やっぱり、みんな何か理由があるのか？」
　俺の疑問もそこそこに華麗なブリッジで跳ね起きたトゥアールが、めっちゃ語尾に星がついてそうなきゃぴきゃぴな声を出しながら迫ってくる。
「ひどいんだぞ総二きゅんっ！　パンツ丸出しの女の子よりただの制服ガン見なんてひどいんだぞっ☆」
　直後、プロの技を思わせる瞬間変声でドスの効いた声となり、イースナに凄すごむトゥアール。

「イースナ──パンツも出せない幼おさな馴な染じみは戦力外です、ベンチに座ってなさい」
「出せる……」
　イースナが両手でスカートの端はしを摘つまんでたくし上げ、赤いリボンのついた白いパンツを露あらわにする。トゥアール監督は「仕方ないですね」と敢かん闘とうを認め、選手登録抹消を保留にした。
「……えっと、あの……」
　俺の困惑はどうすれば彼女たちに伝わるだろうか。
　未いまだW字の体勢を維持してパンツを丸出しにし、「足がつりそうですわ」とプルプル震ふるえ出すお嬢様。スカートを持ち上げてパンツを露わにし、眼めをぎょろっと見開いて半笑いで見つめてくるアイドル。
　そして「また転んじゃったよう」と、か弱い声を出しつつもその実、二連転バク宙をして滞空時間中にスカートを捨て去り、着地と同時にパンツ丸出しになる科学者。
　観み束つか家秋のパンツ祭りがしめやかに執り行われ、その只ただ中なかに取り残された俺は恐怖する。
「えへへっ、総そう二じきゅんお寝坊さんなんだぞっ☆　よ～し、お寝坊さんな下半身も起こしちゃうんだぞ☆」
　がに股で跳躍し、すでに起きている俺に向かってウェイクアップを試みるトゥアール。
「お前は全身寝ろおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!」



「すりーーーーぴんッッッ!!」
　部屋のドアをブチ砕き入ってきた愛あい香かが、トゥアールを永眠へと誘いざなう。
　愛香は条件反射のようにツインテールを掻かき上げようとし──俺と目が合うと、慌てて取り止やめ、髪を手で払った。
　僅わずかな逡しゆん巡じゆんの後、トゥアールたちを順に指差していく愛香。
「みんなかぶってんのよ幼おさな馴な染じみが！　元々そーじの幼馴染は私がいるのに意味無いでしょ!!」
　全員で幼馴染を演じているという一点にのみ、愛香の抗議が集中している。世界惨Ｄｉｅ祭りの一つ、パンツ祭りはまさかのスルーだった。
「エロイベントも実用性も皆無の万年エセ幼馴染ごときが未練がましいですね！　今ここに総そう二じ様の幼馴染は誰だれだ選手権が繰り広げられているんですよ!!」
　何な故ぜ渦中にいる俺の意志と関係なく繰り広げられるんだ、その大会。
「説明してくれ、この騒ぎは一体何なんだ！」
　俺が問い質ただすと、意外にも代表して答えたのは愛香だった。
「……そーじのためよ。昨夜、みんなで話し合って決めたことなの」
　愛香は、昨夜俺がいない間になされたという会議を、かいつまんで説明し始めた。

◇

　昨夜──総二が出て行った後の地下基地コンソールルームで、トゥアールは愛香と慧え理り那な、闇あん子こ、尊みこと……それと念のためメガ・ネに向けて、重要な作戦を立案していた。

トゥアールはペン回しのように指示棒をスイングアクションし、モニターに映像を映す。
総二の写真が画面の左半分に。もう半分にはツインテール属性のエンブレムが表示され、それが縮小されて隅に固定された。
代わりに画面右半分に表示されたのは――これまで倒してきたエレメリアンの属性力エレメーラを表す、数々のエンブレムだった。
それが、総二と並ぶことが意味するのは何か。トゥアールは続ける。
「ツインテール属性を失った総二様に、愛香さんたちがツインテールを差し出しても逆効果です。総二様の苦しみが増すだけでしょう。……そこで鍵を握るのが、他の属性です」
わかりやすく、エンブレムにポップアップしていく名称。
人形属性ドール、体操服属性ブルマ……戦いで獲得した順に、属性力エレメーラが列挙されていく。
「個人が持てる属性力エレメーラは、一つではないというのはご存じですね。人は時に様々な趣味嗜し好こうを愛めで、それが心の支えとなります―が、最も大切な属性力エレメーラが奪われた後で別の愛を手た繰ぐり寄せ、心の支えにするのは容易ではありません。近しい人のケアと、アシストが不可欠です」
しかし属性を奪われた人間は、自身の苦悩で手一杯で、他人を助ける余裕が無くなってしまう。互いに支え合うことができない……それもまた、アルティメギルの侵攻を受けた世界の辿たどる結末だ。
「わらわたちがその役目を担い、総そう二じを支えるというわけじゃな」
「これまで学習してきた属性を……ツインテール以外の愛を、観み束つか君に獲得してもらうのですわね？」
闇あん子こ、慧え理り那なが概要を把握する。尊みことは未いまだにちんぷんかんぷんのようだが。

「総二様は、ツインテール一筋に生きてこられました。総二様の心は今、ほぼ完全な空白──本来なら、他の属性の介入する余地などありません、が──」
　これまでの戦いを思い出し、大切な記憶として抱き締めるように、トゥアールは自分の胸に手を触れた。そして軽く揺らし、さりげなく愛あい香かを煽あおることも忘れない。
「総二様はエレメリアンにも共感される心優しい方。他の属性を卑下したり敵視したりせず、全て受け止めてきました。その中に、ツインテールほどではないにしても、総二様の心を奮わせるものがあるはずです。……それを見つけて増大させ、やる気を出して頂くのです」
　早速慧理那が、トゥアールに詳しい説明を求める。
「トゥアールさん、具体的にはどのようにすればよろしいのでしょう？」
「女の子が男の子にやる気を出させる方法は、一つしかありません！」
「…………」
　トゥアールのたったそれだけの言葉を聞くや、頬ほおを赤らめ、顔を逸そらす愛香。
「はい、そこのエロ蛮族はもう察したようですが……気力を保もたせる！　すなわち！　総二様を私たち女子チームが！　己おのれの身体からだで！　徹底的に誘惑するのです‼」
　椅い子すから立ち上がり、マントアクションのように白衣を翻ひるがえすトゥアール。
「これこそ、総二様の男性としての自信を取り戻してもらいましょう大作戦、略して総二様の男性自身です！」
「はあ⁉」
　音だけ聞くとちゃんと略されているはずだが、愛香は違和感に眉まゆを顰ひそめた。

叫びを上げたのは愛香のみ。慧理那は神妙に俯うつむき、イースナは望むところだとばかりに薄ら笑っている。援護射撃がないため、愛香は囁ささやくように抗議する。
「そんなことされたって、そーじは迷惑でしょ。あいつ、女の子の身体に興味ないし……」
「そうとも限りません。結いわ翼ばね唯ゆ乃のの話では、総二様は極大化したツインテール属性の影響で、あるべき性欲が限りなく薄れていたとのこと……それを真実と仮定すれば、総二様を誘惑しまくってきたトゥアールちゃんが今日この日まで処女なままなことも説明がつきます」
「説明つかないでしょ。破は綻たんしてるわよあんたホントに科学者!?　属性力エレメーラが高まる以前に、ずうっと昔からそーじはあたしのツインテールしか見てなくて……何もしなかったんだから」
「そのおっぱいに欲情するのは、エアコンの室外機にも興奮する思春期男子でも無理ですよ」
　憐あわれみの視線を向けたが最後、愛香の腕力でからっと除湿されるトゥアール。
　愛あい香かは（普段は）良識派の慧え理り那なに助けを求めた。
「か、会長～。会長は嫌だよね？　こんな作戦……。あたしたちが誘惑なんて……ねえ？」
「いえ、〝とのがたのゆうわく〟の仕方でしたら、お母様がいつも色々教えてくださっていますわ。よくわからなかったのですが……ようやくわたくしがお役に立てそうで何よりです！」
　むしろやる気満々の慧理那に、愛香は愕がく然ぜんとする。
　次に闇あん子こを窺うかがうが……もちろん、彼女はバリバリ賛成派だった。
「この世のエロゲーを極めたわらわは、男を誘惑するなど造作もな

い!!」
　二次元のＨｏｗ　　ＴｏテクをЗ現実で実践しようとして失敗するテンプレートをそのままなぞろうとしている闇子。だがその心意気は頼もしいだろう。
「……桜さくら川がわ先生は……」
　慧理那が賛成しているのに異を唱えるはずもなく。最後に視線を向けたメガ・ネも、イースナの味方だ。自分がマイノリティの存在、孤軍奮闘だったことを思い知る愛香。
「総そう二じ様を救えて、私たちも積もり積もった欲望を満たせて一石二鳥！　Ｗｉｎ󠄀Ｗｉｎ過ぎるじゃないですか!!」
　無言の愛香を見た後、トゥアールはこれ見よがしに溜ため息いきをついた。
「そうですか、こういう時でも我わが身可愛かわいいというのなら、何も言いません。愛香さんは、エレメリアンとの戦闘の方で頑張ってくださいね。私たちは夜の戦闘を頑張ります」
「ま、待ちなさいよ！　やらないなんて言ってないでしょ!!」
「おやおや大丈夫ですか？　総二様が普通の性欲になられたということは……今まで通りに接しているだけでも、私たちは〝女として〟見られてしまうということですよ？　ちょっとしたことでムラムラされちゃうかもしれませんよぉ？」
　それを聞いた愛香は──
「……ぇ…………」
「慧理那さん慧理那さん慧理那さん！　見ましたか⁉　エロ蛮族の本性を!!」
「津つ辺べさん、今一瞬にこりとされましたわ……」
　実際はにんまりと口角を上げ、瞬時に真顔に戻ったのだが、愛香を注視していた全員に見抜かれていた。愛香は咳せき払ばらいをして誤魔化

した。
「……あんまりエッチなことは無しだからね」
「むっつりの愛香さんの『あんまり』なら、上限スレスレってことでよろしいですね？」
　愛香は肯定も否定もしなかった。
　トゥアールが無言の愛香を煽あおろうとにやけ顔を向けると、愛香は神妙な顔で見返した。
「……ねえ。トゥアールって……トゥアールも、ツインテール属性を失った時……」
　愛香が何かを言いかけたのを察したトゥアールは、殊更に大声を上げてそれを遮さえぎった。
「最近愛香さんにヘタレ呼ばわりされて心外でしたからね！　やる気というかヤる気十分！　私は明日から、総そう二じ様の童貞を奪うまで眠りにつきませんよー!!」
「……見物ね、完徹が何日続くか」
　愛あい香かもそれでトゥアールの意を汲み取ったのだろう。ぶっきらぼうにそう返すに留とどめた。
「では、決行は明日の朝からです！　まずは皆さん、それぞれ効果のありそうな属性を強調した態度で、総二様に接してくださいね!!」
　そうして、会議は終わりを迎えたのだった——。

◇

　以上—愛香たちから説明を聞いたのは本当にざっくりとした部分だったが、要するに俺に、一時的にしろツインテール以外に心を向けて気を紛らわせろ、ということらしい。
「……っていう感じだったんだけど……何でみーんな幼馴染属性チヤイ

ルドフツドを選んでるのよ!!」
　慧え理り那なが恐縮したように畏かしこまる。
「ち、違いますわ……。知っている全ての属性の中で一生懸命考えて、これが一番観み束つか君の支えになると……。津つ辺べさんのような……一番近い関係に憧れたのですわ」
「え、そ、そうかな……」
　あっさりと照れる愛香。
「幼おさな馴な染じみが、一番気安く寝れる関係、だから……」
「え、そ、そうかな……」
　イースナの発言は若干妙だったが、愛香は褒ほめ言葉と受け取ったのか、照れ続けた。
「怒ったり照れたり鬱うつ陶とうしいですね愛香さんは！　何ですかそのちっぽけな自尊心は!!」
「誰だれだってちっぽけな自尊心を大事に生きてるもんでしょうが!!」
　さすがにトゥアールにはむきになる。仲良しだな、本当……。
　ちっぽけな自尊心──そう聞いて俺が思い浮かべたのは……帝王のエレメリアンだった。
「と、とにかく！　協力するって約束なんだから、スタンドプレー禁止！　あたしだって……今回は、下着ぐらい出す覚悟してきたし……本当に必要ならそれも脱……」
「でも愛香さんのパンツいつも湿度高そうですし、共闘の不安要素なんですよね」
　トゥアールに何か耳打ちしていたかと思えば、流れるようにその首を極きめる愛香。
「そもそもそーじの性欲が普通になってるっていう推論、大外れじゃない！　あんたと会長とイースナの三人分のパンツ見てあの通りノーリアクションよ!?」

「うごご愛香さんを見たせいで角度が振り出しに戻ったかもしれなおごごごごごごごご!!」
　突然のパンツ祭りはともかく、みんな一丸となって、俺を励はげまそうとしてくれているんだな……。不安に怯おびえる俺にとって、仲間の存在が何よりも頼もしい。
　二人のじゃれ合いはもう少し続きそうだったので、俺は階段を降りてトイレに向かう。身体からだの感覚が薄いのだ、階段などは特に気をつけて歩かなければ。
　トイレに行くのも神経を使うが……そんな俺の後ろを、イースナがピッタリとついて来ていた。
「あのイースナ、俺トイレに……」
「付き添い、ます。幼おさな馴な染じみ……だし。そ、それに、総そう二じさんは、私の制服姿見ると、嬉うれしい……」
　制服を褒ほめられたのがよほど嬉しかったのか……イースナ、すごく自然に笑っているな。
「ところでイースナ、制服を着たってことは、陽よう月げつ学園に来るのか？」
「あの、ごめんなさい……私、収録があるから……今だけ。……総二さん、専用モード……」
　イースナはスマホを見て、申し訳なさそうにしてきた。なるほど、この後予定があったから、せめてトイレに付き添う、なんて提案したのか。………………そうだよね？
「そ、その分、一つ一つのイベントを、濃密に……。隠しキャラぐらい速く、ゴールしましょう……。わ、私はメインヒロイン、ですけど……」
　例によってエロゲーに喩たとえているようだが、どういう意味だろうか。

「ありがとう、こうして付き添ってくれただけでも十分助かった」
　トイレのドアの前まで来てしまったので、イースナに諦あきらめてもらおうとやんわりと諭さとす。
「今は、最後まで、手伝う……。総二さん、手に力、入らない……でしょ」
　イースナは眼め鏡がねの奥の瞳ひとみをぎょろっと見開き、ドアの前に先回りして通せんぼした。あまり膀胱タンクに余裕がないから、問答を続けていられないぞ……。
「持ちます」
「…………へ？」
「私が、持ちます」
「何を」
「ナn□□」
　イースナが言い終える前に、階上から待ったがかかる。
「イースナアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」
　階段を一足飛びで降りて着地し、トゥアールがイースナをインターセプトした。
「……トゥアールさんの脇わきに、抱えられると……大きなおっぱい当たって、気持ちいい……」
「ですってよ総二様！　イースナごときのレビューにしては気が利いていますね、送料無料にしてあげます!!」
　レビュー特典を受けたイースナが、トゥアールに何処いずこかへと宅配されてゆく──。

　俺も制服に着替え、登校までの間、一階のリビングでソファに座ってテレビを見ていた。

　コメンテーターが鋭い解説をし、バラエティ風味にテイルレッドを特集している。
　いつも通りテイルレッドが画面に映っていることに……俺は安あん堵どした。
『続いてのニュースです』
「あら、この人」
　母さんの声につられて、俺ははっとして画面に意識を戻した。
　しばらくテレビの音が耳に入ってきていなかったが、別の話題に移行していたようだ。

〝デック・ニールソン失踪、マネージャーも行方を知らず〟
〝映画「ＴＷＩＮ ＴＡＩＬＳ」クランクアップ間近に何な故ぜ〟

　行方不明情報を報道していた。
　デックさん……ハリウッドで製作しているツインテイルズの映画で、テイルブルーを演じる世界的に有名な俳優、大変な花形スターだ。
　それが、失踪だって――!?
「この人行方不明なの!?」
　準備を終えたらしい愛あい香かもリビングへと入ってきた。早速ニュースに食いついている。
「制作発表から四か月ですもの、もうすぐクランクアップなのね～、映画。早く帰って来てくれるといいけど」
　しみじみと語る母さん。キャスターの背後のモニターに大写しにされているデック氏を見ていると、俺は妙な懐かしさに包まれた。
「愛香……。俺、この人に会ったことがある気がする」
「ええ!?　そんなはずないでしょ、ハリウッドの大スターだよ!?」
「……そうだよな……」

大スターなのだから、何度もテレビで観ているはずだ。それが、会ったことがあると錯覚させるのだろう。
「でも、そう言われてみればあたしも……って、そんなはずないか……」
一瞬俺に同意しかけて、すぐに否定する愛香。
ツインテイルズのファンを自称するデック・ニールソンさんが、昨日から行方不明。
俺がツインテール属性を奪われたのは、同じ昨日でも夜のことだ。ただの偶然だろう。
そう思う一方で俺は、テイルレッドが消えたことによる影響を不安視し始めていた。

愛香、トゥアール、慧え理り那な、桜さくら川がわ先生と一緒に通学路を歩く。
すれ違う人、道路の向こうを歩く人。車のガラス越しに見える人。
世界って、こんなにもツインテールが多かったっけ……。
まるで、太陽を直じかに見るようだ。今の俺には、この眼めに映る全てが眩まぶしすぎて、思わず目を逸そらしそうになる。
「あら、あの子……」
トゥアールが慈愛溢あふれるアルカイックスマイルで、道行く二組の親子を見つめていた。
俺もつられて、それぞれのお母さんに手を引かれて歩く、幼稚園児の女の子二人を見た。
この前も見かけた……確か、テイルレッドのぬいぐるみを持っている方があーちゃん、その友達のみゅーちゃん。将来はテイルレッドになりたいなど、微笑ほほえましい会話をしていた。
これまでなら、ツインテールの結び方からその人のプロファイリング

をしていた俺が……今は、二人のツインテールを見ても何も感じ取ることができない
「くっ……！」
　俺はかぶりを振る。さっきから、気を抜けばすぐ考えが後ろ向きになってしまう。
　昨日まで、俺たちが守ってきた世界、守ってきた人々じゃないか。自信を持って見つめればいいんだ。
　げへげへげへ、と、邪心を濃縮して音圧にしたような笑いが漏もれ聞こえてくる。
「前にも見かけましたが……通学時間がかぶってるようです。可愛かわいいですねえ……」
　トゥアールはトゥアールで、守ってきた人々……というか女の子を見つめすぎだが……。
「トゥアールの属性は小さい子好きだったな。観み束つかにも、こういうものが見つかるといいな」
　割りとスレッスレな表情のトゥアールを見守っている桜さくら川がわ先生。
　──そうか。笑顔の邪悪さはともかく、トゥアールのこの姿勢を見習うべきなんだ。
「おかあさん！　ぜったいにつれてってね！　やくそくだよ！」
「うふふ、はいはい。テイルレッド展よね？」
　親子の会話を耳にしたトゥアールが、イビルスマイルを維持したまま教えてくれた。
「そういえば、来週マクシーム宙そら果はてで、テイルレッド展が開催されるらしいですね」
「何でツインテイルズ展じゃないのよ!!」
　怒りつつも、愛あい香かもそのイベントは見聞きしていたらしく、正

確な日時を教えてくれた。
　テイルレッド展か……。
　マクシーム宙果は思い出の場所だ。
　見に行きたいな……ツインテール属性を取り戻して。
　歩幅が違うから当然だが、前を歩いていた親子を次第に追い抜かしていく。
　すれ違いざま、俺はもう一度あーちゃんを注視する。
　あの子のツインテールにふらふらと吸い寄せられて、愛香に諫いさめられたっけ。これも、ほんの数日前の出来事だ。
　また、ふらふらと吸い寄せられたいな……ツインテール属性を取り戻して。
　――いや、それは駄目か。

◇

　教室でＨＲが始まるまでの間の喧騒に耳を傾けていると、いつも通り皆テイルレッドの話でもちきりだった。
　その嬉うれしそうな会話が、とかく耳につく。
　俺は、テイルレッドという名前を聞くたび……テイルレッドを見るたび、パブロフの犬のようにいちいち反応してしまう。怯おびえてしまうのだ。
　テレビのニュースでテイルレッドが特集されていた時。
　クラスメイトがスマートフォンやタブレットでテイルレッドの動画を見ている時。
　登校中、テイルレッドのぬいぐるみを抱いていた女の子を見た時もそうだった。
　そのテイルレッドが俺と置き換わってしまい、世界中から失望される

恐怖に怯えている。

　属性力エレメーラを失った苦しみだけでは飽き足らず、俺の正体が世界に露見してしまうという恐怖まで、耐えるべき戦いに相乗されてしまった。

　情けない。覚悟していたはずじゃないか、こうなることは。

　昨日、みんなの前で大丈夫だと息巻いたばかりなのに。俺は、本当に耐えられるだろうか。

　クラスの男子が、やるせなさそうに語り合う声が聞こえてくる。

「俺としたことが……レッドたん連続夢の中出演記録が、昨夜でストップしちまった」

「お前もか？　俺なんて、レッドたんとの夢での会話を日記につけるのが日課だったのに、何な故ぜか昨夜は普通に男友達と遊ぶ夢でさ。けど、その相手が誰だれか思い出せなくてよお」

　鼓動が早鐘を打つ。

　今朝見たデック・ニールソン氏の失踪報道を思い出し、俺の不安はどんどん大きくなっていった。

　今のところ、テイルレッドの映像記録などに変化はない。それは間違いない。

　けど、レッドの属性力エレメーラが消失した影響は、もう出始めているんじゃないのか。

　世界中の人々を強制的にツインテール属性にするという、呪のろわれた戦士。

　その属性力エレメーラが完全に消失した時──アルティメギルに奪われるまでもなく、俺が拡散させてしまったツインテールへの愛は、世界中から跡形もなく消えてしまうのではないだろうか。

　今までの夢のように幸せだった日々が、まさしく夢が終わるように──。

大丈夫だ。大丈夫だろうか。
頑張らなくては。頑張れるだろうか。
俺は、いつまでポジティブとネガティブを繰り返す⁉
これが、属性力エレメーラを失った代償──俺の戦い……。

◇

総そう二じが懸命に属性力エレメーラ消失の痛みと闘う中、それを奪った怨おん敵てきであるティラノギルディもまた、予想だにしない強敵に直面していた。
アルティメギル基地の廊下に、耳みみ障ざわりな擦さつ過か音が反響する。アスファルトに金属を擦こすりつけるかのような音の出所は、廊下を歩むティラノギルディの両足だった。
「ぬう！　小こ癪しやくなあああああああああああああああああ‼」
いや、歩くというより、傍はたからは何かに無理矢理引っ張られているように見える。
ツインテイルズとフェニックスギルディをまとめて煙に巻いた戦士が為なす術すべ無く苦く悶もんの叫びを上げる、その恐るべき相手とは──
「この帝王がレッドのツインテールにお散歩させられるなど……あってはならぬ‼」
──ツインテールだ。
あってはならなさすぎる光景が繰り広げられている。
ティラノギルディを引っ張っているのは、彼の頭に出現したツインテール。それが、飼い主がリードを引くようにティラノギルディの巨体を引きずっているのだ。
総二たちツインテイルズは、ツインテールを以もつて数々の奇跡を成し遂げてきた。

　人体で最もわかりやすく操作不可能な部位、髪の毛を操ることもその一つだ。
　アンカーのように、命綱のように……しかしそれは、あくまでツインテールを持つ者が己おのが意志で駆動させた結果。かつて慧え理り那なもツインテールをリードにしたお散歩を望んだが、それはあくまでご主人様たる総二の手を伴っての行為。
　こうしてツインテールそのものが意志を持ったかのように主人を弄もてあそぶなど、これまでに類を見ない大異変だ。
「この激しき抵抗……それほどまでに俺の体な内かが嫌いやか、テイルレッド!!」
　──嫌だろう。
「この帝王をアグレッシブな漫遊で辱はずかしめてまで、あの少年の元へと還かえろうというのか！　何たる強大なツインテール属性!!」
　これではまるで──属性力エレメーラそのものが、生命を獲得したようではないか。
　これほどのツインテール属性を育てたのがよもや男だとは、自分の目で確かめた今でも信じられない。
　ティラノギルディはツインテールに懸命の躾しつけを施ほどこし、鋼はがねの五体を隆起させて力尽くで押さえ込むと、大ホールへと足を踏み入れる。
「おお、ツインテール様！」
「ツインテール様、一同首を長くしてお待ちしておりました!!」
「さあこちらへツインテール様、御お椅い子すを磨みがき上げておりますぞ!!」
　ティラノギルディの姿が見えるや、ホール内の部下たちは喝かつ采さいで出迎えた。
「え、貴様ら、敬う対象を間違えてはおらぬか」

　ティラノギルディの困惑も聞かず、部下たちは彼に生えたツインテールを褒ほめそやす。
　可愛かわいい。長い。赤い。つやつや。すごい可愛い。
　元々むくつけき漢おとこの集まりであるアルティメギルにおいて、華々しいデビューを飾ったツインテールは、まさに一輪の花、サークルの姫。
　我われ先さきにとちやほやするのも無理からぬことだった。
　だが部下たちが目を奪われ、惜しみなき賞賛を捧げているのはツインテールであり、ティラノギルディ本人ではない。
　──虚飾の偶像だった。
　納得はいかないが、存分に愛めでさせてやるが帝王の度量というものだろう。
（……フ、俺も少しは空気が読めるようになってきたということか……）
　ティラノギルディが持ち込んだ巨大な玉座も、これまでは部下たちに邪魔だ邪魔だと思われていたが、今やその彼らが率先して磨き上げている。部下たち憧れのツインテールを存分に見せつけながら玉座に腰掛け、演説を始めるティラノギルディ。
「さて、俺に倒されたテイルレッドはしばらくは戦闘に参加できまいが……」
　処刑部隊の長おさとして強力に成長したツインテール戦士を数多く打倒してきたゆえ、ティラノギルディはその人気……人望の「上限」も心得ている。
　他の世界の戦士と比して、テイルレッドの人気は度外れている。世界人類どころか、この部隊全てのエレメリアンまでもを虜とりこにしているのだから。
　彼女を、ただ倒したのではなく属性力エレメーラを奪った……つまり

しばらくどころか永遠にその姿を見れないと知れば、戦士たちの士気に大きく関わるだろう。
　ツインテイルズはまだ三人も残っている。そして最終侵攻を控ひかえている今、それを明かすのは得策ではない。
「テイルブルーたちがまだ残っておるな。当然、彼女たちも打倒せねばなるまい」
　ティラノギルディの提案に、条件反射でギクリとする戦士たち。
「大将首は俺が上げたのだ。次は、貴様らが残る雑ざ魚こを狩るが道理だが……」
　無論、反応は皆無だった。しかし、ここまでは想定内だ。ここで、サークルの姫と化したティラノギルディは、秘めたる魔性を見せる。
「──テイルブルーを倒した者には褒ほう美びとして、このツインテールを触ることを許可する」
　どよめくホール内。
「夢のようでございます……その美しきツインテールを！」
「どこまでＯＫでございますか⁉　基本報償とオプションの境目は如い何かに⁉」
「臭くないかな⁉　俺の手、臭くないかな⁉」
　実直に湧わく者、執拗に確認を取る者、甲かつ冑ちゆうじみた両手のあるはずなき臭いを同僚に検証してもらう者などで溢あふれ、見る見るうちに哀かなしきピュアボーイ祭りが開催されてしまった。
　己おのが虜とりこになった愚民をいかにすれば意のままに動かせるか、姫はそれをよく知る。
　あれほど嫌がっていたテイルブルー戦を、兵士たちは我われが我がと挙手し望む有様だった。

◇

　昼休み、いつものようにツインテール部部室で昼食を取らず、俺は屋上にやってきた。募っていく苛いら立だちや焦燥を、愛あい香かたちに感じられたくなかったからだ。
　幸い他に生徒の姿はなく、俺はコンクリートの床に大の字で寝転ぶ。
　ツインテールを失い、世界から音が消えた。色彩が消えた。香りと、温ぬくもりが消えた。
　見上げる空の青ささえ……太陽の眩まぶしささえ、気に障さわってしまう。
　一日普通に過ごしているだけで、どうしようもなく心が荒すさんでいくのがわかる。
「心が、荒む……？」
　荒む心自体が今の俺には無いはずだ。ツインテールこそが、俺の心だったのだから。
　感じているのは、空虚な幻肢痛フアントムペイン。
　存在しないツインテールを求めて、俺の全身全細胞が苦しみ喘あえいでいるんだ。
　こんな状態で、これ以上愛香たちと顔を合わせていられない。
　心を失った俺はいつか、文字通り心無い言葉を容易たやすく口にするだろう。いや、すでに意識もせずに口にして、みんなを傷つけているかもしれない。
「……そっか……こんな人間ばかりになったら……」
　属性力エレメーラを失った世界が、〝滅んだ〟と形容されるわけだ。
『究極のツインテールが覚醒しちまったら、人間は一人残らずツインテール属性を持たされちまう。そして、エレメリアンに奪われちまうのさ……』
　駄目押しをするように唯ゆ乃のの言葉が去来し、胸の底から罪悪感が

湧わき上がってきた。
　道行く人の、クラスメイトの笑顔が全て、俺が強制してしまったものだとしたら……。
　昼休みの終わりを告げるチャイムが鳴り、授業が始まっても、俺はその場を動けなかった。

　閉じた瞼まぶた越しに影が射し、俺は目を開く。
「──観み束つか。どうした？　授業はもう始まっているぞ？」
　桜さくら川がわ先生が、俺を見下ろすようにして覗のぞき込んでいた。
「桜川先生、どうして屋上に……」
「クラス副担任とはいえ、私の一番の仕事はお嬢様の警護だぞ。部下と交代で、空いた時間にこうして校舎の見回りをしている」
　ふわりと垂れるツインテール。
　それを見ても何も感じない苦しさが、俺を責め苛さいなむ。
「それに、今はお前の護衛も私の任務だ。これまで散々世話になったんだ、お前に恩返しをしないとな！」
　世話に……。自信満々にそう言われて、心臓が締め上げられる。
　俺は、ブレスを渡す時に桜さくら川がわ先生に謝り損ねていたことを思い出した。
「すみません。俺、桜川先生に謝らなくちゃいけないことがあるんです」
「どうした、藪やぶから棒に」
　唐突な話に、桜川先生が首を傾かしげる。昨日桜川先生が聞きそびれたことを、俺は説明した。
「俺のツインテール属性は、みんなには無い特別な力があった。アルティメギルはそれを究極のツインテールと呼んでいて……。俺はただ生

きているだけで、世界に無理矢理ツインテール属性を広めてしまう、悪魔のような存在だって言ってた……!!」
　握った拳こぶしを屋上の床に叩たたきつけた。……はずだったが、それはあまりにも弱々しく、音さえ立たない。情けなさを噛かみしめながら、俺は続けた。
「桜川先生がテイルギアを装着できるように……変身できるようになってしまったのは……強力なツインテール属性を持ってしまったのは、俺のせいなんだ……!!」
　屈かがんで目線を俺に合わせると、桜川先生は険しい表情を見せる。
「なるほど……私はお前の力で、無理矢理ツインテール好きに洗脳されてしまっていたというわけか」
「……そうなります」
　桜川先生が無言で平手を振りかぶる。
　俺は目を閉じ、気の済むまで叩かれる覚悟をした。しかし──

「あまり私を見くびるなよ、観み束つか」

　糾弾するような言葉とは裏腹。
　俺の全身を、柔らかな温ぬくもりが包んでいた。
「え……」
　桜川先生が、俺の頭を胸に抱き寄せたのだ。
「お前らしくもない。エレメリアンの、そんな言葉を本当に信じているのか」
「だって──」
　離れようとする俺を、持ち前の力で強引に押さえつける桜川先生。
　聞き分けのない子供をわからせるように。
　泣き止やまない赤子をあやすように。

　聞こえてくる穏やかな心音に、ささくれ立った感情が薄らいでいくのを感じた。
「昔はよく、泣き止まないお嬢様をこうして抱き締めた」
「……慧え理り那なを……？」
「想像できんか？　ああ見えて、子供の頃は結構やんちゃだったんだぞ。ヒーローごっこが大好きでな。大人の目を盗んではどこかへ行ってしまうから、護衛のしがいがあったよ。こんなに大人しくしているお前より、よほどな」
　慈しみに溢あふれた優しい声こわ音ねで、思い出を紡つむぐ桜さくら川がわ先生。
　俺は観念し、この温もりに一時甘えさせてもらうことにした。
「なあ観み束つか。誰だれかの影響で何かを好きになるなど、世の中にはままあることだぞ」
　それは……俺もそう思っていた。
　ツインテイルズに憧れて世界中の人が興味を持ってくれたことが嬉うれしかった。
　だからこそ、それが裏切られた今……悔しくて仕方がないんだ。
「確かに私がツインテールを好きになったのは、お前のおかげだ。しかしそれを強制などと言うのは、少し思い上がりが過ぎるんじゃないのか？　そこに私の意志はないというのか？」
「思い上がりとかそういうことじゃない、属性力エレメーラの力なんだ！」
　俺が声を荒らげても嫌な顔一つせず、桜川先生は努めて穏やかに諭さとしてくる。
「属性力エレメーラがなんだ。独身アラサーをなめるなよ。年を取るほどに意固地になって、回りに流されるなどできなくなっていくんだぞ」
　桜川先生は俺を抱き締めたまま、屋上の床に仰向けに寝転がった。

　俺はまるで、母親に抱かれて眠る子供のように、安らぎに身を任せる。
「私はな、観束。昔からツインテールを好きになりたいと思っていた。それこそ、神しん堂どう家に仕えるようになった高校生の頃からずっとだ。……ツインテールを重んずる神堂家にな」
　そして桜川先生は、空を見られなくなった俺の代わりに、眩まぶしさに眼めを細めていた。
「何な故ぜ、神堂家はツインテールを継承していくのか……何故、奥様はあんなにもツインテールにこだわられるのか。義務ではなく、私は純粋に、ツインテールを身近なものにしたいと願っていた」
　桜川先生の身の上を聞くのは初めてのことだ。
　本当はあまり他人に話すことではないのかもしれないが……今の俺にだからこそ、語り聞かせてくれているのかもしれない。
「だが……頭が堅いんだろうな、私はどれだけ月日を重ねても、大人になっても……よくわからなかった。ツインテールというのは、考えるほどにただの髪型だ。それに愛を注ぐ……どういうことなんだろう、とな」
　優しく頭を撫なでられ、こそばゆさに身をよじる。
「やっとわかったよ。別に高尚な心構えなど何も必要ない。なんか可愛かわいいな、何か綺き麗れいだな……そんな単純な思いがどこまでも強くなって、ツインテールへの愛が生まれるんだ。拍子抜けするぐらい当たり前のことだった」
　まるで、俺の信念がそのまま伝わったかのように、いつも俺が心に懐いだいていた思いを言葉にする桜さくら川がわ先生。
「お前のおかげだ、観み束つか」
「……俺の……？」
「お前のおかげで、私の十年来の願いは叶かなった。そしてお嬢様も、

自分を偽いつわらず、自然にツインテールを愛することができるようになった。こんな人間は世界にたくさんいると思うぞ。お前は、まだ結婚もできない年と齢しの子供のくせに謙けん遜そんしすぎなんだ」
　桜川先生は言う。
「強制じゃないさ。私には下地があったんだぞ？　ツインテールを愛したいという土壌がな。……お前はそれを後押ししてくれただけだ」
　きっとテイルレッドを見て、同じような体験をした人がいるのではないか、と。
「究極のツインテールなどと物々しい言葉を使ってはいるが、ようはお前が『周りを巻き込むぐらいとんでもないツインテール好き』ということだろう？　おかしな奴やつにちょっとだけ影響されて、みんな好きになるべくしてなったんだ。私も、今世界にいる人たちもな」
「桜川先生……」
「少しは気が楽になったか？　みんな、あんなにやる気を出してお前に元気になってもらおうとしているんだ。お前も辛つらいだろうが……頑張れ」



　普段は妙な行動ばかりが目立つが、桜さくら川がわ先生は本当に立派な大人だ。俺の身体からだの衰弱はどうしようもないが……おかげで、自暴自棄になるのだけは食い止められた。
「はい、ありがとうございます。みんなを信じて、俺もまだ耐えてみせます」
「うむ」
　いつまでもこう、あやすように抱き締めてもらっていては迷惑になるだろうと思い離れようとすると、桜川先生はまた腕に力を込め、俺を抱き寄せた。
「……桜川先生？　あの、もう大丈夫……」
　こうして会話が終わると、妙に胸の感触を意識してしまい、恥ずかしさが際立つ。
「いや、すまん。何だろう……離したくないのだ」
「え？」
「き、きっと昔を……お嬢様の小さい頃を思い出したからだな。うん」
　しどろもどろになりながらも納得する桜川先生。
「だからもう少し、こうさせてくれ」
「わかりました」
　俺が頷うなずくと同時に、屋上の扉が勢いよく開け放たれる音が聞こえた。
「……おお、トゥアール」
　俺は頭を抱えられていて見えないが、トゥアールがやって来たようだ。
「何で抱き締めっぱなしなんですか！　普通そこは『わっ、いつから見ていた⁉』とか言って飛び退のくでしょう！　そういう往生際の悪さがアラサーなんです‼」
「うん、まあ、認めよう。私は往生際が悪い。だから続ける」

　桜川先生は俺を抱き締める力を強めた。
「開き直りましたね淫行女教師背徳の屋上!!」
　何かのタイトルのように語呂がよく小気味いい罵ば倒とうと共に走って飛び跳ね、トゥアールまでも俺に覆おおい被かぶさってきた。
「トゥアール!?」
「順番です順番！　次は私のイベントが始まりますから切り替えてくださいね総そう二じ様！」
　何な故ぜローテーション制度になっているんだ……!?
　俺の疑問を余よ所そに、トゥアールはその豊満な胸をこれでもかと後頭部に押しつけてきた。
「総二様……私も昔を思い出しました……こうして幼い総二様の頭を胸と胸の間に挟みましたね……」
　どれだけ記憶をロールアップしても、そのファイルは全く検索されないのだが……。
　第一トゥアールは俺と同い年なのに、どこのパラレルワールドの記憶を拾ってきたのか。
「……ああもう、幸せですっ……」
　トゥアールの嬉うれしそうな声が、妙に印象深く耳じ朶だを震ふるわせた。
　でもどうしよう、桜さくら川がわ先生とトゥアールの胸に上下から挟まれて、息をするのもままならなくなってきた。
「……唯ゆ乃のといい桜川先生といいトゥアールといい……そーじに胸の感触をっ……!!」
　遅れてやって来た愛あい香かが、怒り心頭といった様相で、トゥアールを力尽くで引き剥はがす。
「もう！　人には役割というものがあるんですよ、愛香さん。挟めない愛香さんはその辺で棒立ちして適当にいいこと言っててくれればいいで

すから」
「────あんたならいくらでも挟めるわよ」
「幸せな時間は長くは続きませんでしたああああああああああああああ!!」
　己おのが両腕で恐竜の顎あごのようにトゥアールを挟み込み、咀そ嚼しやくする愛香。食物連鎖の体系が崩壊してゆく。
「だいたいそーじ全然欲情してないじゃない！　桜川先生の胸で安らいでたじゃない!!」
「私でも引くレベルで総そう二じ様の欲情を熱望しすぎですよがっつき蛮族!!」
　愛香の腕力で桜川先生の抱擁からも解き放たれた俺は、屋上の入り口に立つ慧え理り那なを見つけた。拗すねて頬ほおを膨ふくらませている。
「……ずるいですわ、尊みこと……!!」
「あ、あわわ、す、すみません観み束つか。おいお嬢様、観束に抱き締めてもらってくれ!!」
　慧理那の迫力にたじろぎ、混乱して俺と慧理那への接し方が逆になる桜川先生。
　いつもと違うメイドさんの一面に嬉うれしそうにしていた慧理那だったが、俺の前まで歩み寄り、安あん堵どした表情を見せる。
「……わたくし、初めて授業をサボっちゃいましたわ」
　舌をちろりと出し、悪いた戯ずらっぽく笑う慧理那。
「慧理那、俺のために……」
　さらに控え目な咳せき払ばらいが背後から聞こえて振り向く。肩で笑いながら眼め鏡がねのブリッジを押し上げ、朝に見た制服姿のイースナが立っていた。
「……あれ？　お前、平日の昼帯ってレギュラー番組の収録が……」

特に今日は、朝からスケジュールが詰まりまくっていたはずじゃないか。
「わ、私も……、初めて生放送を、ブッチしちゃいました……」
「戻れ戻れ大変なことになるぞーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーっ!!」
慌てる俺に、イースナは自分の携帯電話にテレビ番組を映し確認させてきた。
善沙闇子の身代わりだろう。鮫さめの着ぐるみのゆるキャラ、メガネドンがソロで出演している。よりによってトークコーナーだ。
スケッチブックに速記して、司会者との会話を成立させていた。会場が大いに沸わいている。
すげえよおかん……。
「いや、でもさ……やっぱりお前がいないとまずいんじゃ……」
「ひ、ひどいです……私だけ、帰れって、言う……！　総そう二じさんが、落ち込んでいるような、言い知れぬ不安に、襲おそわれたから、駆けつけた、のに……!!」
「ごめん、俺のためにサボるなんて申し訳なくてさ……！」
涙ぐむイースナの頭を撫なでる。さっき桜さくら川がわ先生がしてくれたように。すかさずトゥアールが抗議をしてきた。
「あなたはすぐそうやって総二様に甘える!!」
「甘えるか、甘えさせるか、どちらかに全振りするのが……いい女の、条件……。トゥアールさんより、このアラサーさんの方が、女子力高いです……！」
イースナの言葉に愕がく然ぜんとし、膝ひざから崩れ落ちるトゥアール。
トゥアールとイースナの小競り合いを見守りながら、愛あい香かが肩をすくめる。

「授業中にこのメンバーが揃っていなくなってたら、何か噂うわさが立てられちゃうかもねー……。特にあんた、会長と公認とか注目されてるし……」
「噂？」
　何でもない、とはにかんで愛香は、
「でも何か青春って感じで、こういうのも悪くないかも」
　空を見上げ──風にはためくツインテールを手に取った愛香は、
「……あたしたちも、覚悟を見せなきゃいけなかったのよね」
　リボンに触れるや一気に引き抜き、ツインテールを解ほどいてしまった。
「な、何で解くんだ愛香⁉」
「……そーじがツインテール属性を失って苦しんでいるのに、あたしがいつまでもツインテールにしているわけにもいかないでしょ」
　何をしているんだと。俺に構うなと。
　今までの俺だったら、俺のためにツインテールを解くなんて、むしろ心の底から諫いさめていただろう。
　だが今の俺は、思考と行動が一致していなかった。脳で思ったことが、口をついて出ない。
「……会長がツインテールを解いて学校に来た時は、世界が終わるみたいな表情だったじゃない。今のそーじには……あたしたちのツインテールが逆効果なのよ」
　まさか、と振り返ると、慧え理り那なと桜川先生も、互いに顔を見合わせ──
「慧理那……桜川先生も！」
　愛香と同じようにツインテールを解き、髪を下ろしてしまった。
「わたくしが解きたいから解いたのですわ。大丈夫、今はツインテールの大切さを知っているのですから……観束君のために解くことに、何の

躊躇ためらいもありません」
　今度は親への当てつけなどではない。確固たる自分の意志を誇る慧理那。
「むしろそのぐらい驚く方が、お前も気力を保たもてるだろう？」
　……ツインテールを解ほどいた桜さくら川がわ先生を見るのは、初めてかもしれない。ウェーブがかかったその髪が、苦笑に合わせて揺れる。
　確かに、今の俺の至上命題は、気力を保つことだ。でも、そのためにみんなのツインテールを踏み台にしてもいいのか!?　ないがしろにしてもいいのか!?
「そ、総そう二じさん……私も……」
　イースナに至っては、髪を解くだけに留とどまらなかった。
　全裸になっても眼め鏡がねだけは守るとまで豪語していたイースナが、眼鏡を外してしまったのだ。
「そ、総二さんになら、私の裸眼ぜんぶを、見せられます……」
　みんな、俺のためにそこまで……。
　ツインテールを解き、俺に笑顔を送ってくる愛あい香かたち。
　気けだ怠るげに寝転んでいた数分前の俺を、殴ってやりたい。
「……総二様、すみません。私には、皆さんのように見せられる覚悟がありません……」
　輪から外れるように一歩離れながら、しゅんとするトゥアール。
「…………」
「…………」
　続くトゥアールの言葉を待っていた愛香は、虚きよを衝つかれたかのようにつんのめった。
「え、そこはあんた、いつもなら『だから全裸を見せます』とか言い出すところでしょ!?」

　本当にしょんぼりしていたようだが、愛香の言葉に発奮し、いつもの調子で反論した。
「何うきうきしながら拳こぶしを握り締めてるんですか!?　愛香さんごときにこのトゥアールちゃんの知的行動を先読みされるほど、苦楽を共にしたつもりはありませんが!?」
　いや、俺たちの中で一番互いの思考を先読みし合えるだろ、愛香とトゥアールは……。
　膝下まである髪を揺らしながら、慧え理り那なが俺に歩み寄ってきた。
「……ごめんなさい、観み束つか君。もっと早く、わたくしがこうするべきでしたわ。わたくしは、お姉さんですもの……」
　慧理那は俺を屈かがませると、その小さな身体からだで懸命に俺を抱き締めてくれた。
「不安でしたのね。状況確認や作戦などよりまず先に、こうして観束君を抱き締めるべきでしたわ……。わたくし、尊みことのように胸はありませんから、頭が痛いかもしれませんが……」
「会長。そういう謙けん遜そんは必要ないよ。不安を取り除いてあげようとする心が伝わることが大事なんだから」
　確かにそんな謙遜はいらないけれど、愛香の言葉に鬼気迫る切実を感じ取ったのは気のせいだろうか。
「……で、そろそろ代わって欲し……」
　愛香が何か言い終える前に、俺の下半身からカチャカチャと金属の擦こすれ合う音が。
「順番に抱き締めっこなんて、まどろっこしい……。私は、こっちで、生放送……」
「ちょっ……イースナ、ここは子供がカチャカチャしていい所じゃありません！　いいですか、ただカチャカチャさせればいいものではなく、

いやらしくカチャカチャ……」
　ベルトを外して俺のズボンを下げようとするイースナと、トゥアールがもみ合う。
「異世界女はどうしてムードもへったくれもなく下半身に行くのよ!!」
　そして、トゥアールに飛びかかる愛あい香か。
　ツインテールを奪われても、変わらず残った日常がある。
　愛香たちの言う通りだ。どんな小さなことでもいい。心の支えを見つけて……耐え抜くんだ。

　それから俺たちは、放課後になるまで語り合った。
　他愛たわいの無い会話。何気ない日常。授業をサボるという、一つまみだけの非日常。
　それが、ささくれ立った心を和やわらげてくれる。
「トゥアールのおっぱい」
　　「トゥアールのおっぱい」
　　　　　　「トゥアールのおっぱい」
　極めつきが、この緊張感の無いエレメリアン出現アラートだ。もう、吹き出すなと言う方が無理だった。
「……見てて、そーじ。今日は、いつものそーじ……テイルレッドみたいに戦ってみるから。ギャラリーがいても、怯おびえさせたりしない。あたしたちだけでも大丈夫だって、思い知らせてあげるわ！」
　愛香がとりわけレッドみたいに、と張り切っているのが不安だが……ともあれ俺たちは、放課後の校舎を早足で移動し、部室棟へ。
　ツインテール部部室のロッカーから、地下基地へと転送された。
　コンソールルームに残り、愛香と慧え理り那な、イースナの出撃を見守る。
　転送ゲートのある方の出口に走っていく愛香を、慧理那が呼び止め

た。
「お待ちください、観み束つか君の前で変身しましょう、津つ辺べさん!!」
「え!?」
「観束君には、わたくしたちの全てを見守ってもらうのですわ、はあはあ」
……さっきまで、本当に頼りになるお姉さんだったのに……。慧理那らしいか。
きらきらと目を輝かせ、困惑する愛香の手を引っ張って俺の目の前まで連れてくる慧理那。
俺から見て慧理那がセンター、愛香が右、イースナが左に並ぶ。
思い思いの構えを取ると、慧理那と愛香の右腕に、ブレスレットが可視化された。そして、イースナがかけ直した眼め鏡がねが茫ぼう洋ようとした光を放ち始める。
慧理那は目をきらきらと輝かせ、愛香は赤面し、イースナはぼへーとしながら──三人は、それぞれの変身機構起動略語スタートアツプワードを紡つむぐ。
「テイルオン!!」
「……テイルオン……」
「グラス、オン……」
一人掛け声が違うことを差し引いても、テンションがバラバラ、タイミングもちぐはぐ、たった三人で整列もすぐ乱れる、と、慧え理り那なの意気込みとは裏腹に残念な感じになった。
ブレスレットと眼め鏡がねが激しく閃せん光こうを放ち、彼女たちを再びツインテールへと導く。
青と黄色、黒の閃光が渦巻き、同時に爆裂する。
ギアに身を包んだ三人は、俺が見届けたことを確認すると、転送ゲー

トへと駆けていった。
　普段ツインテールを解ほどいていても、戦う時にはツインテールに変か身わる。そんな愛あい香かたちの覚悟を目の当たりにし、俺は、異世界の双子姫を思い出した。
「□□□□□!?」
　俺は目をこする。今、気のせいか……ブルーたちのギアが、放電しているように見えた。
　気合いが入って、エネルギーが溢あふれているのだろうか……？　それなら頼もしいが。
　そういえば、最近母さん基地に来ないけど……やっぱり俺心配されてるんだろうな……。

　数分後、モニターには早速エレメリアンの出現場所へ急行したブルーたちが映し出された。
　基地で戦いを見守るのは初だからな……そわそわする。
　周囲には、逃げ遅れたのか多くの人が立ち尽くしていた。
　二メートル以上はあろう巨きよ躯く。エレメリアンは青黒い体表をしていて、刀剣のような鋭い二本の角と、しなる丸太のような長い鼻を備えている。まるで太古の巨象がそのまま二足歩行になったかのようだ。やはり、ティラノギルディはまだ出てこないか……。
　だが、そんな怪人を目まの当たりにしていながら、ギャラリーの不安は危機感とは別のところにあった。
『ねえ、レッドちゃんは……？』
　ランドセルを背負った小学校上級生ぐらいの年頃の女の子が、ブルーたちを寂しげな目で見つめる。
『レッドは、しばらくお休みよ！　…………ちょっと……お腹なかが痛くなっちゃったの!!』

　熟考する時間もないと判断したのか、オーソドックスな病欠の理由をぶち上げるブルー。
　エレメリアンも、ギャラリーの一般人も動きが止まった。
『……そ、それってもしかして、レッドちゃん……』
『女の子、に……⁉　早くない⁉』
『でも私四年生ぐらいだったし……』
　小さな子供を除いた周囲の女性陣が、にわかにざわめき出す。そして漏れ聞こえてくる会話に男性陣は顔を赤らめ、無言で気まずそうに俯うつむいていた。
『え、あ……ち、違うわよ⁉　深い意味とかないから！　本当にただの腹痛‼』
　ブルーが大慌てで弁解している。
「なあトゥアール、あれってどういう意味……」
「……ええと、中学校の保体で習っていると思うのですが……そうですね、ちょっと生々しいかもしれませんけど、興味がおありでしたら後でお見せします」
　妙に艶つやっぽい表情でトゥアールが見つめてくる。
「あ、ごめん、大丈夫」
　危機感が全身を貫き、俺はやんわりと拒否する。
　一方モニターの向こうでは、ギャラリーたちがブルーの言葉でほっとしていた。
『ほっ、よかったぜ！』
『何がよかったよ、セクハラでしょ‼』
　エレメリアンを置き去りに、ギャラリーの一部が男女で言い争いを始める。
　ブルーがエレメリアンに対し、隙すきのない見事な戦闘態勢を取った。

『とにかくあんた！　今日はレッドいないから、あたしたちが相手よ!!』
　象のようなエレメリアンは巨大な頭をだらんと垂らした。
『知っていても士気に関わるものだ……。レッドのいないツインテイルズなど、原子核のない原子に等しい。さわさわ権のため、仕方ないがな……』
　それってもう物質ですらない、〝無〟じゃないのか。あとさわさわ権って何だ？
『今日はあたしがレッドの代わり！　青いけどあたしがテイルレッドよ!!』
　ブルーの衝撃の宣言に、場が静まり返る。
『……ど、どうしたテイルブルー……頭でも打ったか？　市販のお薬でよければ、戦闘員アルテイロイドをドラッグストアに向かわせるが……』
　エレメリアンは元々青い顔を蒼白にし、戦闘員アルテイロイドをお使いに向かわせるとまで提案した。
　モケーがショッピングを嗜たしなむ光景を想像し、そのあまりの違和感の無さに俺は頭を抱えた。
　ブルーが出鼻を挫くじかれたのを見て、イエローも萎縮してしまっている。
『あわわわ、やっぱりレッドはオンリーワンですわ……！』
『諦あきらめるでないドＭ！　顔面偏差値では大差はないはずじゃ、体格はいかんともしがたいが、仕草さえ近付ければ我われらもレッドになれる!!』
『わかりましたわ！』
　イエローとブラックが励まし合い、何やら、あ、あ、と発声練習をし始めた。

『こんにちは、テイルレッドです♪』
『貴様りゃ、もみくちゃにしゅるのを許可するぞ！　女限定じゃがにゃ！　できれば乳の大きにゃ女がいい!!』
　イエローは物もの真ま似ねで最悪手とされる『いきなり名乗り』を敢行。
　ブラックは死ぬほどわざとらしい呂ろ律れつの回らない口調で、ギャラリーに妙な要求をする。
　人々が目を逸そらし、スマートフォンを操作し始める。通勤電車に座する人々を俯ふ瞰かんした時のような、文明社会の生み出した切ない光景。
　都会の冷たさが、今はあるいは救いなのかもしれない。
　しかも、いつもならもうとっくにエレメリアンが名乗っている頃なのだが、ブルーたちの珍妙な行動に気け圧おされてか、完全に名乗る機を逸してしまっている。
　その影で……何かブルーが身を屈かがめてごそごそとやっていた。
　エターナルパッドだ。胸パッドという特性上、人前では堂々と装着できない強化アイテムをこっそりと取り出したブルーは、周囲の視線の有無を確認する。エターナルパッドを、アンダースーツの隙すき間まからスロットインした。
　閃せん光こうが迸ほとばしり、強化されていくテイルギア。
　胸パッドを装着したのに、胸だけが強化されないという悲哀を見せつけながら。
『ひい!?』
　エレメリアンが悲鳴を上げる。
　全身に刃物が装着されているような、攻撃的なフォルム。すでに完成された威圧感を放っていながらなお相乗し、テイルブルー・エターナルチェインが完成した。

　あ……今度は、ブルーのギアの輪りん郭かくが一瞬ぶれて見えたが……目の錯覚だろうか……。
『さってと』
　ブルーが肩を回してエレメリアンに一歩近付くと、ギャラリーが一歩後あと退ずさる。
　恐竜のクローンが製作され、完全にコントロールできるので安全ですと一般人に見学させていたら、突如として本性を現した恐竜から殺気を感じたような心境だろう。
『ブ、ブルーまでパワーアップしてる……』
『刺とげ々とげしいぜ…』
『尖とがってるわブルー……』
　一般人がヒーローを見る目ではない。
　エレメリアンもＮｏ、Ｎｏと両手を衝つき出して拒絶の意志を示す。
『そ、その姿はまさか、トリケラトップギルディ様を倒したという……！　待て！　いきなり最強形態とは風ふ情ぜいのない！　ここは互いの力量を見合うためにもだな……』
『え？　何で敵の強さレベルに合わせてやる必要があるの？』
　パワーアップがあるのならば、使うべきだと。何な故ぜ通常形態を駆使した消化試合を経なければならないのかと、その目は確言していた。
『完全解放ブレイクレリーズ!!』
　ブルーは手にしたウェイブランスエクシードを一いつ閃せん。地を走る水流がエレメリアンを捉え、円柱型の結界となって包み込んだ。
『ぐ、ぐあああ、不意打ちとは卑ひ怯きような……!!』
『あんた、名前と属性は？』
『お、おお、名乗りがまだであった……我わが名はマンモギルディ！　曲線属性カーブを持つ死の二菱ダー・イノ・ランヴアスの戦士だ!!』
『……あんたのその属性も、レッド復活のために活用してあげるわ』

　相手が名乗った瞬間、ブルーはウェイブランスエクシードを凄すさまじい勢いで投とう擲てきした。
『エクストリームウェーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーイブ!!』
『え、ちょ、えーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーっ!?』
　戦意無き相手に、最強形態の必殺技を全力発射。初しよ手てにしてオーバーキルという大惨事だ。
『曲線のよさを……せめて伝えさせてくれてもよかろうに……無曲線めがあああああああああああああああああああああ!!』
　せめてもの怨えん嗟さの叫びを哀かなしく響かせ、ようやく名乗れたマンモギルディは大爆発した。
　しかし、オーラピラーがキッチリと爆圧を押さえ込み、ギャラリーまでの被害は及ばなかった。仲間もギャラリーもぽかんとしている中、ブルーは残された数名の戦闘員アルテイロイドへと向かい歩いて行く。
『あたしを撮りなさい、モケー』
『モ、モケ!?』
　カメラを手にした戦闘員アルテイロイドの、がに股気味の細足が、小刻みに震ふるえる。
『あー、相手になんないわね……ティラノギルディまだかなー』
　強要される死神の写真撮影デスグラビア。
　この思い、遠い敵の基地まで届け、と。
　小首を傾かしげ、口を半開きにし、目を見開いてカメラを視突するテイルブルー。
『来ないなら……あたしがすぐそっちに行って血祭りにしてやるわ、ティラノギルディ』
　万単位からのヤンキーの群れを一ひと睨にらみで失禁させよう、極道

の眼光だった。
『モ、ケ……』
　恐怖のあまりか、戦闘員アルテイロイドは何もされていないのに粒子となって消えた。
　やばい。ギャラリーのドン引きが洒しゃ落れになっていない。
「レッドたんが傍そばで緩衝材にならないだけで、ああも印象が変わるんですね～。いつもの愛あい香かさん。平常運転のテイルブルー。ベーシックでオーソドックスでナチュラルな蛮族なのに」
　しれっと考察するトゥアール。あの恐怖映像を見ながら、余裕のあまり自分の胸をマッサージしていた。
　ナチュラル蛮族って何だ、世紀末を生き抜いて新たな時代を築き上げてるじゃないか……!!

◇

「……よし、映像を切れ！　そしてファイルを削除し！　入念にフォーマットだ!!」
　アルティメギル基地に独占配信されたデスムービーが再生終了した刹せつ那な。死の二菱ダー・イノ・ランヴアスのエレメリアンの一体が檄げきを飛ばし、戦闘員アルテイロイドがモケモケと消去していく。
　ブルーの渾こん身しんの脅迫は──エレメリアンたちにまさかのガン無視を敢行されていた。
　これまでと違い、テイルブルーの恐ろしい脅迫に為なす術すべ無く震ふるえる彼らではないのだ。
「もうテイルブルーは映さなくてよい！　ブルーライトカットフィルムがあるのだ、テイルブルーカットフィルムがあってもよいのではないか？」

「イエローにかけるため開発していたモザイク用の技術を応用すれば、あるいは!!」
　逆らえば生命そのものを断絶カツトされる致死性の青に、断固として立ち向かう。
　わっはっはっは、と大声で笑い合う戦士たち。
「なあに、もし顔を見て恐怖を覚えたら、ほんの少し視線を落とせばいいのだ！」
「うむ、テイルブルーなど、顔の怖さと胸の愉快さは互角！　プラスマイナスゼロよ!!」
「フッ、俺など心の中でテイルブルーの胸目掛けて屁へをこいてやったわ!!」
　空から元気だろう。虚勢だろう。屁はこけないだろう。
　だが、今この瞬間、彼らの心は一つだった。
「よし、次の出撃戦士を決めるぞ！　ツインテール様は我われ々われが守るのだ!!」
　ツインテールを触るという褒ほう美びで昂たかぶった彼らは、もうテイルブルーなど恐れない。
「……いや、だから待て貴様ら、守ろうと奮起する対象が違わぬか」
　一人怯おびえていたティラノギルディは、そのテンションに取り残され、ホールの玉座の上でちんまりと座っていた。
　自分が招いたこととはいえ、ティラノギルディは面に不安を滲にじませる。
「……しかしテイルブルーめ、やはり凄すさまじく怖い奴やつ。何か、奥の手が必要か……」
　胸の痛みに低く呻うめく。心なしか、光のヒビはその大きさを増していた。
　ティラノギルディは、皆に見えぬよう、マントの裏からひっそりと薄

い本を取り出す。
　組織随一の科学者から託されたそのＢＬ本には、奥付に擬態して設計図が記されている。
　悪魔の強制強化装置、「首領の吐息ゴッド・ブレス」の量産設計図が──。

◇

　超次元の狭はざ間ま。不可視の神域。
　完全なる秘匿に守られた空間、首領の間。その地平の彼方までプリズムの輝きを放つ広大な空間の僅わずか一角で、アルティメギル首領は聖布ヴエールに包まれた玉座に坐している。
　そこへ、白いローブで全身を覆おおった何者かが悠ゆう然ぜんと歩を進めていた。
「──お呼びですか？　首領様」
　うねり輝く空間に、透き通った女じよ声せいが響く。
　一の軍団の戦士にして現アルティメギル科学班最高責任者。知の最高峰。
　マーメイドギルディだった。
「……何、久しく退屈が続いてな。お前ならば面白い話を語り聞かせてくれぬかと思っただけだ。随分と足繁く異世界をわたり歩いているようだからな」
　こちらの腹を見透かすような言葉だった。並の戦士ならば恐怖で消滅しているだろう。
　マーメイドギルディは、秘密裏にティラノギルディに接触している。だが、あえてそれを隠そうともせず、飄ひよう々ひようとした態度で答えた。

「そういえば、ティラノギルディ君にツインテールが生えたみたいですけど……特に面白いことはないですね」
　四し頂ちよう軍の一つ死の二菱ダー・イノ・ランヴアスの隊長であるティラノギルディですら畏おそれ敬うやまい平伏する全知全能の首領に対し、いささか不ふ遜そんともとれる態度で接する。
　彼女の立場ももちろんだが、彼女自身の胆力も相当なものだ。
「これは妙なことを言う。ツインテールとは生えるものではない」
　首領はマーメイドギルディの物言いを咎とがめもせず、
「――生やすものであろう？」
　宇宙の根源に迫るがごとき難解な哲学を投げかける。
　マーメイドギルディは、厳粛なる沈黙で返応した。
「しかし、それは面白いぞ。ティラノギルディにツインテールか……。あ奴やつを追い詰める戦士が現れたということならば、興味深いものだ」
「ただのイメチェンかもしれないですよ？　首領様は随分とティラノギルディ君を信頼されてますけど、彼、怖がりですし」
「……ティラノギルディに勝てる者はおらぬ。あ奴には、余の力の一端を与えているのだからな……。どんな戦士が相手であろうと、絶対に負けぬ」
「力の、一端……？」
「もしいるなら―そう考えれば、なお面白いがな……」
　今まで何ものにも興味を示さなかった首領が、明らかに何かを感じている。
　それが、ティラノギルディの奪ったツインテール属性なのか。
　それとも、何か別の―。
　マーメイドギルディは一礼して踵きびすを返す。
　事態は死の二菱ダー・イノ・ランヴアスだけに留とどまらない。

　アルティメギルという巨大な組織そのものに影響を及ぼす何かが、始まろうとしているのかもしれない。

第三章　ツインテールのない生活。

　観み束つか家の地下基地には、使用されていない区画がいくつかあるが……その中の一つの部屋に、トゥアールは結いわ翼ばね唯ゆ乃のから託されたデータの解析のためだけの端末を設置した。
　それは演算能力は言うに及ばず、ハッキングやトラップの可能性も考慮して、トゥアールが考え得る限りの防衛システムを組み込んだ、全異世界随一のハイスペックコンピュータだ。
　それを用いても、解析は難航していた。まず、唯乃が見たという究極のツインテールの考察にすら辿たどり着けない。
　技術格差で考えれば、人間がアルティメギルの記録媒体からファイルを取り出すことは、江戸時代の人間にＳＤカードを渡して中のテキストファイルを閲覧しろというぐらいの無理難題だ。
　これは人間に渡す前提のデータではないのだから、今トゥアールが持つ科学力だけで、アルティメギルのそれに肉薄しなくてはならない。
　昼間はいつも通り愛あい香かたちと一緒に総そう二じを励ますべくはしゃぎ、夜はずっとデータの解析に勤いそしむ。総二の童貞を奪うまで寝ないと嘯うそぶいていたトゥアールだが、このデータ解析に時間を要し、結局丸二日ろくに睡眠を取れていなかった。
　だが、その努力が今、ようやく報われようとしている。
「……やった……！」
　目にくまを作り疲れ切った顔が、喜びで綻ほころぶ。まずは第一目標、究極のツインテールを研究したペガサスギルディの考察データへのアクセスに成功したのだ。
　歓喜もほどほどに、トゥアールはすぐに表情を引き締め、次の作業にかかる。

エレメリアン固有の言語で記載された文章を、翻訳しなければいけない。
トゥアールの組んだ独自の翻訳プログラムにかけられ、文章は少しずつ翻訳されていく。
きっとこのデータに、総二を救う手助けになる何かがあるはずだ。
翻訳完了まで四八時間──その表示を見て気が緩んだのか、トゥアールは椅い子すに座ったまま眠りに落ちた。
それからしばらく経たち、部屋の自動ドアが開いた。人影が、足音を立てずにそろりとトゥアールの傍そばに歩み寄る。
「……お疲れ様、トゥアールちゃん」
未み春はるはトゥアールに毛布を羽は織おらせ、その穏やかな寝顔に微笑ほほえみかけた。
「……いつもありがとう」
当然、「こっそり毛布をかけてあげる」シチュエーションに酔っての行動だが……その声は優しかった。

◇

ツインテール属性を奪われてから三日、四日と過ぎ、いよいよ俺の不調は根性だけでは覆くつがえしがたいものになり始めていた。
無意識のうちにツインテールのことを考える習慣が徒あだとなり、一日の間に、何度も意識が遠くなる。ツインテールを思うだけで、気を失いそうになるのだ。
一方、四日連続でエレメリアンが出現したものの、俺のツインテール属性を持っているティラノギルディは一度も現れなかった。敵を撃破したメンバーがイエロー、ブラックと変わっただけで、あとは最初のマンモギルディの時と同じ通常戦闘。手詰まりの状態だ。

虚無感、倦けん怠たい感に抗あらがいながら過ごす日々──焦りが、俺の心を挫くじこうとしてくる。

そして消沈しているのは、俺だけではなくなってきた。

この数日、世界中がどこか寂しげだ。

いつも活気に溢あふれていた陽よう月げつ学園高等部の校舎内も、今日は少し雰囲気が重苦しい。

放課後の今、教室にまばらに残ったクラスメイトが溜ため息いき交じりに会話していた。

「レッドたん大丈夫かな……」

「お見舞いメッセージサイトに数千万件のメッセージが溜たまってたな……俺も出したよ」

これまで、エレメリアンが数日現れないことなどざらにあった。人々を不安にさせるのは、エレメリアンが現れ、ツインテイルズが出撃していても、そこにレッドの姿がないこと。

戦いには勝っているのに、平和が守られているのに、不穏な空気になり始めていた。

すぐ横では、クラスメイトの女子に小声で話しかけられた愛あい香かが困っているようだった。

「何で愛香、ツインテール解ほどいちゃったの!?　レッドたんが病欠なのは寂しいけど、こういう時こそ観み束つか君にツインテールでアピールしなくちゃ駄目じゃん!!」

「ま、まあ、色々あって……」

ぼんやりしながらそれを眺めていた俺も、クラスメイトの男子に声をかけられた。

「観束も元気ねーな……辛つらいだろ、ツインテール大好きなお前は……レッドたん見れなくて」

「ん、そうだな……。レッド、いないもんな……」

曖あい昧まいに返す俺に、別の男子が不思議そうに語りかけてくる。
「しかしよう、観束は何でかレッドたんにだけはずーっと淡泊な気がするんだよなあ」
「そ、それは……」
「ま、遠くのレッドたんより近くの会長ってことか。理事長公認だもんなあ」
そう言ったクラスメイトの男子が、不意に俺をじっと見つめてきた。
「…………なあ、観み束つか。お前ってさ……」
俺は言い知れぬ不安に襲おそわれ、続く言葉を遮さえぎるように勢いよく立ち上がった。
「総そう二じ様ー！　部室に行きましょう！　今日はスペシャルイベントがありますよ!!」
俺が何か言う前に、トゥアールがやおら机の前に身を躍らせた。
トゥアールは俺の手を取り、足早に教室を後にする。愛あい香かもその後をついて来た。
「……ごめん。こんなんじゃ駄目だよな、俺……」
部室棟に入り、後は奥に位置するツインテール部部室を目指すだけとなった時……トゥアールは急に振り返り、スイッチを切り替えたように妖よう艶えんな微笑ほほえみを見せた。
「……足元、気をつけてくださいね」
「え？」
確かに俺は弱っているが、普通の廊下を歩くのに何な故ぜ足元の心配をされるのか。
「こういうお店初めて？　うそぉ、慣れて見えるよ？」
「トゥアール……？　また口調が変わってるけど……それに、店って？」
いつも通りツインテール部部室の扉を開けると──その中は、部室では

なくなっていた。
　長机や棚がない。やや暗めの照明に、何かベッドとか、お風呂とか……あと、奥の方にあるのは、木馬みたいな置物……磔はりつけ台も……？　昨日までなかったものが色々設置されている。
「いらっしゃいませ～、……ええと……おい、観束！　ですわ!!」
　入ってすぐに、そう俺を出迎えたのは、慧え理り那なだった。総二という呼び方を再度断念したようだが、ざっくばらんさに注目したのか、今度は桜さくら川がわ先生の呼び方を模倣しているようだ。
　横には制服姿のイースナ、そして桜川先生。メガ・ネもイースナの後ろに待機している。
　ぽかんとする俺に、皆を代表するようにトゥアールが状況を説明する。
「ここはツインテール部部室ですが、今日からはいかがわしいお店だと思って、心を落ち着けてくださいね！」
「リラックスするには難しいオブジェがそこかしこに見えるんだけど!?」
　トゥアールはクラッカーを鳴らし、慧理那とイースナがくす玉の紐ひもを引っ張った。
　割れたくす玉から出てきた垂れ幕には、『最高の時間をあなたに』と書かれている。
　トゥアールは嬉うれしそうに片手を挙げ、開店する店名を宣言した。
「本日開店！　属性ソー……」
「喫茶にしろおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!」
「ぷおわああああああああああああああああ即座に意味をわかって迎撃してくるエロ蛮族!!」
　それまで俺の後ろに立っていた愛香が、トゥアールをブッ飛ばしがて

ら部室に入る。
「属性喫茶よ属性喫茶！　属性喫茶、本日開店！　ＯＫ⁉」
「オ、オッケー……」
　愛香に強引に納得させられ、俺はカクカクと首を縦に振る。
「学園祭の出し物考えてる時、ツインテール喫茶が出たでしょ？　それをヒントにみんなで考えたの。そーじのお好みに合わせてあたしたちが色んな属性を見せるから、何でもオーダーしていいのよ。巨乳属性ラージバストとか！」
　……それは愛あい香かにとってはラストオーダーじゃないのか。
　しかしこの大がかりな仕掛け……みんなも弱っている俺を見て、焦っているんだな……。
　ツインテール属性以外の属性を高めて、気力を保つ。この数日、様々なことをされてもいまいち実感の湧わかなかったその方法に、俺も今日こそは真しん摯しに向き合わなければ……。
「いいですか従業員の皆さん！　当店のモットーは総そう二じ様の総二様をＭＡＸにすること！　禁止行為はありません！　今の総二様には何をしても医療行為として法的に許されます‼」
　愛香、慧え理り那な、イースナ、桜さくら川がわ先生を整列させ、不穏なミーティングを始めるトゥアール。
「指名率低そうなＭＩＫＯＴＯ嬢！　Ｎｏ．１の私が接客文句を指導いたしましょう。なるべく露出の多くなる属性で、こんなおばさんの裸、嬉しくないだろ？　とか言うんです！」
「いや私はまだ二九だぞおばさんじゃないだろお姉さんだろ‼」
「何でそこで謙けん遜そんしないんですか！　謙虚さを失った行き遅れ女なんて、折れたＬＡＮケーブルの爪つめ並みの価値しかありませんよ‼」
　トゥアールと桜川先生の言い争いを見守っていたイースナが、にへ

らっと笑う。
「…………おれた、らん……」
「何ですかイースナその目は喧けん嘩か売ってんですかあああああああああああ!!」
　まあまあとメガ・ネに制止される。さすがのトゥアールも、メガ・ネには弱いんだよなあ。
「そもそも、そーじのＭＡＸなんて曖あい昧まいな基準持ち出されても困るわよ!!」
　ハイテンションのトゥアールに反論する愛香。ファジーなマニュアルは許せないようだ。
「愛香さんだって見たことはあるでしょう？　総二様のＭＡＸを!!」
「え!?　ま、まあ、朝起こしに行けば……でも見ようと思って見たわけじゃなくてね!?」
「わ、私も、見ました……ＭＡＸ……クローゼットの隙すき間まから、ばっちり……」
　トゥアール、愛香、イースナが思い思いの表情で猛烈に恐ろしい会話をしている。
　この数日、苦しみと痛みに耐えてきたが……いよいよ俺は最期の時を迎えてしまいそうだ。
「観み束つか君のＭＡＸって何ですの!?　何かかっこいいですわ！　わたくし見てません!!」
「ええ、ええ、それはもうかっこいいですよ」
　地上の邪悪を全て凝縮したような笑顔で慧理那の肩を叩たたくトゥアール。
「ですが、慧理那さんだけ見ていないのは可哀かわい想そうですね……すみませーん総二様、もう今すぐＭＡＸにしてもらっていいですかー？　私がお手伝いしま……ほふうっ!!」

　愛香のＭＡＸナックルで、床、天井、床、と一往復半バウンドするトゥアール。
　皆の気持ちはありがたいが……この店はやばい。俺の本能が、逃走を訴えている。
　何はなくとも踵きびすを返し、部室から逃げ出そうとした俺は──慧理那に捕捉された。
「あっ、逃げたらだめですわ観み束つかく……逃げるな観束！　ですわ！　えいっ!!」
　慧え理り那なが無造作に放った手錠の片方の輪が、絡みつくように俺の右手首に嵌はまる。
「何ィ!?」
　それに驚いている隙すきに追いついてきた慧理那はさらに俺の左手を取ってもう片方の輪をカチャリと嵌はめ込み、とうとう俺を後ろ手で拘束してしまった。
「わあ、成功しましたわ！　お母様に教えてもらった必殺技ですの！」
　忍術じみた捕縛術を成功させ、うふふ、と照れくさそうに笑う慧理那。
「なんでスマホ感覚で普段からポケットに手錠忍ばせてんだ慧理那ああああああああああ!!」
　神しん堂どう家は用途不明の秘伝を気安く子孫代々受け継ぎすぎじゃないのか!!
「お手柄です慧理那さん！　手錠で両腕を拘束された総そう二じ様……悪いた戯ずらし放題ですね!!」
　ここは治外法権……脱出して大使館に逃げ込むしかない。拘束されたまま逃亡を計る俺。
「はい、座ってな～」
　後ろ手でバランスを崩しそうになった俺は、すかさずメガ・ネが差し

出した椅い子すに倒れるようにしてもたれかかった。……観念するまで、あまりにも早かった。
　イースナがメニュー表を差し出してくる。裸眼なのでフラフラしていて危なっかしい。
　と言っても、ファミレスのようにサンプル写真が載っているわけではなく、ポップな字体でこれまでに倒したエレメリアンの属性力エレメーラが箇条書きにされているのみだ。
　俺が選ぶのを迷っていると、トゥアール店員がおすすめをアドバイスしてきた。
「まずは当然、巨乳属性ラージバストです。私のおっぱいを触ってください」
「いきなり難易度ＭＡＸじゃねーか!!」
「ＭＡＸ？　難易度を二六段階に分けたら、下から二番目のＢ相当のミッションですよ？」
　これでブービー難易度なんて……最高の難易度Ｚは一体何が待ち受けているんだ。
「じゃあ、そーじ……」
　トゥアールに突き出しかけた拳こぶしを下ろし、愛あい香かはもじもじしながら俺に訴えてきた。
「あ、あたしの胸も……触って!!」
　とうとう衰弱が鼓こ膜まくにまで及んでしまったのか、あり得ない言葉が聞こえた。
「トゥアールが……分析で……胸なの！　仕方なくて作戦があたしなの!!」
　愛香が、日本語も怪しくなるほどどぎまぎしながら、胸を突き出してにじり寄ってくる。脚ならいざ知らず、胸……どうやら幻聴ではなかったようだ。

「いきなり難易度ＭＡＸを勧めるのはやめてください！　愛香さんの胸を触るのは、実体無き虚無を素手で触れる異能力を身につけた先に待つ最終ミッションです!!」
　異能を粉砕するは、実なる肉体。放たれる愛香の実体拳けんで、トゥアールの意識が亜空間の果てに飛んでいく。
　……難易度Ｚは愛香の胸を触ることだったのか……。あっさり謎なぞが解明されてしまった。
「なあ観み束つか、早くメニューから選べですわ!!」
　にこにこしながら野生味をほとばしらせる慧え理り那な。
　親しい桜さくら川がわ先生の口調は真ま似ねしやすいようだが、慧理那にフランクな口調が桁けた違いに似合わないと感じるのは……それだけ長い時間一緒にいたからだろうか。
「……例えば、これ……わたくしが戦ったエレメリアンの属性ですもの……お漏らし属性ピーイングを選ばれても、わたくしは後悔しませんわ……はあ、はあ……!!」
　自信満々にお漏らし属性ピーイングを指差す慧理那。トゥアールもそれを補助するかのように、空のペットボトルや透明なグラスを用意し始めた。何に使うか深くは考えたくない。
「俺が激しく後悔しそうだから遠慮しておくよ……」
　イースナがえへえへと笑いながら、俺の肩に顔を寄せてきた。
「じゃ、じゃあ、涎属性スロバー……は……？　たくさん、出します……。飲んでも、いいよ……」
「みんな、液体系の属性から少し離れようぜ!?」
　自発的に選ばない限り、斜め上の当店お勧めが繰り出され続ける。何か選ばねばと焦っていた俺は、慧理那の口にした「自分が戦ったエレメリアン」という言葉に注目した。
　自分に合う属性を見つけるなら、戦った相手……属性をぶつけ合った

相手のものの方が、特に印象に残っている……感じ取りやすいはずだよな。
「それならこの、教師属性テイーチヤーで……」
　逃走の意志無しと判断され、ようやく手錠を外してもらった指で、教師属性テイーチヤーを示す。ユグドラシルギルディの属性力エレメーラだ。
「その担当は私だな。ちょっと待っていろ」
　桜川先生はそう言い残し、部屋の隅のロッカーの隣に新設されたボックスへと向かった。どうやらあれは更衣室のようだ。
　トゥアールが、悪巧みを勧めるように小声で囁ささやいてきた。
「総そう二じ様総二様。あの更衣室、総二様の『えっ』と言う声が作動スイッチとなって壁が透明になりますから、お好きなタイミングでどうぞ」
　えっ……、と条件反射で言いそうになった。危ねえ!!
　惜しいですね、と指を鳴らすトゥアール。俺の言動を先読みしたトラップだ。
　要所要所に罠わなを設置して、緊張感で俺の気力を保たせようというのだろうか……。
　壁が透明になることなく無事に着替えを終え出てきた桜川先生は、トレードマークのメイド服を脱ぎ、タイトなスーツに身を包んだ女教師スタイルになっていた。
「どうだ。自分でも結構新鮮なんだが」
「はい、すごく似合ってます」
　本人も、メイド服以外を着用するのはまんざらでもないようだ。
　シャツの前を開き、胸元を露出させている。三角眼め鏡がね、手には指示棒と、装飾品にもこだわりがあるのは、トゥアールのプロデュースだからだろう。

担当って何のことだろうと思ったけど、そういえば桜さくら川がわ先生は、一応陽よう月げつ学園高等部の教師でもあるんだよな。メイドの印象が鮮烈すぎて、教師のイメージが全然無かった……。
「そ、そんなに見つめるな。恥ずかしいぞ……」
身体からだを抱いて身をよじる桜川先生。不思議な話だが、桜川先生の場合、ツインテールを解ほどくことでかえって子供っぽい仕草が似合う気がする。
「総そう二じさん、私のも、早く……選んで……!!」
イースナが俺の手を握り、強引にメニュー表を指差させようと急かしてくる。
「下着属性アンダーウエアーとか、超、おすすめ……」
「そんな属性のエレメリアン、いたか？」
「私が……皆さんと会う前に、倒しました……」
ともあれ、さすがに下着は困るので、制服姿に喜んでいたイースナにもっと学生っぽさを体感して欲しいという思いもあって、俺は体操服属性ブルマをオーダーした。
「……ふふふ、総二さん、マニアック……。下着より、ブルマの方がえっちと思う、人……」
健全な学生気分を体感して欲しいという願いが、いまいち伝わっていないようだが……着替えて出てきたイースナは、思った通り体操服姿が似合っていた。
陽月学園の指定体操服はショートパンツだが、イースナが着用しているのはブルマだ。
下ろした黒髪に、真新しく白いシャツが映える。
普段引きこもりのイースナの健康的な体操服姿は、見学しているメガ・ネも嬉うれしそうだ。
「運動、しましょう……総二さんの頭で、跳び箱……。跳べなくて、

色々当たります……」
　しきりにブルマをくいくいと引っ張りながら近付いてくるイースナ。
「……じゃあ……愛あい香か！　これなんてどうだ、学校水着属性スクールスイム!!」
　イースナの提案を誤魔化すように愛香にオーダーを振ったのだが、やけに狼狽うろたえ始めた。
「はあ!?　そ、そーじ……そういうのが好きなの!?　まあ、いいけど……」
　もじもじしながら更衣室に入っていく愛香。トゥアールがにやけ顔でそれを見送る。
「妖怪パッドビキニが何を一丁前に恥ずかしがってるんでしょうねえ」
　更衣室に入って程なく、中の愛香から声がかけられる。
「ねえ、そーじ！　あ、い、う……の次って何だったっけ？」
　誘導じみた質問に首を傾げる俺に、ハンカチで目元を押さえながらトゥアールが言った。
「……総二様、ゴリラの知能指数で精一杯考えた作戦です、壁を消して介かい錯しやくを……」
　介錯のその意味もわからぬままに時は流れ、愛香が着替え終わって中から出てきた。
「……や、やっぱ似合わないわよね、子供っぽすぎて……」
　羞しゆう恥ちに身をよじる愛香。しきりに送られてくる視線も不安げだ。
　胸に張られた、全く盛り上がっていないゼッケンには「あいか」と平仮名で書いてある。
　スクール水着に関しては第一人者を自称するイースナのプロデュースらしく、満足げに頷うなずいている。
　当人は火がついたように顔を真まっ赤かにしているが……すまん愛あ

い香か、恐ろしくマッチしてる。
　そして、愛香が着替えている間にオーダーを伝えておき、入れ替わりで更衣室に入っていった慧え理り那なも、意外に早く出てきた……のだが。
「慧理那、それ……バニーガール？」
「……兎耳属性ラビット……ですので……」
　兎耳属性ラビットを強調するために、バニーガール服を着たようだ。
　しかし、小学生と見み紛まごう慧理那にこの出で立ちは、何とアンバランスなんだ……。
　そう思った第一印象から、見れば見るほど、似合っているように感じてくる。
　慧理那は、兎耳のカチューシャの横で、両手を同じようにくいっと曲げた。
「……ぴょん」
　やり終えて恥ずかしさが一気に襲ってきたのか、慧理那は顔を覆おおって蹲うずくまってしまう。
「は、恥ずかしいですわ……！」
　もはや口調を変える余裕すらなくなってしまったようだ……。
「かっわいいいですねえええええええええええええええええええええええええええ!!」
「きゃあっ!?」
　トゥアールに抱きつかれ、慧理那が軽く悲鳴を上げる。スクール水着を装着して心なしか機動性を増したように感じる愛香が、トゥアールの肩をむんずと掴つかんだ。
　黄泉国よもつくにへと生者を引き摺ずり込む鬼の腕が、トゥアールを襲う。
「あんたも何か着替えなさい！　そーじ、トゥアールは白骨の属性でい

いわよね!?」
「ほあああああああああああああああマジでやりかねない人!!」
　何とか滅びという名の服にお着替えされるのを回避して更衣室から出てくると……トゥアールは、看護服に身を包んでいた。
　本来ならば聖母のように慈愛に満ちた雰囲気のトゥアールには、よく似合っている。
「看護服属性ナースって、スワンギルディだっけ？　倒したのにの属性玉エレメーラオーブが残らなかったわよね」
　それは俺も不思議に思っていたが……確実に倒した自負があるからだろう、愛香は特に深く追求はしなかった。
「トゥ、トゥアール、さん……何で、看護服の上から、白衣、着てるんですか……！　台無しです……！　女医さんと看護士さんが、合体してます……!!」
「白衣は、私のトレードマークですから……」
　白衣を引っ張って脱がしながら厳しいファッションチェックをするイースナに、珍しくトゥアールの反論が弱々しい。呆あきれる愛香。
「ああ、あんた制服どころか水着の時でも白衣着てたもんね……」
　それほどまでのこだわりなら、ツインテールや眼め鏡がねと違って属性ではないのに、無理にやめてもらうのも悪いよな。俺は、できる限りのフォローをした。
「確かに水着とか、今みたく看護服の上にまで白衣を着るのって、珍しいかもしれないけど……別に俺、トゥアールはそのままでいいと思うぞ」
「え」
　目をしばたたかせるトゥアール。
　トゥアールと出会ってから、それまでと一番印象が変わった衣服が、白衣だ。

　それまでは科学の象徴というか、誤解を怖れずに言えば何か無機質な、冷たいイメージだったのだが……トゥアールが着ていると、これが全くそう感じないから不思議だ。
　さすがに何と組み合わせしても調和していると言ったら嘘うそになるが、トゥアールのトレードマークとして、見ていて安心する。
「トゥアールには、白衣がよく似合うからさ」
　そういう意味では、何か気になる属性を挙げろと言われているが、まず〝白衣〟がそうだな。
　白衣を素敵だな、って思う属性もあるんだろうか。これをみんなに言ってみようか、と思ったのだが……。
「そ、そうですか……あ、ありがとうござ、ま、総そう二じさ、ま……」
　やけに瞬まばたきをしながら挙動不審になり、白衣を手渡されるもなかなか羽は織おれずにいるトゥアール。愛あい香かが白衣を引ったくり、無理矢理トゥアールの背にほっ被かぶせた。



「プラス方向に打たれ弱いわねえあんたは!!」
「そっくりそのまま返しますよ毎晩妄想でベッドギシギシさせてるくせに！　一人で!!」
「あんたはどうなのよあんたはああああああああああああああああああ!!」
　珍しい反論と共に襲いかかる愛香へ、トゥアールは白衣のポケットから取り出した光線銃らしきものを向けた。
「店の規約に反する従業員は、このアンチアイカシステム一〇号・アイカヌガセールで、速すみやかに全裸にしてさしあげましょう！　エロアニメのように都合よく服だけ燃えます!!」
　とうとう二桁けたの大台に乗ったアンチアイカシステムは、原点に立ち返って銃型だ。
　無論、スクール水着姿の愛香は泳ぐようにしてその光線を躲かわし、間合いを詰めた。
　愛香に掴つかまれて投とう擲てきされ、レール不要で爆走する次代の乗り物と化すトゥアール。
　部室を縦断するトゥアールリニアモーターカーが開通してしまった。
　……やっぱり、白衣の属性のことは言わない方がいいか。このリアクションからすると、トゥアールに言っても迷惑かもしれないし。

　スクール水着と看護服とバニー服とブルマと女教師スーツに身を包んだみんなに囲まれ、俺はその後も様々な属性を見せてもらった。
　数あま多た存在する、人間の心の輝き。
　これからもそれを守っていくためにも俺は、何としてもツインテールを取り戻さなければならないんだ……。

◇

　看護服属性ナースのスワンギルディが部隊を離脱し、フェニックスギルディに師事して早一ひと月つき。
　修行に勤いそしむ彼の前に、久方ぶりにフェニックスギルディは姿を現した。
　人里離れた場所に潜む洞穴を拠点に、今日もスワンギルディは己おのれを鍛きたえる。
「どうだ、スワンギルディ。五大修練の一つ━メロゲイマ・アニトゥラーは」
「……は、何とか完成しております……御拝読を!!」
「おう!!」
　フェニックスギルディが知り、スワンギルディに修行法を教えたアルティメギル五大修練の一つ、メロゲイマ・アニトゥラー。
　それは、自分自身を題材にして創作作品を書き上げ、他人に批評してもらうという地獄の荒行だ。
　スワンギルディが書き上げた原稿……ダブルクリップで右隅を留められたＡ４サイズのコピー用紙およそ一五〇枚を受け取り、フェニックスギルディは早さつ速そく目を通していった。
「親友の墓石の前で紫し煙えんをくゆらせる、陰かげのある男……私立探偵、スワンギルディ……」
「あ、あの、音読はできれば……」
　スワンギルディの懇こん願がんを、ぴしゃりと跳ね飛ばす。
「馬ば鹿か野郎、お前が聞かなきゃ意味ねえだろう!!」
　この眼前音読の破壊力に耐えきれず、爆発してしまうエレメリアンも多かったという。
「懐ふところに忍ばせた……剣銃……？　おい、せっかくいいところで誤字ってるじゃねえか!!」

「ぐはああああ……!!」
　音読だけでは飽き足らず、赤ペンで校こう閲えつまでしていくフェニックスギルディ。
　気合いを入れて書いたシーンにことごとく駄目出しをされていくその苦しみは、まさに現世地獄。スワンギルディは身体からだを蝕むしばむダメージに脂汗を流しながら耐えた。
「もうここには来ないでと言ったはずよ……背後から声をかけてきたのは、看護服の女性……。なあ、こういうシーンって看護服だと合わなくねえか？」
「お許しを！　駄目出しはお許しを!!」
　この分では、一章を音読し終える頃には爆発四散してしまうだろう。やむを得ず、フェニックスギルディは「ナース帽の中からメスを取り出し構える女性」のシーンまで読み終えたところで紙束を閉じた。
「いい線はいってるが、まだまだだな!!」
　どの辺がいい線なのか、常人に理解できる領域ではなかった。
「面めん目ぼく次第もありませぬ……」
　時期尚しよう早そうと知りながら今日フェニックスギルディが顔を見せたのには、理由がある。
「実はよ、しばらくここへは顔を出せなくなりそうだなんだが……この分じゃ、しばらく一人で頑張った方が効果がありそうだな。頑張れよ、スワンギルディ！」
　少し寂しそうにしながらも、スワンギルディはしっかりと頷うなずいた。
「はっ！　必ず……!!」
　深々と頭こうべを垂れ、しばしの別れに万感を込めるスワンギルディ。
　しかし気のせいだろうか。

炎の翼を讃たたえるその背が、今日に限ってどこか儚はかなげに見えるのは……。

スワンギルディと別れ、しばらく森を歩いた後……木々の狭はざ間まから射す太陽に、フェニックスギルディは決意の眼まな差ざしを注いだ。
「……お日様が怯おびえてやがる……。そろそろやる気か、ティラノギルディ……」
ツインテイルズの手助けはしない。一度そう決めた以上、撤回はしない。だが──。
瞬間、不穏な気配に背の翼を揺らされ、フェニックスギルディは疾とく振り返った。
「──可愛かわいいお弟子さんね。あなたも弟子君も、好関係このみだわ。フェニックスギルディ君」
「……誰だれだ、てめえ？」
誰が相手でも遠慮なくパーソナルスペースを侵略する、そんな気安さを信条にしているフェニックスギルディでさえ初見で警戒を余よ儀ぎなくされた、白いローブをまとったエレメリアン。
「あなたの親友の……出来の悪い後輩よ。ちょっとお話ししない？」
隠し立てもせずフードを下ろし、顔を見せたのは……マーメイドギルディだった。

◇

属性喫茶で思う存分総そう二じを楽しませ、慰めたその日の夜。
トゥアールは休む間もなく、基地の奥の解読室で作業に没頭していた。

ついに翻訳が完了したペガサスギルディの研究論文を、一刻も早く読破しなければならない。誰の目も無いからこそ見せる颯然とした科学者の顔で、トゥアールはそのデータを備つぶさに速読していった。

総二はまた、トゥアールが目の下のくまを薄化げ粧しようで隠していることに気付いていたようだ。

自分がどんなに苦しい時でも、必ず親しい人たちを労いたわろうとする。いくらでも我わが侭ままをぶつければいいのに……きっと総二は、余裕が無い今の自分の言動で他者を傷付けてしまわないかとさえ、不安に思っているに違いない。

今日も総二とたくさん触れ合えて幸せだったが……総二の笑顔を取り戻すまで、本当の幸せはあり得ない。

特性、能力、有益性……。アルティメギルが……いや、首領がどれだけ究極のツインテールという存在を渇望しているかが、生々しく列挙され、危き惧ぐを綴つづった論文。

ある一行で目を留とめ──トゥアールはしばし忘れていた瞬まばたきを、何度も繰り返した。

「────これ、は」

トゥアールは、顔面を蒼白にさせる。

そこから先へ……考察文をスクロールさせることができなかった。

◇

──そしてとうとう……総二がツインテール属性を奪われた夜から、七日目。

放課後、トゥアールと二人でツインテール部の部室へ向かう愛あい香かは、露骨に苛いら立だっていた。目に映る物全てエレメリアンに見えると言わんばかりに、全身から殺気を放っている。

「……来ないじゃない、ティラノギルディ……！　あいつやっぱり、もうこの世界どうでもよくなったんじゃないの……!?」
　侵攻を急ぐはずだという目測を立てていたが、いよいよ雲行きも怪あやしくなってきた。
　総そう二じには、先に行って部室の準備をすると伝え、教室にしばらく残ってもらっている。
　懸命に平静を装う総二よりも先に自分が焦あせりで潰つぶれてしまいそうで、愛あい香かは気落ちした。
「正念場ですよ愛香さん！　この数日でわかりましたが、総二様は部位系よりも装飾系の属性に弱い傾向があります。今日こそ、部室は風営法ガン無視店舗に生まれ変わるでしょう!!」
　愛香はスキップをしながら浮かれるトゥーアルを見て、溜ため息いきをついた。
「何か、こういう時あんたが頼もしくて仕方がないわよ……。あたしなんて、日毎に不安でカリカリしてきてしょうがないのにさ……あんたはいつも通りのテンションなんだもん」
　顔の険けんを緩める愛香。トゥアールの底無しの明るさに、今は救われているのだろう。
「よっし！　あたしも気合い入れ直さないと！　まだ総二は頑張れそうだし、早くティラノギルディの奴を引きずり出さないといけないもんね!!」
　部室棟に足を踏み入れたその時──愛香の言葉に反応するようにスキップをやめ、トゥアールは後ろ手に組んで頭を垂れた。
「……ええ。総二様……頑張ってらっしゃいますもんね……」
　そのまま追い越してしまった愛香が足を止め、立ち尽くすトゥアールへと振り返る。
「……トゥアール？」

　俯うつむき、垂れた前髪に隠れた目元は窺うかがえなかったが……白い頬ほおを、雫しずくが滑り落ちていった。
「…………あんた、泣い、て……」
　愛香は慌ててトゥアールの手を引き、人ひと気けのない階段裏まで移動した。
「ああもう、情けないですね……。よりによって愛香さんの前で……。でも、総二様の前では絶対に泣けませんから……」
　無理矢理白衣の袖そでで涙を拭うトゥアール。
　底無しの明るさなどと、思い違いも甚はなはだしい。
　トゥアールも、誰だれよりも辛つらいに決まっているではないか。
「不安……だよね、わかるけど、でももう少しだから、あたしたちが頑張んないと！　ね？」
　涙する友人を、茶化し気味に元気づけることなどできない。愛香はこれ以上ないほど素直に力強く励ました。
「あいつ自身が誰よりも頑張ってるんだもん。あたしたちがツインテール属性を取り戻すまで、絶対に身体からだとの繋つながりを切らさないように……って」
　トゥアールが力なくかぶりを振る。
「……トゥアール……？」
　逆にその純粋な励ましが……数日間耐えてきた心を折ってしまったかのように。
　そして、自じ嘲ちように震ふるえる声で告げた。

「――総そう二じ様と属性力エレメーラとの繋つながりは、もうとっくに切れています……」

「………………は？」

　一瞬放心しかけたものの、愛あい香かは制服のポケットからトゥアルフォンを取り出した。
　操作に迷いながらもテレビ機能を起動し、適当な報道バラエティ番組を見つける。
　果たしていつも通り、テイルレッドが特集されていた。
「ほら、テイルレッドは……！」
　その変わらぬツインテールを見て愛香は安あん堵どし、トゥアールにも画面を見せる。
「ごめんなさい、愛香さん。私、嘘うそをついていました……。知ってたんです。レッドの正体が世界に晒さらされることはないって」
「……え……」
　日の差し込まない、薄暗い階段の陰で立ち尽くす二人。
「元々総二様は特異な例です。私のように変身前からツインテールだったら、属性力エレメーラの呪のろいで自身にまつわる全てのツインテールが改かい竄ざんされるでしょう。ですが、総二様はテイルギアの力でツインテールになった……」
　顔を上げ、愛香が差し出したままのトゥアルフォンの画面を見つめるトゥアール。
　痛々しい笑顔に、瞳ひとみは涙を拭ってなお堪こらえきれぬほどの涙を湛たたえていた。
「総二様を女の子に、ツインテールにしているのはテイルブレスに込められた私のツインテール属性なのですから……あれが無事ならば、テイルレッドの記録が変化するはずは無かったんです……」
　愛香は困惑したままだ。トゥアールが長々と何かを説明する時はいつも、自信ありげに、誇らしげに語っていた。
　だが今自分の確信を絞り出す彼女は、悲痛に彩られている。
「だから、不安なのはわかるけどネガティブに考えすぎよ！　それって

逆に、そーじが属性力エレメーラとの繋がりを失ったっていう証拠も無いってことでしょ!?」

あくまで前向きにトゥアールを励まそうとする愛香。そんな彼女の心を折る、残酷なまでに決定的な証拠が突きつけられた。

「……これを見てください」

今度は自分のトゥアルフォンを差し出すトゥアール。

文化祭の写真だった。総二とトゥアールが並んで映っている。総二が撮られているのに気付いた様子はないので、またトゥアールが何かを使って盗撮したのだろう。

愛香も思わず悔しがる青春の一ページ……思い出のツーショット写真の撮影場所は、この部室棟だった。後ろの壁には、無数の写真が貼はり付けられている。

「あれ」

愛あい香かが何かに気付いたのに合わせ、トゥアールは画面をタップしてホログラフのように浮き上がらせ、写真を拡大表示する。

拡大し明らかになる、異様な光景。

総そう二じとトゥアールの背後の写真は、全て学園の廊下や教室の壁などが映っており、人物は一枚も収められていなかった。

「――――その後ろの写真には全て、ソーラちゃんが映っていました」

愛香も思い出したようだ。つい先日の文化祭で、総二とトゥアールは互いの想いを吐と露ろし合っていた。

その発端となったのが、未いまだ存続していた非公認部活動・ソーラたんファンクラ部がゲリラ的に展示していたソーラの写真だったのだ。

「属性力エレメーラの消失で影響を受けたのは、テイルレッドではありません。総二様自身の属性力エレメーラがもたらした存在――ソーラです」

存在そのものが最初から無かったように、ソーラの影も形も無くなっ

ている。
　しかも……だ。
　愛香は息を呑のんで、もう一度写真を凝視する。
　トゥアールのように、写真の中の自分がツインテールではなくなるどころではない。
　ソーラの元となった、総二さえもが映ってもいないのだ。
　チープな心霊番組のような演出が、逆にどうしようもない絶望となって愛香を震ふるえ上がらせた。
「昨夜……ペガサスギルディの究極のツインテールに関する考察を、解読しました……」
　待ち望んでいたはずの報──しかし、それを聞いた瞬間、愛香は肩を震わせた。
「〝人間を、究極のツインテールへと到達させてはいけない。究極のツインテールは、属性力エレメーラそのものが別個にして一個の生命体となる〟……と……。総二様は、自分の属性力エレメーラをエレメリアンと同等の存在に進化させつつあったのです……」
「何よ、それ……」
　エレメリアンになるぞ。ツインテールになるぞ。
　戦いの最中、そんなやりとりを総二とエレメリアンの間で聞いたこともあった。
　馬ば鹿かな応酬をしていると、頭を痛めたものだ。
　まさかそれが、現実として突きつけられるなんて──。
「究極のツインテールに近づいていた総二様のツインテール属性は、テイルギアのツインテール属性と同じ、加工された状態……。抽出された瞬間に肉体との繫つながりは切れ、二度と元には戻らなくなります……。私のツインテール属性と同じように……」
　ブレスに宿る、ツインテール属性と同じように……。

「ツインテール属性を取り戻しても、総二様には戻せない……」

　前触れなくスリープにされるトゥアルフォンの電源。

　真っ黒な画面に映った自分の驚きよう愕がくの表情を、愛あい香かは言葉もなく見つめていた。

「総そう二じ様はもう……二度とツインテールを愛することはできません……」

　涙するトゥアールに、愛香が手を差し伸べた瞬間。

　不意の気配に驚き、廊下を振り返る。

　……総二が、呆ぼう然ぜんとしながら立っていた。

　来てくれと言った時間には、随分早い。

「□□□□！」

　総二の手に握られているトゥアルフォンを見て、愛香はその理由を悟った。

　総二がこの数日、不安げにテイルレッドの写真や動画を見て無事を確認していたことを、愛香は痛いほど目にしてきた。

　今自分が見せられたのと同じように、総二も教室でテイルレッドの写真を確認している最中……学園祭の時の写真を目にしてしまった。

　トゥアールに理由を聞こうと、ここまで慌てて追いかけて来たのだろう……。

　悔やんでも悔やみきれない油断だった。

　ツインテールの気配を辿たどることのできない今の総二なら、不意の鉢合わせはないだろうと……愛香は、普段は怠おこたらない気配への警戒を失念していたのだ。

　総二が学生鞄かばんと一緒にトゥアルフォンを滑り落としてしまい、乾いた音が廊下に響く。

「……そーじ……」

　だがこの予期せぬ邂かい逅こうは、偶然ではなく天のもたらした必然だったのだろう。

「あ……」

　気を失いかねないほど顔を青ざめさせ、総二は壁に手をつく。

　二度とツインテールを愛せない──その言葉が引き金となった。

　ツインテール属性を取り戻し、いつものようにツインテールを愛する。

　たった一つ残されていた心の支えを失い、日常への帰還が叶かなわぬ夢と消えたことを悟り。

「う、あ……あああああああああああああああ!!」

「総二様っ!!」

「待って、そーじ!!」

　トゥアールと愛香の制止を聞かず、総二は脱だつ兎との如くその場を離れた。

　文字通り最後の希望が……ツインテールが消え去り、総二の心は完全に砕けてしまった──。

第四章　宇宙一のツインテール馬ば鹿か。

　どこをどう走ったのか覚えていない。廊下だった気もするし、体育館にも行った気がする。気がついたら校舎の外に出ていた。
　愛あい香かから、トゥアールから……何もかもから逃げるように、がむしゃらに走った。
　通学路からほど離れた空き地で、俺は崩れ落ち、地面に横たわる。
　ツインテールを……もう、愛せない。俺、とっくに手遅れだったのか……。
「……何で、こんなことになっちまったんだ……」
　俺はただ……ツインテールが好きなだけだったのに。
「俺が、何したっていうんだよ……」
　零こぼれ出た弱音のあまりの情けなさに、耐えていた数日分の苦痛が一斉に襲おそってきた。
　究極のツインテールに近づき、世界中の人々に過剰なほどのツインテールを振りまいた……俺の存在そのものが、罪だっていうのか。その罰が、これなのか!?
　俺がツインテール属性を持ったままでは、ツインテール属性が全世界を覆おおい、そしてそれは、いつかアルティメギルに奪われてしまう。
　この喪失の痛みを、哀かなしみを、何十億という人々にもたらす厄やく災さいとなるわけにはいかない。
　俺がツインテール属性を失う……それが、世界の意志なのかもしれない……。
　……なあ、ロエル、リルナ……。
　君たちは、世界の平和のためにツインテールを封じる決断をしたんだよな……。

俺も……同じになっちゃったよ……。
でも君たちのように、笑顔ではいられないみたいだ……。俺、弱いよな……。
倒れ伏したまま、身体からだが風化していく錯覚を覚える。
もう、指一本たりとも動かす力は残っていない。
頑張ろうとか、最後まで諦あきらめないとか、今までなら俺が率先して言っていた励ましが、浮かべることすらできずに消えていく。

ごめん、愛香、トゥアール、慧え理り那な、イースナ、桜さくら川がわ先生……みんな……。
俺はもう、戦えない……。

◇

愛あい香かとトゥアールは二人、ツインテール部部室で向き合い座っていた。
さすがの愛香もショックで意気消沈してしまっている。
あんなにも悲しみを露あらわにした総そう二じは、幼おさな馴な染じみの愛香でも初めて目にしたのだ。
「……追いかけないんですか、愛香さん……」
トゥアールの問いに、愛香は沈痛な面持ちで口を開いた。
「追いかけて、なんて言えばいいの……？　ツインテールが無くなっても心配しないで、あたしたちがついてるからって、気軽に慰めればいいの!?　わかってるでしょ、あいつにとってツインテールがどれだけ重い存在だったか!!」
「……そうですね……」
トゥアールの言葉に生気はない。校内であんなことを口走るなど、あ

まりにも配慮が足りなかった。
「私のせいです……」
　トゥアールは茫ぼう洋ようとした瞳ひとみで、総二が廊下に落としていった学生鞄かばんを抱き締めた。
「ツインテールを愛する、普通の優しい男の子だった総二様を、戦士にしてしまった……」
　だがすぐに、自分にそんな資格は無いと言わんばかりに手放し……机の上にそっと戻す。
「私がこの世界に来なければ……総二様はツインテール属性を失うことはなかったかもしれない……。私が余計なことをしなければ、総二様が手にした力がテイルギアでなければ、もっと違う未来があったかもしれない……！　私が総二様を……不幸にしてしまったんです……!!」
　愛香は糾弾も慰めもせず、黙ってトゥアールの懺ざん悔げを聞いていた。

　無言で時間だけが過ぎていく。
　トゥアールと愛香、誰だれよりも騒がしいこの組み合わせでこんなに静かな時間など、今までにあっただろうか。こんな、痛いほどの静寂が。
「愛香さん。私……」
　力なく口を開いたのは……トゥアールだった。
「総二様がツインテール属性を失って、本当は少しほっとしていたんです……」
　ずっと虚うつろだった愛香の目に、ようやく光が灯ともる。だがそれは、憤りでさえない、激しい動揺ゆえの光だった。
「――やっと同じになれた、って……」
　何も言えず、ただトゥアールを睨ねめ付ける愛香。

「総二様が私と同じ境遇になったことに、安あん堵どしてしまった……喜びさえ感じてしまった……だって、ツインテールを持たない私では、永遠に総二様が振り向いてくれることはないから……総二様の私への思いは、同情でしかないから‼」

　トゥアールは自じ嘲ちようしながら、再び涙を流した。

「私、最低です……」

　愛あい香かは、机に手をついて立ち上がる。

「馬ば鹿か正直にそんなこと言ったら、あたしが殴ってやるとでも思った？」

　そして、投げやりに溜ため息いきをついた。

「――あたしだって同じよ」

　片手を軸に、跳び箱の要領で長机を飛び越える愛香。

　対面に座っていたトゥアールの真横に着地し、隣の椅い子すに腰掛けた。

「そーじがツインテール馬鹿じゃなくなって……ちょっとほっとした。だってあたし……ずっと怖かったんだもん。このまま成長して、大人になって……いつまでツインテールを続けていられるんだろう、って」

　目元を擦こするトゥアールを横目に、愛香は続ける。

「ここでそーじがツインテール好きを卒業してくれたら、ようやく普通の恋愛ができるのかな、なんて……そんなこと、考えてた」

　言ってしまった、とはにかみ、愛香は椅子の背もたれにしなだれかかった。

「属性力エレメーラ無くしても、意外に平気じゃない？　もしかしたら、このままでも大丈夫なんじゃない？　って……馬鹿よね、あたし」

　そしてすぐに上体を跳ね戻し、机の上に腕をついた。俯うつむくと、結んでいない髪がゆるやかに垂れていく。

「そーじがどれだけ苦しさに耐えてこの数日過ごしてきたか……わかっ

てたつもりでも、全然わかってなかった……。何より、自分自身をわかってなかった」
　晴れやかな顔で愛香は天を仰ぎ──
「そんな心の片隅を過よぎっただけの小さな欲望に罪悪感を感じるより、もっともっと強く、思い知ったことがあるでしょ？　この数日間、あいつをずっと見てて……」
　そして、トゥアールに笑いかけた。
「……やっぱりそーじは、ツインテールが好きじゃなきゃ駄目なんだ……ってね。あんたもそう思ったんでしょ？　トゥアール」
「……ええ。結局、そこに辿たどり着いてしまいました」
　涙の乾いた頬ほおを緩め、トゥアールは観念したように頷うなずいた。
「……あたしはそーじが好き。世界一ツインテール馬鹿の……そーじが」
「……私は総そう二じ様が好きです。ツインテールを一途に想う……総二様が」
　手を触れずして交わされる握手。
　愛香とトゥアール、二人の間には……何なん人ぴとにも侵しがたい、神聖な空気が支配していた。
　微笑ほほえみ合った二人が同時に振り向くと、部室のドアが少し空いており、くりっとした瞳ひとみと、眼め鏡がね越しの瞳がこちらを見つめていた。
「「わーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
　同時に叫び声を上げる二人。
　ほんのついさっき総そう二じであんなことがありながら、早くも同じ轍てつを踏んでしまっていた。
　観念してドアを開けて入ってきたのは、慧え理り那なとイースナだっ

た。
「……お前たち二人はラブラブすぎて、出るタイミングに困るわ……」
　校舎で見つからなかったのか不安なほど堂々とアイドル衣装を着こんだイースナ……闇あん子こ。
「うわああああああああよりによって一番見られたくない子に!!」
　頭を抱えるトゥアール。
「す、すみません……わたくしも、盗み聞きするつもりはなかったのですが……」
　闇子はにやりとしながら、久方ぶりにかけた眼め鏡がねのブリッジを指で持ち上げる。
「面白かったぞ、後ろからドＭを見守っていて。お前たちが総二のツインテール属性が無くなってほっとしたと言ったところで怒ってドアを開けかけ、仲直りし始めて安あん堵どし、百ゆ合り百合し始めてしゅんとしてな。まさに百面相じゃった」
「……二人が落ち込んだ時ぐらい、わたくしが励まして差し上げたかったのですが……やはり、わたくしなどが立ち入れる関係ではないのですわね……」
　どこか晴れがましく愛あい香かとトゥアールを見つめる慧理那。
　多分に誤解を感じ、愛香は抗弁する。
「何言ってんの会長!?　全然立ち入ってＯＫだから！　ただの世間話だから!!」
　闇子はジト目でにやけ、愛香とトゥアールを交互に見る。
「じゃがこれで、わらわは本当に未練一つなく過去の恋を……トゥアールへの思いを断ち切ることができた。これからはよい友達でいよう、遠慮なく貧乳とパコパコするがよい」
「あなた神様か何かにでもなったつもりですか!?　だいたい語源わかって言ってるんですか、女同士ではパコパコできな……慧理那さん、試し

てみましょうぼっ!!」
　左右のワンツーでトゥアールを強めにパコパコし、愛香は椅い子すにどっかと腰を下ろした。
「……トゥアール。あたしが過去からこの時間に戻って来てさ、『邪魔者が戻って来ない方がよかった？』って言った時、あんた真剣に怒ってくれたじゃない。二度と言うなって」
　照れくさそうに視線を逸そらしながら、愛香は素そっ気けなく言い放つ。
「あたしたちだって同じよ。あんたがこの世界に来ない方がよかったなんて思ってるヤツ、誰だれもいないわ。……多分、そーじが一番そう思ってて……だから頑張れてるんだろうし……」
　はいはい、と愛香の言葉を遮さえぎるように手を振るトゥアールは、耳まで赤くなっていた。
　慧理那は二人を見てくすりと微笑ほほえみ、
「わたくしも観み束つか君が大好きですわ。出会ってからの時間は津つ辺べさんには及びませんが……気持ちは負けないつもりです」
　彼女にしては珍しい大胆不敵さで、愛香たちに向かって宣言した。
「わらわも、総そう二じを愛しておるぞ」
　そして自分が正妻だと言わんばかりに胸を張り、情緒もなくしれっと言い放つ闇あん子こ。
「何であなたごときが愛まで言うんですか、身のほどを弁わきまえなさい!!」
「ドМが〝大〟をつけたのじゃから、もっとインフレしなければなかろう！　何じゃ、恋人の名前にある漢字だから〝愛〟は特別だと言いたいのか!?」
「だから違うと言っているでしょうがグラスギア遠隔で自爆させられたいんですか!!」

　羞しゆう恥ちのあまり、仕込んでもいない自爆装置まで持ち出して対抗するトゥアール。
　皆がすっかりと落ち着いたのを見計らい、慧え理り那なは切り出した。
「唯ゆ乃のさんは友達であっても仲間ではないと言っていましたが……わたくしたちは、友達であり……仲間。友達ではできないことでも、仲間ならばできますわ」
「会長……」
　いつも穏やかな慧理那が見える強い意志の光に、愛あい香かは息を呑のむ。
「……究極のツインテールがどうあれ……観み束つか君と属性力エレメーラとの繫つながりがどうあれ。わたくしは戦いから逃げるつもりはありませんわ。ティラノギルディと戦い、観束君のツインテール属性を取り戻します。その後は──」
　総二はかつて、自分の身を守るためにと慧理那にイエローのテイルブレスを渡した。
　それに対する慧理那の答えは……守られるだけではいや、だった。
「──観束君をもう、二度と戦わせはしません」
　多分に憧れが先行していた、初めて変身したあの時から……時は流れた。
　今の慧理那は、本物の英雄の貴き輝きを瞳ひとみに宿し、総二を守ると宣言したのだ。
「これからは、ツインテールを大好きな、普通の男の子として……過ごして欲しいですわ」
　誰だれも異論を挟まない。
　むしろそれは、各々が胸中に抱いていた思いだったからだ。
「ツインテール属性を取り戻して……それでも、観束君の愛が元に戻ら

なかったその時は……観束君の心が癒えるまで、わたくしが一生をかけて慰め続けます」
「な、何かエロいですね慧理那さん、わかってて仰おつしやってます!?」
「はい？」
　興奮気味に詰め寄るトゥアールに、慧理那は首を傾かしげる。
　天然の大胆発言に、愛香は対抗心を燃やすように名乗りを上げた。
「大変だと思うよ？　結局そーじ、ツインテール属性が無い状態でも全然女の子に興奮とかしなかったし……ま、あたしも一生つき合うつもりだけどね」
「ホンット愛香さんは、最後まで総二様に欲情してもらうことばっかり考えてましたね!!」
「うむ。ぶっちゃけわらわも、トゥアールより貧乳の方が普通にエロいと思うぞ」
　愛香を煽あおりつつ、トゥアールと闇子も同じように一生総二を支えると宣言した。
　笑い合う四人。
　この輪の中に、総そう二じが入れるように……また笑い合えるように。
　今、ツインテイルズは総二の分まで心を強固にし、決戦に立ち向かおうとしていた。

　　　◇

　アルティメギル基地の廊下を歩くティラノギルディの後ろを、死の二菱ダー・イノ・ランヴアスの戦士たちが勢揃いして行進する。
　首領直属軍の兵士だけあり、皆、面に漲みなぎる気迫が違う。

　その視線を一身に受けるティラノギルディが、目的地の大ホールを目前にして足を止めた。一糸乱れぬ統制のままに、兵士たちの行進も止まる。
「いかがなさいました、ティラノギルディ様」
　先頭のエレメリアンが声をかけると、ティラノギルディは不機嫌そうに振り返った。
「それはこちらの台詞せりふだ！　これまでは招集をかけてもサボる居留守する仮病を使うが当たり前だった貴様らが、今や俺の自室の前で出待ちをするほどになりおって!!」
　大仰な動作で振り返ったせいで、乱れてしまったツインテールに、すかさず兵士たちがティラノギルディを取り囲んだ。
「あっ、そのように興奮なされては、ツインテールに障さわりまする!!」
　両腕がハサミ状の武器になっているエレメリアンが、器用にブラシを持って乱れたティラノギルディのツインテールを梳すいていく。もちろん、直接触れはしない。それは勝者に許されし褒ほう美びだからだ。
「キューティクルが剥はがれてはいけませぬからな」
　続くエレメリアンがヘアミストでのケアも相乗させる。
　後ろの方には、ペンライトを持っている者までいる。姫を超えアイドル扱いだ。
　渋々大ホールに入室し、ティラノギルディは壇上へと歩を進め、死の二菱ダー・イノ・ランヴアスの兵たちが着席するのを待つ。
　程なく訪れた静寂を皮切りに、ティラノギルディは一世一代の大演説を始めた。
「時は来た……。これより死の二菱ダー・イノ・ランヴアスは全戦力を結集し、ツインテイルズとの決戦に臨む」
　レッド以外のツインテイルズの撃破。これをなくして世界の侵略は為

らない。
　ついに、死の二菱ダー・イノ・ランヴアスの残存全戦力を以てしての総出撃命令が下されたのだ。
　ツインテイルズが守るこの世界において、部隊長自らが自軍全兵を率いての総力戦を決断するのは、初めてのことだ。
「ティラノギルディ様、ぜひ、我われ々われにも出撃の許可を！」
　出撃を望んだ旧部隊のメンバーたちに、ティラノギルディは基地待機を命じた。
「元より我われら死の二菱ダー・イノ・ランヴアスは強力なツインテールの戦士の完全打倒が任務。貴様らが出張るはこの先の侵略へと移行した時だ。それまでは、我らとツインテイルズの最後の戦い、刮かつ目もくしておるがよい」
　雑兵が手柄を浅ましく求めおって、などと、いつものように罵ば倒とうされることも覚悟していた。だがティラノギルディのこの情深き言葉に、旧部隊の戦士たちは決死の覚悟をまざまざと感じていた。
　ティラノギルディが、部隊の部下たちに檄げきを飛ばす。
「雑ざ魚このテイルブルーはお前たちに任せる。イエローとブラック他はこの俺が一人で引き受けよう」
　死の二菱ダー・イノ・ランヴアスの戦士たちが、ティラノギルディの提案に異を唱える。
「お待ちくださいツインテール様。御身はレッドとの戦いで手傷を負われております。ここはゆっくり雑魚のテイルブルー狩りに専念し、残りは我らにお任せを」
「そしてツインテールをご自愛ください」
　目線はティラノギルディのツインテールに向いている。
「木こっ端ぱどもが、少しでも誉ほまれを分けてやろうという帝王の気遣いがわからぬとは！」

「この最終局面において、隊長の栄誉を掠かすめ奪うほど不出来な部下ではありませぬゆえ!!」
　喧けん々けん囂ごう々ごうの言い争いは数十分にも及んだ。
　埒らちが明かないため、先にブルーと遭遇した者が観念して戦う、という妥協案で落ち着く運びとなった。
　不安げに成り行きを見守っていた旧部隊の残存兵たちに向け、ティラノギルディは大仰に体裁を取り繕つくろう。
「と、とにかくこれからこの帝王が全人類へと向けて雄お々おしき生放送を行う。静粛にしておれい!!」

　　　◇

　愛あい香かたちの決意は、僅わずかの間も置かずに試される時を迎えた。
　ツインテール部部室のテレビに、ひとりでに電源が入る。
　窓から見上げる空に、個々の携帯電話に……あらゆる情報端末に。
　先日の全世界へ向けての宣戦布告以来で、ティラノギルディがその威容を再び晒さらしていた。「ティラノギルディ……!!」
　愛香が憎々しげにその名を呼ぶ。
　テレビに映るティラノギルディの頭部には、あの時から変わることなく、真紅のツインテールが搭載されていた。
「……津つ辺べさん」
　怒りに震ふるえる愛あい香かの拳こぶしに、慧え理り那ながその小さな手をそっと重ねる。
　愛香は頷うなずき、平静を取り戻す。今度は何を言い出すのかと、全員映像に集中する。
『ようく聞け人間ども！　テイルレッドはこの俺、ティラノギルディが

倒した！　この数日、全く姿を見せぬのがその証拠よ‼』
「⁉」
　耳を疑う愛香たち。今日はやけに口滑りもよく、ティラノギルディは続ける。
『貴様たちの希望は潰ついえた！　観念してその心の輝き、我われらアルティメギルへと渡してもらうぞ‼』
　こともあろうに、テイルレッドの敗北に言及した放送だった。
『――これより我わが部隊は、世界への総進撃を宣言する‼』
　高笑いをするティラノギルディ。ここまで一度もスピーチを噛かんでいない。勝利の自信が奴やつを変えたのは明らかだった。
「……レッド以外のツインテイルズは眼中にないってこと。あのテンパり恐竜、随分面白いアドリブ言えるようになったじゃない」
　手の平に拳を叩たたきつける愛香。怒りも通り越し、逆に正統な闘志が湧わいてきたと言わんばかりだ。
「レッドの敗北をあんなにも堂々と流る布ふするなんて……アルティメギルにとってもそれはタブーだったのではないのですか⁉　世界のツインテール属性が弱まってしまうからと……」
　慧理那の疑問に、トゥアールが胸を張って答えた。
「いーえ大丈夫です。訓練されたレッドたん大好き人類が、あんな奴の言葉をすぐに信じるはずがありませんから……ほら」
　トゥアールが愛香にノートＰＣの画面を見せる。コメント投稿のできる動画サイトまでジャックしたことで、ティラノギルディは罵ば詈り雑ぞう言ごんを浴びせかけられているらしい。
『誰だれだ、弱そうとコメントしているのは！　貴様の属性力エレメーラから奪ってやろうか‼』
　よせばいいのに、マイナスなコメントを全て拾っていちいち反論しているようだ。

　こんな時は人々の一途なレッド好きが、頼もしさすら感じる。
「あれだけぶち上げておいてティラノギルディ一体だけということはないでしょう。この戦いが、死の二菱ダー・イノ・ランヴアスとの最終決戦となるはずです」
　トゥアールの言葉で、その場の全員に緊張が走る。
「やっと来たわね」
「これが最初で最後のチャンスですわね……！」
「うむ、今度は絶対に逃がさぬ！」
　愛香と慧理那、闇あん子こが次々に戦意を鼓こ舞ぶし合う。
　ツインテールを失って心が壊れた総そう二じと、ツインテールを奪って自信をつけたティラノギルディ。ツインテールを隔へだてて、二人は対照となってしまった。

　転送ロッカーから地下基地へ移動。基地のコンソールルームで、最終確認をする愛香たち。
　三人は、並々ならぬ闘志の証に、あえて変身前に自分たちのツインテールを結び直す。
「……みんな、気合い入れていくわよ。そーじがいなくても、あたしたちだけでも大丈夫って見せてあげなきゃ……」
「観み束つか君が安心して、テイルレッドをやめられませんものね」
「総二はわらわの嫁として、寿退社してもらわねばならぬからのう」
　愛香と慧理那は右腕のブレスに、闇子は眼め鏡がねに揺るぎなき決意を湛たたえ、同時に叫んだ。
「テイルオン!!」
「テイルオン!!」
「グラスオン!!」
　淀よどみなく揃った三人の声が、勇ゆう壮そうに響き渡る。

　リーダーを欠いた総力戦。リーダーを取り戻すための決戦。

　そして、リーダーを不要にするための決戦──。

　テイルブルー、イエロー、ブラック、合流したメガ・ネは、基地に残るトゥアール、尊みこと、未み春はるに一いち瞥べつと頷うなずきだけで決意を共有し、コンソールルームを後にする。



　転送ゲートから出現ポイントに転送されると、間かん髪はつ容いれずに四人の戦士は空高く跳躍した。
　ブルーは髪紐属性リボンを発動し、イエローを牽けん引いん。ブラックは戦闘機形態メガネウインガーのメガ・ネに乗り、先行して天を貫き飛翔した。
「現在、国内外合わせ一二箇所からエレメリアンの反応があります。やはり分散して最終侵攻を開始するようです。愛あい香かさんたちも各ポイントに別れて、食い止めてください！　速やかに撃破後、最短距離にいるメンバーの加勢へ！　これを繰り返しましょう!!」
　それぞれが了解、と返し、戦力を分断して迎撃に入る。
　モニターに映るツインテイルズが背負う悲愴な気迫に、トゥアールが祈るように呟つぶやく。
「……頑張ってください、皆さん……」

◇

　どこへということもなく彷徨さまよい歩いた俺は、歩道のブロック塀べいに貼はってあったポスターを見て、すぐ近くのバス停に停とまったバスに吸い寄せられるようにして歩み寄った。
　到着したバスに乗り込もうとしてステップで蹴け躓つまずきながら、俺は愛香たちを思う。
　無気力に任せて倒れていた俺は、空に映るティラノギルディの宣戦布告を見た。
　死の二菱ダー・イノ・ランヴアスの全兵士──これまでにもかなりの数を倒してきたが、今回は一度に相当な数のエレメリアンが投入されるはずだ。戦いの激化は避けられないだろう。
　最後に見せた俺の醜態すがた……愛香たちが気にして、戦いに影響し

なければいいが……。
　諦てい観かんと失意に支配されたまま、目的地に到着した。ただの逃避だったのかもしれない。
　マクシーム宙そら果はて。
　この世界に初めてエレメリアンが現れた、俺たちにとって良くも悪くも思い出深い場所だ。
　そして俺が、初めてツインテールになった場所……。

　テイルレッド展。
　先週その存在を聞いてから、ずっと来たいと思っていた。
　本当なら、全てが解決してから来たかったが……。
　平日とはいえ、マクシーム宙果にはそれなりの数の人が訪れていた。
　先ほどティラノギルディがあれだけ派手に宣戦布告をぶち上げたというのに、人々は気にも留めていない。交通網も正常で、テレビの番組編成も変わりない。
　全てが、いつも通りの日常だ。
「……これが、俺が望んだ光景なんだよな……」
　常に何かを警戒し、恐怖を感じながら暮らすのはまっぴらだ。
　世界中の人たちに、侵略者の影などに怯おびえず普通に毎日を過ごして欲しい。
　その信念があったからこそ俺は、何があろうと欠かさずに戦闘には参加してきた。ソーラになってしまった時、愛あい香かと慧え理り那なに休めと言われても、心配でくっついて行ったほどだ。
　だから……半年以上戦ってきて、初めてのことなんだ。
　戦う俺たちを取り巻くギャラリーではなく。
　エレメリアンが出現した時、戦いとは離れ暮らす人々がどんな風に過ごしているのかを見るのは。

　メインホールに足を踏み入れる。
　大量に展示されているテイルレッドの写真。以前なら、ツインテールの写真を見ればそれがいつのものか、完璧に記憶を探れたのだが……今の俺には無理な話だ。
　テイルレッド展と銘打っているものの、ブルーやイエローの写真も申し訳程度にはある。
　愛香が怒っていたっけ。どうしてツインテイルズ展じゃないんだ、って……。
　結局、テイルレッドだけが突出した人気だったのも、究極のツインテールとしての特性だったのだろうか。
　俺は一体、どれほど大勢の人を、結果的に騙だましたことに……。
　いたたまれなくなり、俺はブルーたちの展示スペースへと足を運ぶ。
　当然、そこに足を止める人の姿は見えず──と思われたが、ひときわ大柄な男性が、食い入るようにテイルブルーの写真を見ていた。
　筋肉質な外見にそぐわず長く美しい髪の持ち主で、その流れる金髪が漆黒のライダーズジャケットとコントラストを生み出している。
　やけに大きなサングラスをしていたが、写真を肉眼でしっかりと確認するためだろうか、指でフレームをずらしてその端正なマスクを顕あらわにした。
「……!!」
　つい最近ニュースで見たばかりの人物を目まの当たりにし、俺は自分の目を疑った。
　目の前にいたのは、失踪報道が記憶に新しいハリウッド俳優、デック・ニールソンその人だったからだ。
「デック、さん……!?」
　うっかり声に出してしまい、俺は慌てて周りを確認する。幸いテイル

ブルー関連のスペースだけに人気は全くない。離れた場所でレッドの展示物を見ている人たちも、こちらに気付いた人はいないようだ。
　さすがに、一般人に見つかった時の立ち回りは心得たものだ。デックさんはすかさずサングラスを直し、足早にその場から離れようとする。
　しかし、俺を二度見すると、驚いたように立ち止まり、周囲を気にしつつ歩み寄ってきた。
「Ｏｈ、君は……！　すごい偶然だネ、また会えるなんて。この近くに住んでいたのカイ？」
　面食らったのは俺だ。既知のように話しかけられ、思わず認識攪乱装置イマジンチヤフが機能していないのではないかと疑った。
「覚えてない？　コミケで会った。僕は覚えてるヨ。君はすごく印象的だったかラ」
　デックさんはサングラスを指で上げ下げして強調する。
　その、変装じみた大きなサングラスをかけていても損なわれない、優しげな人柄。俺の記憶は、一気に真夏の同人誌イベントに引き戻された。
「――あの時、サークルスペースで会った人……‼」
　熱心なテイルブルーファンの、外国人サークル参加者。イベントで一番印象に残っていた人だ。この人、撮影の合間を縫ってちょくちょく来日しているのか……⁉
「でも、俺が印象に残ってたって、どうして……？」
　愛あい香かが印象に残っていたのならわかる。カタログでテイルブルー本を発見し、期待してスペースに行ったらお流れになっており、がっかりして手にした五〇〇円玉をサークル主の目の前で、指で曲げたりしたからな。俺が、その連れだったからだろうか。
「あの時もね、リフレッシュに来たんダ。何万人もいるイベントで、君が一番、ツインテールを好きみたいだったからネ。だからラ、すごくよく

覚えてタ」
「俺が……」
　すごい。この人、ツインテール好きを見分けられるぐらい〝本物〟だったんだ。
　しかも、常人よりも何倍も早い髪の伸びも健在で、今や肩下まで伸びている。これならいよいよ普通にツインテールに結んでも違和感がない。
　俺たちは展示ホールを出て廊下に移動し、レストエリアでソファに腰を下ろす。
　人目がないことを十二分に確認し、俺は触れづらい話題を思いきって切り出した。
「デックさん、今回はどうして日本に？　ニュース見ましたけど、何か、大変なことに……」
「あれは参ったネ。監督に伝えて数日休みをもらったのニ、連絡ミスみたいデ」
　クランクアップ直前で休みをもらったから、みんな怒ったのかも、とデックさんは言う。監督は気心の知れた人らしく、彼は了承しても、周りには快く思わない人がいたということなのだろう。
　色々あるんだな、華やかな世界でも……。
「よかった、ただの連絡ミスだったんですね」
「でも、失踪したって言われても仕方ないネ。僕、すっごいスランプだったかラ」
　スランプ。
　デックさんは、テイルブルーの役だった。思いきりイロモノのおふざけ枠なのだから、ふと我われに返る時もあるのだろう。
「やっぱり……男性がテイルブルーを演じるのは、つらいですか……」
　輝かしい経歴を誇る、今一番脂の乗った役者であるデックさんが、

（世間では）嫌われ者という認識のテイルブルーにキャスティングされる。その心中は、察するに余りある。
「まさか。僕、やりたいから引き受けたヨ、テイルブルー」
　誇らしげに答えるデックさん。製作発表会見で言っていた通りだ。
「でも……すいません、多分、デックさんのテイルブルーって、出落ち……あ、いや、笑いを取るための枠というか、もちろん本物のテイルブルーが強くてかっこいいのは、デックさんの言う通りなんですけど……」
　デリケートな話題だった。言い始めてから失敗したと、俺は言葉に詰まる。
「もちろん笑われるヨ。その方が嬉うれしいヨ」
「え……」
「この映画、アルティメギルが現れてから初めての映画。だから僕、決めてたヨ。みんなが思いきり笑ってくれる……笑顔になってくれるように頑張ろうっテ」
　――この人も。
　この人も、俺と同じことを……。
「テイルブルーは絶対かっこいいヨ。僕が映画ですごいアクションを見せれば、みんなきっと、かっこいいと思ってくれる。そしたら、本物のテイルブルーを見る目も変わると思ウ」
　原典オリジナルが人気者なら、この役は引き受けなかった。デックさんは、照れ交じりにそう語った。
　女ではない自分が、役者として知名度のある自分が、役に真剣に取り組むことで、人々がテイルブルーの凶暴性とは違う一面に気付いてくれることを願う、と。
「元々僕は、ヒーローに憧れて役者になったからネ。テイルブルーを見て、駆け出しだった頃の気持ちが蘇よみがえったんダ。だから僕、恩返

しがしたくテ」
「デックさん……」
　自分が失ってしまった直向ひたむきさを目まの当たりにし、俺は胸を締め付けられる思いだった。
　ツインテイルズの支援者は、俺の周りにいる人々だけではない。
　見知らぬ人。遠く離れた国にいる人たちも、それぞれ自分にできる戦いをしているんだ。
　人々が侵略の影に怯おびえず、笑顔で毎日を暮らしていくために。
「そんな夢を持って演やってたからかナ、最後の最後でスランプになっちゃッテ。自分で納得できないだけなんだ」
　妥協すればいいのにね、と自じ嘲ちようする。
「間近でテイルブルーの戦いを見たのに、何が違うかがわからナイ。何かがテイルブルーと違うんだ。性別じゃなくてネ」
　コミケの時か……。デックさんもスペースを離れて、俺たちの戦いを見ていたんだ。
「ゴメンネ、色々話しちゃって。君は──ウン、名前を聞いてもいいかナ」
「総そう二じ。観み束つか総二です」
「……ソウジ。僕からも一つ聞いてもいい？」
「はい」
「──ソウジはツインテールのこと、キライになっタ？　コミケで会った時と今のソウジ、何か違う気がするんだ。ツインテールへの情熱、とカ……」
　その質問で俺が殊更にショックを受けたのを見て取ったのだろう、デックさんは大袈裟に手を振って発言を撤回した。
「Ｎｏ、僕の勘違いだったネ。変なこと言ってゴメン」
「……いえ、その通りです。俺、ツインテールを愛することができなく

なったから……」
　デックさんの質問の答えにはなっていないが、こう言うしかない。
　一般人は、属性力エレメーラの存在について何も知らない。
　ツインテールを奪う、心の輝きを寄越せ──。そんなエレメリアンの発言を各国の識者が考察もしていたようだが、この世界の科学水準では、それが人間の心に秘められた莫大なエネルギーだという結論に辿たどり着くことは不可能だろう。
　ここでデックさんに説明しても、いたずらに不安を煽あおるだけだ。
「……俺がツインテールを好きでいると、たくさんの人に迷惑がかかるんです。だから俺……ツインテールを好きじゃない方がいいんです……けど……」
　そこから先を絞り出せない。
　俺の動揺を見て取ったのか、デックさんは努めて優しく問いかけてきた。サングラス越しの優しい目が、俺を見つめる。
「ソウジは、ツインテイルズになりたいって思ったことはナイ？」
　ポケットの中の簡易認識攪乱装置イマジンチヤフを、無意識のうちに握り締めてしまう。
「……なりたい、ですね……」
「じゃあ願わなきゃ。君が望めば、君だってきっとテイルレッドにナレル。悩みだっていつか消えるヨ。スランプの僕が言っても説得力ないケドネ」
　デックさんの励ましに、俺は膝ひざ上うえで拳こぶしを握り締めた。
　……なりたいよ……。
　テイルレッドになりたい。もう一度、ツインテールへの愛を輝かせたい……でも、俺はもう……!!

　その時、強烈な振動が建物内を襲った。

「Ｏｈ？」
「……何だ……⁉」
　何だ、って、このタイミングで考えられることなんて一つしかないか。
　程なく、壁のスピーカーからアナウンスが流れてきた。
『ご来場の皆様にご案内します。現在、当ホールの周辺でエレメリアンが暴れている模様です。念のため、落ち着いて避難をなさってください。繰り返します……』
　避難警報か……珍しいな。
「ワオ、じゃあまた近くでテイルブルーたちが戦ってるんだネ！　見たいなア」
　デックさんも、避難する人たちも、危機感はこれっぽっちも懐いだいていない。
　今回ばかりは、危機意識をもって行動してもらわないと危ないかもしれないな。
「ママー、ママー？」
　エントランスへと避難する人たちとは逆に、レストエリアへと向かってとぼとぼと歩いてくる幼い女の子がいた。
「あの子は……⁉」
　またしてもの不意の遭遇に、俺はギクリとする。
　最近よく通学途中で見かける……あーちゃんと呼ばれていた、ツインテールの女の子だ。
　あの子の話でこのイベントの開催を知ったのだから、ここへ来ていてもおかしくはない、けど……。
　偶然……なのか。矢継ぎ早に、二人も見知った人と出会うなんて。
　ツインテール属性を失った俺は、ツインテールを導き寄せることなんてできないはずなのに。

　どうして俺の周りに、ツインテールを愛する人たちが集まってしまう!?
「あのね、ママとはぐれちゃったの……」
「ソウジ、この子迷子みたい」
　女の子は、今にも泣き出してしまいそうだ。くだらない勘繰りをしている場合じゃない。
「わかった、お母さんを一緒に捜そう」
　女の子の頭を撫なでようとして──俺は、手を引っ込めた。俺にはもう、ツインテールに触れる資格なんてないんだ。
　とにかく、エレメリアンが近くにいるなら、ツインテールのこの子が一人なのは危険だ。
　早くお母さんの元まで連れて行ってあげないと……。
　女の子の不安を和やわらげようとしてか、デックさんがサングラスをずらして笑いかけた。
「可愛かわいいツインテールだネ！」
　彼が言うと、すごく爽やかに聞こえる。俺が言ってもこうはならないんだろうな……。
「ほんとう？　あのね、テイルレッドみたいになりたくて、いつもれんしゅうしてるの!!」
　あーちゃんは、今度は俺にも視線を向けてきた。子供特有の、褒ほめて欲しいという可愛らしい願望。
　そんなの、俺の答えは決まって──
「……ごめん……わからないんだ……君のツインテールが可愛いのか……」
　意志とは反して、情けない苦笑を返してしまった。
　自分を繕つくろうことさえできない。自分で自分の顔を殴りつけてやりたかった。

三人で建物の外に出て、あーちゃんのお母さんを捜そうとあたりを一望した瞬間──壁が目の前に出現した。
「な‼」
「ゆけ、戦闘員アルテイロイド！　とにかく片かたっ端ぱしからツインテール属性を奪え‼」
　近くにいる、どころじゃない。エレメリアンはほんの数メートル先で戦闘員アルテイロイドに指示を飛ばし、それを見て、避難した人たちは散り散りになって逃げていた。ツインテイルズがいないのだ、さすがに当然だろう。
　いくら何でも、ブルーたちが到着するのが遅い。今回は、複数箇所にエレメリアンが同時出現している可能性がある。
　これが死の二菱ダー・イノ・ランヴアスにとっての最後の戦いなんだ……まして、ティラノギルディには今までのエレメリアンの常識なんか通用しない。不意打ち上等の奴やつだ、陽動や分断作戦なんか平気でやるだろう。
「我わが名は死の二菱ダー・イノ・ランヴアスの戦士、お転婆属性トムボーイのロンギスギルディ！」
　慧え理り那なが前に調べていた、古代の生物の中にあんなのがいたぞ。
「この世界で最もお転てん婆ばな幼子と戦えぬのはいささか残念だが……我われらが奉ずるツインテールのためにこの最後の決戦、必ずや勝利する‼」
　二足陸上恐竜のような見た目に、背中から身体からだ以上の巨大さを誇る鳥の羽の骨のような鋭いヒレが突出した三畳紀の生物、ロンギスクアマって奴だ。
　上背はエレメリアンにしてはそこそこだが……均整が取れながらも、

膂りよ力りよくに必要な部位が特に発達した五体。背の骨は、鋼鉄でもゆうに貫きそうなほど鋭利に屹きつ立りつしている。
　よりにもよって、ストレートに戦闘力が高そうなタイプじゃないか……！
　避難した人々を戦闘員アルテイロイドに追わせながら、自身は悠ゆう然ぜんと周囲を見渡している。
　咄とつ嗟さに俺があーちゃんを背中に庇かばうも間に合わず、ロンギスギルディは視線をこちらに向けた。こいつらに視覚的隠いん蔽ぺいなんて無意味だったが……。
「ふむ、小さいながらも愛溢あふれるツインテール。手始めにその幼子の属性力エレメーラをいただくとしようか」
「手始めだと、あの野郎……！」
「ソウジ、早く逃げヨウ」
　さすがにデックさんも深刻さを理解し、あーちゃんを抱き上げようとする。
　しかし振り返った先には、数体の戦闘員アルテイロイドが壁のように立ちはだかっていた。
　ここはマクシーム宙そら果はての駐車場……一番最初に現れたエレメリアン……リザドギルディが暴れていた場所だ。
　人々が逃げ惑い、悲鳴が聞こえ、怪人がツインテールを狙い闊かつ歩ぽする。
　鮮烈にフラッシュバックする、テイルレッド始まりの日。
　こんなのないだろ……何もかも、俺がテイルレッドになったあの日の再現じゃないか！
　何なんだ、これは……俺があまりにもツインテール馬ば鹿かだったから、罰ばちが当たったのか!?

ただ一つ、あの時と違うのは——俺には、戦う力が無い。

◇

死の二菱ダー・イノ・ランヴアス。
絶滅生物をモチーフ—活性体シルエットとして生まれた戦士たちは、まさに現生命に終しゆう焉えんをもたらすべく降臨した、生まれながらの闘争者だった。
三手に別れたツインテイルズが、早くも当初の予定を狂わされていた。
自身の戦闘を終わらせ、別のメンバーの元へと駆けつけられた者は皆無。
ブラックが最初に到着したのは、とあるゲームソフト会社のビルの敷地内。
そこでは全身棘とげだらけの奇妙な見た目のエレメリアンが戦闘員アルテイロイドを従え佇たたずみ、人々に気味悪がられていた。
ギャラリーが離れているなら、会話を聞かれる心配もない。インパクトのある見た目に覚えがあったのか、ブラックが不敵な笑いと共に語りかける。
「虚ろ目属性ホロウアイのハルキゲギルディ。死の二菱ダー・イノ・ランヴアスーの出で不ぶ精しようの貴様も、いよいよ駆り出されたか」
ハルキゲニア。背から棘状の突起が屹きつ立りつしているばかりではなく、胴体から伸びる足も、棘に似た鋭さ。顔と尻尾以外はほぼ棘という見た目で、磁性流体をそのまま生き物にしたような絶滅生物だ。
全身棘の生物が二足歩行する様は、エレメリアンの中でも極めて異質な容よう貌ぼうだった。
ハルキゲギルディはブラックの顔を執拗に観察すると、落胆の溜ため

息いきをこぼした。
「気に入りませんね……。まだ貴女あなたが組織に在籍していた時、その目は薄暗く濁っていた……。すれ違いざまに何度ときめいたことか。ですが今の貴女の瞳ひとみには、何の魅力もなくなってしまった」
　侮ぶ蔑べつの言葉を、何よりの賞賛だとばかりに堂々と切って捨てるブラック。
「たわけ、恒常的な虚うつろ目にいかほどのときめきがあるか！　思いがけず見せる心の闇やみ、哀かなしみ、それらがもたらす不意の虚ろ目こそが至高であろう!!」
「むむっ……!!」
「その程度の浅い愛でわらわの前に立ちはだかるとは、笑しよう止し千せん万ばん！　せめて最期は、己おのが目を虚ろにして散ってゆけ!!」
　ブラックは神ゴツド眼め鏡がねのアンダーリムに触れ、∞型の光輪を放つ。
「セラフィックインフィニット!!」
　光輪がハルキゲギルディを包み込んだ直後、幻覚は恐るべき姿で実体化した。
　タケノコのように地面から生えてきたのは、てっかてかしたマッスルジェントルメンたち。
　しかも、その目がやたらとしょんぼりしている。
「ひいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいいい哀かなしげな目のマッチョたち!!」
　悪夢を具現化する精神攻撃技を繰り出され、絶叫するハルキゲギルディ。
　しょんぼりしながら無言で取り囲んでじっと見てくるマッチョという恐怖に、さしもの虚うつろ目好きも己おのが瞳ひとみから光を失わずにはいられなかった。

「私の……目の……ハイライトが……消えたあああああああああああああああ!!」
　精神的ダメージが極点に達し、爆発するハルキゲギルディ。
「うわあああマッチョ使いだ逃げろおおおおおおおおおおお!!」
　ニュースで散々報道されたマッチョ使いを目まの当たりにし、ギャラリーたちも我われ先さきにと逃げ出した。
「フッ……孤独なものじゃ……。だが、愛する総そう二じのため、わらわはあえてマッチョ使いの汚名を着ようぞ──!!」
　着なくてもいい汚名を進んでまとうブラック。
　その場を離れようとした瞬間、死の二菱ダー・イノ・ランヴアスのエレメリアンが追加投入されてきた。
「これ、侵攻ちゃうで……ウチらが連係できないよう分断して、各個撃破するつもりや!!」
　マッチョ攻撃を見守っていたメガ・ネにそう危き惧ぐされ、ブラックも焦りを募らせる。
　戦力の三極集中を見れば明らかだ。他にも数体のエレメリアンを別行動させているのをトゥアールが確認しているが、明らかにまず先にツインテイルズの撃破を主目的としている。
　でありながらティラノギルディは、三対多の正面激突ではなく、一対多の三分散を選択したのだ。
「おんのれティラノギルディ、いくら空気が読めぬからといって、最終侵攻と宣言したのを違えるか、あの大馬ば鹿か者が!!」
　追加投入されるエレメリアンは、手にしたダークネスグレイブにて次々と撃破していく。だが、苦戦の要因は、死の二菱ダー・イノ・ランヴアスの戦士とは別の戦力にあった。
「モケケケケケケーーーーーーーーーーーーーーーーーッ!!」
　いつもよりも甲かん高だかい声を上げ、黒ずくめのひょろい体たい躯

くが徒党をなして雪な崩だれ込んでくる。
「ええい邪魔じゃ雑ざ魚こども――――――――――――――――――――――――――ッ!!」
　この戦闘員アルテイロイドが──奇妙なほどに強い。
「……イースナちゃん。あの胸の宝石、見てみぃ……」
　穏やかな戦士を強化させたその忌まわしい記憶に、自身も戦闘員アルテイロイド目掛けて腕のバルカン砲を斉せい射しやし続けながら、メガ・ネが憎々しげに呟つぶやく。
「うむ。あれはいわば強戦闘員メガアルテイロイド……ブラキオギルディが正気を失ったドーピングアイテムと同じ物を投与されているようじゃ。……四し頂ちよう軍め、戦闘員アルテイロイドを数の恃たのみにするほど落ちぶれたようじゃな……!!」
　何度倒しても復活してくるフェニックスギルディも凄すさまじい長期戦となったが……その時のように撃破から復活の合間に休憩を取ることさえできない、今回のように物量にものを言わせた相手との戦闘は、虚弱体質のブラックにとって最も忌き避ひすべき局面だった。

　一方、最も強く決意を湛たたえ出撃したイエローは、その心意気に恥じぬ奮戦を見せている。
　イエローが転送したのは、日本でも最も巨大とされる砂丘の入り口だった。
　拠点にする場所としても不適切なことを考えれば、やはり、イエローも仕組まれた三極分断を疑うに至った。
「全く、いくら侵攻戦とはいえ、人ひと気けのない場所に割り当てられるとは運がない……テイルイエロー！　せめて貴様に、心ゆくまで小粋なトークに付き合ってもらうぞ！　この、多弁属性メニイトークのケントロギルディとな!!」

「ごめんなさい！　急いでいますの!!」
　トークは無情にも打ち切られ、ケントロギルディとその周囲を闊かつ歩ぽする戦闘員アルテイロイド目掛け、イエローは完全脱衣形態フルブラストモードで全力発射した。
　イエローが加減せず戦える場所として、最も人里離れたポイントをトゥアールに割り振られていたため、思う存分武装を解放できる。
「あうっ……!!」
　だが砂地では全力発射を支えるアンカーが意味をなさない。
　足を砂に取られ、よろけながらも強戦闘員メガアルテイロイドを吹き飛ばし、イエローは次々と武装を脱衣パージしていく。
　だが、イエローの豊満な胸には虚むなしさが去来していた。
　レッドが戦線になき今、自分は何な故ぜ脱いでいるのか。主人の目が無いなか行う脱衣に、意味はあるのか。生命無き砂丘に痕あとを残す空虚な脱衣は、しかし、すぐにも凛りんとした結論を得た。
「──守るために脱ぐ！　戦えないレッドの分の正義も、わたくしが完かん遂すいするのですわ!!」
「ぬぐぐ、き、貴様！　爆発音ではなくトークを紡つむがぬか！　そのお口は何のためにある!!」
　土煙を吹き飛ばし軽快に抗議するケントロギルディに、イエローは荘重に返答した。
「……あなたたちにこう叫ぶためですわ……!!」
　脱衣パージした武装を頭上で合体させ、イエローは飛翔する。
「ヴォルティックジャッジメントオオ
オーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーッ!!」
　渾こん身しんの蹴しゆう撃げきが天から降り注ぎ、ケントロギルディと強戦闘員メガアルテイロイドを薙なぎ倒していった──。
　最短決着をモットーとするブルーでさえ、予期せぬ苦戦に歯は噛がみ

していた。
　ブルーが出撃したのは海外のあるカジノ街。スロットの受け口から溢あふれるコインのように、戦闘員アルテイロイドが次々と雪な崩だれ出る。
　しかもその戦闘力は、ブルーをして戦せん慄りつさせるに足る物だった。
「何よこいつら……モケーのくせに強い⁉」
　本来、アルティメギルの戦闘員アルテイロイドは、弱い。ひたすら弱い。
　過去に脅威となったのは数百体同時に現れ、ブルーが一人で相手にした時ぐらいのものだ。
　数を武器にしなければ、賑やかしか使い走りがせいぜいという認識だった。
　そんな戦闘員アルテイロイドが、一端の戦力として機能している。
　死の二菱ダー・イノ・ランヴアスの精鋭の変態戦士たちが人々に近寄るのを防ぎながら、強化された戦闘員アルテイロイド──強メガ戦闘員アルテイロイドをも相手にする。
　人の密集地での戦いを引き受けたブルーにとって、神経を磨すり減らす戦いだった。
　だが幸いなことに、陽気な外国人でさえ、レッドがおらず単独で戦うブルーを見ては、たまらず逃げ出していく。何とか被害は出さずに済みそうだ。
「よし、全部倒した……トゥアール、次！」
『！　ブルー……現れました！　ティラノギルディの反応です‼」
　ブルーはトゥアールからの通信を受け……目を血走らせた。
『どうしますか、近いポイントは他にありますが……』
「……悪いけど、そーじ最優先よ。場所を教えてトゥアール。先にそっ

ちに向かうわ!!」
　聞きはしたものの、トゥアールもブルーがそう答えるとわかっている風だった。
『普段エレメリアンは属性力エレメーラを活性化させない限り探知できません……今のティラノギルディもそうですが、今探知しているのは総そう二じ様のツインテール属性！　つまりティラノギルディは、まだ愛あい香かさんたちが向かってくると気付いていないかもしれません！』
「奇襲のチャンスってわけ……あの時あいつがそーじにしたみたいにね!!」
　喜んで意趣返ししてやろうではないか。
　残りの一般戦士の制圧をイエローとブラックに託し、ブルーは新たに出現したポイント、ティラノギルディがふんぞり返っているであろう場所を目指し転送ポイントへ飛んだ。
　待ち望んだ怨おん敵てきの元へ、眼前のビルを破壊せんばかりの勢いで急行する。
　目撃者が次代に未確認生物として語り継ぎそうな形相で、ブルーは次の戦闘地点……日本最大の古城を背に望む平野へと向かった。
「フ……」
　自慢の玉座が持ち込まれている。肘ひじ掛けに肘をつき、小首を傾かしげながら、ティラノギルディは戦闘員アルテイロイドはの用意した巨大モニターで優雅に戦局を見守っていた。
　背後に城を背負うその姿は、彼が望んだ覇は王おうの風格を十二分に演出している。
「なかなかやりおるな、ツインテイルズ……だが、時間の問題だ」
　最も遠くで戦うブルーの到着はまだ先だろうと、ブラックとイエローの戦闘を見て戦闘データを収拾していたティラノギルディ。
　突如、視線の先のモニターが、ガタガタと揺れ━木こっ端ぱ微み塵じ

んに砕け散った。
「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお⁉」
　モニターを拳こぶしで破壊し、ブルーはティラノギルディの眼前に立ちはだかった。執念か、想像を絶する速度での到着だった。
「ティラノギルディ……‼」
　ホラー映画を見ていたら、幽霊がスクリーンから這はい出てきたようなものだ。
　嫌すぎる体感型映画上映システム。臨リ場ア感ルを超えた殺気が、死のアトラクションとしてティラノギルディを襲う。
「あ、が、あが、ふ、ふはははははは、よくここまで辿たどり着いた！　だがここが、貴様のツインテールの墓場だ‼」
「あんたの墓場の間違いでしょ？　そのツインテール……頭ごとむしり取ってやるわ」
　仮にもツインテールを愛する者とは思えない、およそ考えつく限り最恐の脅迫を口走りながら、ブルーは間かん髪はつ容いれずにティラノギルディに襲いかかった。もう逃がしはしない。
「あんたの身体からだをバラバラに引き裂いて、レッドのツインテール属性を抉えぐり出す……‼」
「貴様は自分の言動に疑問を抱いたことはないのか⁉　何か言いすぎかな、とか、女の子なのに、とか……のぉうわぁ‼」
　獣じみた眼光を漲みなぎらせ、ブルーが掴つかみかかってくる。
「い……嫌だ！　絶対に返さんぞ！　このツインテールを失ったら……また部下から見向きもされなくなってしまう……‼」
「その部下はあたしたちが全部倒すわ……あんたにもうツインテールは必要ないのよ」
　恐怖に怯おびえていたティラノギルディの顔に、僅わずかに怒色が浮かんだ。

「槍やりを抜けい、テイルブルー！　帝王に野蛮な戦いは似合わぬ！　ここは剣と槍で勝負を……ほおおん⁉」

　が、それも一瞬。猛もう禽きん類の爪つめのようなブルーの掌てのひらが、ティラノギルディの身体を掠かすめる。

　提案など聞いていなかった。

　帝王とは違い、蛮族には野蛮な戦いがとてもよく似合う。

　しかし、一度目の対戦で暴走のままに取り逃がした苦い経験が、ブルーに冷静さをもたらしていた。

　一分一秒でも早くティラノギルディを倒し、総そう二じのツインテール属性を取り戻す。

　最終目標が相手なのだ、力を温存する必要も無い。

　ブルーはエターナルパッドを出現させ、素早くアンダースーツの胸の隙すき間まからスロットインする。だが……これまでのように、全身に更なる力が漲みなぎるあの感覚が発現しなかった。

「……エターナルパッドが……作動しない⁉」

　和わ太だい鼓この革じみた自分の胸を何度スパンスパン叩たたいても、エターナルパッドが作動することはなかった。

「そ、そうか……貴様、それを十全に扱えぬようだな……⁉」

　自慢の聖剣を抜き放ち、切っ先をテイルブルーへと突きつけるティラノギルディ。

「テイルブルー、そしてその胸、恐るるに足らず‼」

　歯は噛がみしながらフォースリヴォンに触れ、ウェイブランスを出現させる。

　切り札が使えない窮地にあっても、ブルーは瞬時に思考を切り替えた。

「だったら、このままやってやるわよ‼」

　しかし、その気丈さが報われることはなかった。

流れるような槍やりの刺し突とつが次々と大剣で受け止められ、むしろどんどんと後退させられていくブルー。
確かにティラノギルディは強い。
だがそれを差し引いても、ブルーは自分の身体からだにまとう力が弱まっているのを感じていた。
「……どうして……力が出ない……あぐっ！」
ランスを弾き飛ばされ、手の痺しびれに喘あえぐ。
ティラノギルディが聖剣を振り抜くと、剣圧が唸うなりを上げてブルーに肉薄した。
「ッ……属性玉変換機構エレメリーションー貧乳属性スモールバスト!!」
咄とつ嗟さに貧乳属性スモールバストを発動し、硬質の盾たてを眼前に出現させるが……あっさりと砕かれ、衝撃でブルーは地面を転がった。
「……こいつ、前より強い……!?」
自身の身体に起きている異変を受け容いれるより先に、トゥアールが分析を終えてブルーの状態を通信してきた。
『愛あい香かさん……テイルブルーのギアの、全ての出力が大幅に低下しています……！』
「あいつ、あたしに何か能力を使っているの!?」
奪った属性力エレメーラを持って逃げる際、ティラノギルディに全く攻撃が通用しなかったことを思い出すブルー。
「それとも……エターナルチェインの反動なの……!?」
一般兵では、何体送り込んでも絶対に勝てない。大将であるティラノギルディ自身が行かなければ、ツインテイルズは打倒できない。
そう焦りを促し、総そう二じのツインテール属性を奪ったティラノギルディを引きずり出すために、ブルーはこの数日、最強形態エターナル

チエインを不必要なほどに使い続けた。
　この不調は、乱用がもたらした反動だと考えるのが自然だった。
『……どちらも違います……原因は──愛あい香かさんのツインテール属性です』
　トゥアールの確信めいた報告に、ブルーは戦せん慄りつした。
「な、何ですって……⁉」
『総そう二じ様がツインテール属性を失ったことで、無意識のうちに、愛香さんもまたツインテール属性への信頼を失い始めていた……イエローが初めて変身した時と同じように、属性力エレメーラを使いこなせず、それがテイルギアの出力に影響しているんです……‼』
　先ほどティラノギルディが『十全に扱えていない』と言ったのは、強化装備エターナルパッドではない。この身にまとう、テイルギアそのものだったのだ。
　時を同じくして、同様の異変がイエローとブラックにも起こり始めていた。
　テイルギアもグラスギアも、心で制御する装甲。
　総二がいつも心を熱く燃やし、限界を超えてきたように。
　心が強くなることでテイルギアは強さを増すが……その逆も起こりうる。
　総二を救いたいという想いは本物だろう。それは何物にも勝るほど強いだろう。
　……だが……それと、自分自身の属性力エレメーラへの信頼は別物。
　イエローが初めて変身した時、気迫と裏腹、心の弱さゆえ全く力を出せなかったように。
　レッドという心の支えを失ったツインテイルズは、総二を救おうと奮起するどころか、弱くなり始めていたのだ──。

◇

　前にはロンギスギルディ、後ろには無数の戦闘員アルテイロイドたち。
　完全に逃げ道を塞ふさがれた。
「く……」
　まずい……。トゥアルフォンは、部室棟の廊下に鞄かばんと一緒に置いてきてしまった。この危機をトゥアールたちに知らせることもできない。
　か細い力を感じ、俺は腰元から見上げてくる視線に応える。
　あーちゃんが、心細そうに俺のシャツの裾すそを握り締めていた。
「テイルレッド、きてくれないの……？」
「□□□□!!」
　俺は息を詰まらせた。
　アイドルや、小動物のような扱いだけが先行していた。
　だけどやっぱり……テイルレッドは、こと子供たちにとっては、絶対のヒーローなんだ。待ち望む希望なんだ。
　でも──
「……うん。テイルレッドはね、もう来ないんだ……」
　無念だ。
　将来テイルレッドになりたいと笑顔で夢を語っていたこの子に……俺が、テイルレッド自身が現実を諭さとさなければならないなんて。
「だから、観束総二おれが君を守る」
　変身できなくても……せめて、この娘のツインテールだけは守ってみせる!!
　俺はデックさんにあーちゃんを託し、ロンギスギルディの前へと踏み出した。

「デックさん、その子を連れて逃げてください！　後ろの黒ずくめは強引に突破すれば何とかなるはずです」
「何言ってるノ、役割が逆でしょ!?」
「あなたはまだ撮影が残ってるでしょう、大怪け我がしたらどうするんですか！　俺、武術を習ってましたから、何とかなります!!」
　デックさんと比べて筋量や腕力は劣るかもしれないが……対人格闘なら実践的な武術を学んだ俺の方が、まだ何とかなるはずだ。
　──対人なら、だけどな……。
「早く！　行ってくれ、デックさん!!」
　問答している時間はない。
　デックさんに踏ん切りをつけさせるためにも、俺は自らロンギスギルディへと目掛けて駆け出した。
「む、何だ、向かってくるか……すまぬ、少年!!」
「っぐあ……！」
　ロンギスギルディが掌てのひらを突き出した風圧だけで、俺は胸を痛打されてもんどり打った。
　そりゃ、こうなるよな。人間がエレメリアンと戦おうなんて……。
「やんちゃな少年もお転てん婆ばに通じて趣おもむき深い……が、おとなしくしておるがよい」
「やかましいのが好きなのか嫌いなのかどっちなんだよ!!」
　何かに気付いたように、ロンギスギルディは俺をしげしげと観察してきた。
「この打てば響くような心地よきツッコミ……。いつも戦闘映像を見て羨うらやましく思っていた彼女の言動に重なる──」
　つい言い返した言葉尻を取られて背景を垣かい間ま見られ、俺は思わずギクリとする。
「フ、気のせいか……。どうやら俺も、彼女と戦ってみたかったという

未練があるらしい」
　こうやって時間を稼げれば、もしかしたら……！
　一いち縷るの望みを込めて背後を見ると、デックさんが戦闘員アルテイロイドに苦戦していた。見栄えを気にしたハッタリの体術ではない、しっかりと重さの乗ったキックを放っているが……戦闘員アルテイロイドはビクともしない。
　あいつらだって人外の存在なんだ。正面から戦ったら駄目だ……!!
　ロンギスギルディが尻しり餅もちをついた俺を無視して、デックさんとあーちゃんの元へと向かう。
　俺は咄とつ嗟さにロンギスギルディの節くれ立った足首を掴つかんだ。
「何っ？」
　心底不思議そうに見つめてくるロンギスギルディ。きっとこいつらエレメリアンは、人間に満足に抵抗されたことすらないんだろう。
「その娘このツインテールは奪わせない……。遠慮しないで、もっと俺のやんちゃを見てけよ」
　そのまま起たち上がると、俺は大の字に腕を広げて立ちはだかる。
「……驚いた。そんな蛮勇を口にする少年がいるとは」
　考えろ。今まで何十体何百体のエレメリアンと戦ってきた⁉　こいつらの行動、思考、弱点……あらゆる戦いの記憶を総動員して、最善策を見つけ出せ。
「くっ……！」
　くそ、頭が割れそうだ……！
　何な故ぜツインテールを守るのかと。何故ツインテールを考えるのかと。
　俺の思いを踏みにじるかのように、心の空白が勝手に自問自答をぶつけてくる。

もう戦えない俺が……せめて、目の前のツインテールだけでも守れなくてどうする!!
こいつらが携行している属性力エレメーラを奪うリングに、追尾機能が無いのはわかっている。射程から離れれば、子供の足でも逃げ切ることはできる。
──目の前のこいつを、俺が引き付けさえすれば、活路は拓ひらける……！
俺はロンギスギルディの脇わき腹ばらに正せい拳けんを見舞った。
「いっ……」
硬かてぇ……！　桜さくら川がわ先生もエレメリアンを蹴けったら相当痛かったって言ってたけど、生身で殴ったらとんでもない硬度だ。喩たとえるなら、弾性を持ったダイヤモンド……!!
「何故そうまでしてその少女を守る！　まさか、その子は……貴様のこ、こ、恋人か!!」
拳こぶしを擦さすりながら、俺はロンギスギルディを睥へい睨げいする。何でそんな異次元の飛躍をするんだ！
「お転てん婆ば好きすぎて、お前の思考回路も随分騒がしいじゃねえかっ!!」
そして、間を置かずにロンギスギルディの足を蹴りつけた。やはりビクともしない。
「……なるほど、では正義感ゆえか。ただの少年よ」
ロンギスギルディが緩やかに腕を一払いすると、また激しい衝撃が身体からだを襲った。
受け身も取れずに俺は地面を転がった。
転がりざまに後ろを確認する。デックさんは……駄目だ、全然離れられていない！
戦闘員アルテイロイドまでもがあの奪取用リングを持ち出したらおし

まいだ……！
　ロンギスギルディが、刃向かう人お間れに諭さとすように語りかける。
「警察は市民を守るために戦う。軍隊は国家を守るために戦う。それはいかなる異世界であっても代わらぬ摂理。君は、守られるべき側の人間。戦う理由が無い」
「くっ……」
「例外があるとすれば、愛する者を守るためだろうが……それも違うようだしな」
　上から目線ではない。こいつらにとっては、それが真理なんだろう。
　精神生命体であるこいつらにとって、〝敵〟は同じ心の力で戦うツインテールの戦士だけ。
　土着の番人……警察や軍隊は、どれだけ強力に武装していようと、こいつらの敵ではないんだ。
「戦う理由なら……愛するものならあるさ……‼」
　……俺は今、何と……？
　自分に生まれた矛む盾じゅん。
　思考に違和感を感じる暇いとまさえ、今は惜しい。一センチでも、一ミリでもいい、こいつを後退させてやる。
　俺はただ我が武む者しや羅らにロンギスギルディを殴りつけた。
「それほどまでにあの幼子のツインテールを守りたいか。惜しいな……それだけの烈はげしき魂こん魄ぱくを備えながら、何な故ぜにお主にはツインテール属性が無いのか」
　こいつらにとってはステータスの解析にしかすぎないその言葉が、深く胸に刺さった。
　ロンギスギルディは観念したように拳こぶしを握る。
「我われ々われはただの人間に危害を加えない。だが勇者は別だ」

「勇者!?」
「力もなく、武器も持たず、それでも信念を懸けて挑んでくる相手ならば、勇者として遇するが我らの矜きよう持じ!!」
　こいつらが人間に危害を加えないのは、敬意と、何より属性力エレメーラを奪うという利害のためだ。
　別に人間に手を上げたら自身が死ぬわけでもない。いよいよとなれば、当然力尽くで障害を排除するだろう。
　直接拳を当てないとはいえ、振るわれた拳は激しい衝撃波を生み出し、俺の全身を強したたかに打ちつけた。
　先ほどまでの、虫を払うかのような緩慢な動作とは桁けたが違う。
「がっ……!!」
　紙かみ屑くずのように空を舞った俺は、デックさんとあーちゃんの元まで転げていった。
「ソウジ！」
「お兄ちゃん！」
　戦闘員アルテイロイドから守るためにあーちゃんを抱きかかえ、デックさんは懸命に距離を取っている。それだけで手一杯で、とても包囲網を突破できそうにない。
　ロンギスギルディが悠ゆう然ぜんと俺に歩み寄ってくる。勇者と認めたという言葉の通り、俺に構わずあーちゃんを襲うような真ま似ねはしない。
「……はあ、はあ……！」
「何、まだ意識が……!?」
　間違いなく気を失ったのを確信し、確かめようと歩み寄ってきたのだろう。よろよろと上体を起こす俺を見て、ロンギスギルディは初めて後退した。
「普通の人間が気を失わずにいられるはずがない。お主、体に何か手を

加えているのか!?」
「……馬ば鹿か言え、目ェ瞑つぶったら明後日あさつてまで寝ちまいそうだよ……。でも、友達にもっとタフな女の子がいるからな……俺ももう少しは頑張らねえと……!!」
　この程度でへこたれてたら、毎日愛あい香かとじゃれ合ってるトゥアールに笑われるぜ……！
　遠くに感じる日常の記憶が、俺を起たち上がらせる。
「さあ、まだこれからだっ!!」
　皮が裂け、血が噴き出し、骨が軋きしんでも、俺は殴ることをやめない。
「やめるのだ！　そんな拳けん打だを何度重ねたとて、俺は身み動じろぎすらせぬ！　むしろ、貴様の拳こぶしの骨が砕けてしまうぞ!!」
「一番大切な生も命のを奪われたんだ……！　砕けて痛いとこなんて、もうどこにもねえ!!」
「ぬう、少年……貴様はいったい……!!」
　厄災になりそうなほどツインテールを好きな俺に、罰ばちを当てたんじゃない。
　神様は……むしろ思い出せって言ってるんだろう。だから俺をこの場所に、始まりの場所に誘いざなったんだ。
「ぬうう！　これでもか！　これでも諦あきらめぬか!!」
　何度目の攻撃、何度目の転倒だろうか。
　俯うつぶせに倒れた俺の視界に、制服の袖そでから覗のぞく赤いテイルブレスが飛び込んできた。

『何も言わずにこの腕輪をつけていただけませんか？』
　高校生になった日の放課後、そう言ってこれを差し出してきた少女がいた。

『ツインテールがお好きなんですね』
　戦う覚悟を問う代わりに、頼もしげにそう言ってくれた。

　ツインテールが──
「───ああ、大好きだ……」

　何だよ。今でも即答できるじゃないか。
　属性力エレメーラのことを知らなかったあの頃も。
　属性力エレメーラを失った今も。
　俺は、何も変わらない。ただの、ツインテール馬ば鹿かだ……。
　あの時、俺はどんな気持ちでこいつらに挑んでいった？
　世界を守りたいわけじゃなかった。
　世界のツインテールを守りたいわけですらなかった。
　あの時俺はただ、目の前のツインテールを……慧え理り那なのツインテールを守りたくて変身した！　エレメリアンと戦った‼
　今、この娘このツインテールを守りたいという気持ち……何も変わっていない‼
　何も失ってなんかいない‼
「奪われたかもしれない……けど、無くしてはいないんだ‼」
　ツインテールを愛することができなくなっただと⁉
　じゃあ俺は何で、今もまだ悲しいんだ⁉　何な故ぜ、〝守りたい〟んだ⁉
　ツインテールが好きだからだろう！　愛を失ったはずなのに……好きじゃないか‼
　ツインテール属性が奪われたぐらい何だ……！　世界の摂理が何だ‼
　俺ぐらいの大馬鹿なら、世界の常識に喧けん嘩か売るぐらい、やって

みせなくてどうする！
「だあああああああああああああああっ!!」
　繰り出す拳こぶしから激痛が迸ほとばしるたび、今日まで見てきた一人の女の子の笑顔が脳裏を駆けていく。
　トゥアール……。
　君は、こんな苦しみの中、ずっと戦ってきたんだな。
　君は、こんな悲しみの中、ずっと俺たちに笑顔をくれたんだな。
　……ありがとう、トゥアール……。
　いつもそうだった。
　強大な力に屈してしまいそうな時……絶望に押し潰つぶされてしまいそうな時……。
　トゥアールのツインテールが、俺に勇気をくれた……。
　俺の右腕に宿る──君からもらった、もう一つの属性力こころが……!!
「あの日から色いろ褪あせず、ずっと……!!」
　血を飛沫しぶきと舞い上げ、何度目かの拳がヒットする。
　たまらず腕を弾き上げたロンギスギルディ。その巨腕が、僅わずかに放電していた。
「何ッ、馬鹿な!?」
　人間ごときの拳で手傷を負わされた──その一瞬の驚きよう愕がくの間断目掛け、俺は全霊を込めて拳を振りかぶる。
　髪を結ぶように束ねた、少しずつの心が──身体からだを満たしてゆく。
　俺の右手に……あの日、仲間たちが重ねてくれた手の温ぬくもりが、分けてくれた心が……確かな力として漲みなぎった。

「──俺は！　ツインテールを諦あきらめない!!」

　魂の叫びと共に。
「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!」
　俺が渾こん身しんの力で右腕を振り抜くと同時に、強烈な熱波が放たれる。
「ぐわあっ!!」
　それがロンギスギルディの巨体を弾き飛ばし──背後の壁に深々とめり込ませた。
　握り締めた右拳こぶしから、颶ぐ風ふうのごとき灼しやく熱ねつが迸ほとばしる。
　視線を走らせるまでもなく、その正体は白日の元に晒さらされた。
「────あ……」
　己が眼前を貫き輝く、真紅の刃やいば。
　剛力ちからもなく。装甲もなく。防御壁もなく。
　まして──ツインテールもなく。
　何もかも失った無力な生お身れの……観み束つか総そう二じの手に、ただ一振りの炎えん刃じんが握られていた。

「ブレイザーブレイド……どうして俺の手に!?」



キャラクター名鑑
032

デック・ニールソン



DEK NEILSON

DATA

性別:男
年齢:32歳
誕生日:10月7日
身長:182㎝
体重:73㎏

米国在住の俳優。アカデミー主演男優賞受賞経験もある。自他共に認めるヒーロー好きで、ツインテイルズの大ファン。特にテイルブルーをリスペクトしており、ハリウッド映画『TWIN TAILS』においてブルー役を快く引き受けた。地毛でツインテールにする、役作りのために度々来日するなど、ギャグ枠と思しきブルー役に真摯に取り組む熱い役者魂を持っている。何の力も持たない普通の人間である彼の語った夢が、心砕けた観束総二に最後の勇気を与えた。

第五章　俺のツインテール。

　ブレイザーブレイドの一いつ閃せんで吹き飛ばされたロンギスギルディは、数瞬の忘我を経て立ち上がった。
「……この世界に着任してから、己おのれの拳こぶしよりも多く眺みたテイルレッドの武器だ……見み紛まごうはずもない。少年よ、それは本物のテイルレッドの剣つるぎだな」
　その貌かおからは、油断も驚きよう愕がくも消え去っている。
「やはりただ者ではなかったようだな。何な故ぜお主がそれを持っているのかは聞くまい」
　奴やつの言葉を借りるなら、俺だってこの半年、雨あま傘がさよりも数多く手にした長なが物ものだ。
　テイルギアをまとわずにこの剣が具現化していることが、どれほど異常であるかはわかる。
「――もはや問答はせぬ。立ちはだかる難敵として戦うのみ!!」
　背中のヒレを抜き放ち、両手に一本ずつ構えるロンギスギルディ。
　上段から振り下ろされた二刀を、俺はブレイザーブレイドの刃やいばの腹に手を添えて受け止めた。
　たとえブレイザーブレイドを持っていても、こいつらの攻撃を生身の俺が受け止められるはずがない。刃やいばもろとも、軽々と力任せに押し込まれて終わりのはずだ。
　だが俺は、受け止めるどころか力で敵の剣を弾き上げ、無防備な胴目掛け斬きり立てた。
「ぐぬうっ！」
「感じる……俺の全身に、ツインテールが漲みなぎっていくのを!!」
　依然として、俺のツインテール属性はティラノギルディに奪われたま

まだ。
　それどころか、この身体からだとの繋つながりは途絶え、俺は完全にツインテールとは切り離されてしまったと断言された。
　それでも俺は、ツインテールを守りたいと願った──。
　あの日もし、トゥアールにテイルギアを与えられなくても……俺はこうしていた。慧え理り那なのツインテールを取り戻すために、こいつらと戦っていたと思う。
　みんな……今、あの日できなかったことをするよ。
「変身できなくても……！　戦う力が無くても！　ツインテールを愛する心が無くても！　ツインテールを守りたいって想いだけは変わらない!!」
　俺の信念に呼応するかのように、右腕のテイルブレスが激しく発光している。これが……俺に力をくれたのか？
「ツインテールを持たぬ、ただの人間が……これほどの力を……!!」
　二度目の不可能をその身に受け、ロンギスギルディは覚悟をなお上回って狼ろう狽ばいする。
「ツインテールならあるさ。俺の右腕に……」
　よろめくロンギスギルディへと疾駆しながら、俺は魂の限り叫んだ。
「これが……ただの人間の底力だああああああああああああああああああああああ!!」
　ブレーキも考えず身体ごとぶつかり振り抜く、後先を捨て去った渾こん身しんの一いち斬ざんが、見上げる巨体を疾はしり抜ける。
「ぐわあああああああああああああああ……!!」
　全身から放電しながら、ロンギスギルディは興奮気味に語りかけてきた。
「……おかしいかもしれんが、う、嬉うれしいぞ……。最後に、お前のような熱き漢おとこと戦えたのがな……。ま、まるで……本物のテイル

レッドのようだった……」
　爆散するロンギスギルディ。
「やった……」
　よろける身体を支えようと地面に突き立てたブレイザーブレイドが消え、たまらず俺は膝ひざをついた。
「ソ、ソウジ!!」
　俺を気遣う声に、膝に手をついて立ち上がり、振り返った瞬間。
「――あ……」
　デックさんやあーちゃんの無事を安あん堵どする暇いとまもない。
　ただ一度の奇跡では超えられない障害が……微かすかに灯ともった光を塗り込める、黒き壁が眼前に広がる。
「モケー」
「モケケケ」
「モッケッケ」
　前門を何とかしたってのに、後門が追いかけて来やがる……。戦闘員アルテイロイドが何十体いるか、数えるのも馬ば鹿からしい。
　ギリギリのところで耐え踏みとどまった心を砕くには、十分すぎる数だ。
　瞬間―突如として胸の下から照らされた光に、俺は眼めを細めた。
　右腕のテイルブレスがさらにその輝きを増し、精も根も尽き果てたはずの身体からだに、血よりも熱き炎が脈動する。
　その赤き閃せん光こうは、俺に〝決断〟を促しているかのようだった。
「…………」
　生命とは、一度限りのものだ。だから尊く、何物にも代えがたい。
　属性力エレメーラもまた、同じだ。失えば二度と戻らない唯一のものだからこそ、俺たちは必死に戦い、守り抜いてきた。

　一生に一度。その当たり前の摂理を今、俺は破ろうとしている。
　わかってきた。何な故ぜ俺が、属性力エレメーラを失ってなお、ツインテールへの思いを失わずにいられたのか。何故俺が、生身でブレイザーブレイドを具現化できたのか。
　唯ゆ乃のが言っていたじゃないか。究極のツインテールは、全てに強制的にツインテール属性をもたらす、悪魔のような存在だと。

　――俺自身も、その強制力の例外でなかったとしたら。

　むしろ、能力の根源である俺は、もっとも強く侵食を受けてもおかしくはない。
　失ってなお、じわじわと強制的にツインテール属性を補充される。
　０になってなお、１へと再生もどる。
　恐れ、拒みながらも、結局俺は順調に、究極のツインテールへと近付いていたのだろう。
　ティラノギルディの言う通りだ。生命ツインテールを失っても生き、それどころか今、また新たに次の生命を稼働させようとしている俺は、一体何なのか。
　人としての生涯を完遂できるのは……これが最後のチャンスだ。
　ここから先へ進めば、もう後戻りはできないだろう。想像を絶する地獄が待っているかもしれない。
「……デックさん」
　二人を背に庇かばいながら、自分でも驚くほど落ち着いた声で、俺はデックさんに呼びかけた。
「テイルブルーの役作りで悩んでるなら、思い切って馬ば鹿かになってみるといいと思います」
「ＦＯＯＬ……？」

背に向けられる声に滲にじむ、純粋な困惑。俺はなお、目の前の戦闘員アルテイロイドたちだけを見据える。

雑ざ魚この戦闘員アルテイロイドだってさ、こんだけ数集まれば怖こえぇよ。

愛あい香か。一人で何百体もの戦闘員アルテイロイドと戦ったあの時……怖かっただろうな。

慧え理り那な。憧れだけで終わらせず、本当にヒーローを目指し邁まい進しんする君を、尊敬する。

イースナ。守るために戦うと言ってくれた時、本当に嬉うれしかったよ。

そして───俺たちにいつも笑顔をくれた、トゥアール。

みんな、いつも俺の隣で戦ってくれてありがとう。

俺もまた、隣に行くよ──。

「みんな、馬鹿ばっかりなんです。ツインテイルズって……。馬鹿で、最高の仲間たちです。だから……守りたいんだ！」

「□□!!」

デックさんが息を呑のむのが聞こえる。

「──もちろん、一番の馬鹿は俺です。世界一の……宇宙一のツインテール馬鹿です!!」

ツインテールを守りたい。その思いだけを胸に、駆け抜けてきた。

ツインテールを失う悲しみを知った今、眼前の恐怖に足踏みして、自分にできることから目を逸そらすなんて、俺にはできない。

俺は、自身の覚悟をまざまざと見せつけるように、輝くブレスを胸の前で構えた。

地獄が何だ。

それが天国だろうと地獄だろうと、もたらすのは俺自身だ。

踏みとどまるより、歩みを進めた先で、希望を掴つかみ取ればいい!!

「――――テイルオン‼」

　咆ほう哮こうと共に視界が紅あかに包まれ――戦う時にのみ見える世界、視点へと変へん貌ぼうを遂とげる。
　今、二人はどんな目で俺を見ているだろう。
　瞬まばたきの間に、少女の姿へと変わった俺を。
　赤き光を吹き散らし、ツインテールをなびかせ、空想こころの装甲に身を包んだ俺を。
「ソウジ、君ハ……」
「お兄ちゃん……」
　変身ができないという不安はなかった。
　自分が別のものに〝変身〟していくという不安は打ち砕いた。
　この迂う闊かつな真ま似ねは、俺自身へのけじめだ。正体が世界中に知れ渡ることを恐れ、震ふるえながら過ごし、仲間たちをも不安にさせてきたこの数日。
　恐怖に負け、苦痛に屈し、大切なものを手放してしまいそうになった俺自身への――。
　俺に最後の勇気をくれた恩人。そして最後に守りたいと願った少女。
　二人に俺の正体を見せることで、俺の決断から一片の後悔をも消し去る。
　たとえそれで、この二人がテイルレッドに……ツインテールに失望してしまったとしても。
　俺はフォースリヴォンに触れ、噴き上がる炎と共に刃やいばを抜き放った。
　ブレイザーブレイド――生身の俺を守ってくれた相棒を、再び手に握る。

　やっぱり、テイルレッドのための剣なんだな。柄つかが、小さな指に吸い付くように馴な染じむ。
「モ、モケ……」
　目の前を覆おおう漆黒。動揺する戦闘員アルテイロイドを、決然と見据える。
「完全解放ブレイクレリーズ!!」
　ブレイザーブレイドが鳴動し、刀身が展開。
　拓ひらかれた刀身から絶え間なくほとばしる烈火を撃ち放ち、戦闘員アルテイロイドたちを円柱型の結界で拘束バインドする。
　この場所で初めてテイルギアをまとい、力に翻ほん弄ろうされ、戦闘員こいつらにさえたじろいでいたあの日の俺を置き去りに──俺は再び、この炎の剣を手に疾は走しる。
「グランドッ！　ブレイザアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア!!」
　覚悟の咆ほう哮こうと共に、拘束バインドした戦闘員アルテイロイドめがけ振り下ろされる炎の斬ざん撃げき。
　決別の一いつ閃せんは、文字通り一刀のもとに黒き壁を消滅させた──。

　腕や足に視線を向ける。いつもとテイルギアの色や形が少しだけ違う。
　当然のことだが、この変身は不完全なようだ。
　剣を仕舞い、デックさんとあーちゃんの元に歩み寄る。
「……デックさん……」
　何を言われても受け止める覚悟はしていたが……デックさんは、目を輝かせて捲まくし立てた。
「すごいじゃないか、ソウジ！　君がテイルレッドだったなんて!!」

「え、あ……あの、気持ち悪くないですか、男が……こんな変身して……」

　そんな弱気な問いに応える世界の顔は、少年の頃に戻っていた。

「誰だれもが受け止められる力はわからないヨ。でも、僕は嬉うれしいナ。だって、ソウジは僕の思い描いた夢そのものだからラ。僕がテイルブルーを演やるのと同じだもノ!!」

　誰もが笑顔になれるよう頑張れる人。それが、デックさんの思い描いたヒーローだった。

　今デックさんを笑顔にできたなら……俺も、ヒーローの端はしくれを名乗ってもいいのかな。

「行くんだネ……ソウジ……ううん、テイルレッド」

「はい。仲間が……俺と、俺のツインテールを待っています」

　寂しげな笑顔を見せるデックさんに、俺は約束を告げた。

「デックさん。映画、楽しみにしてます。きっと……」

「ウン。きっと、いい映画にするヨ。ソウジが守ってくれた、僕の心デ!!」

　あーちゃんはさすがに怯おびえているかと思ったが、この子も強い子だ。そのくりっと大きな瞳ひとみで、瞬まばたきもせずに俺を見つめている。

「あーちゃん。テイルレッドのこと……嫌いになった？」

　あーちゃんは大きく頭を振り、その可愛かわいらしいツインテールを振り乱した。

「ううん。テイルレッド……まもってくれてありがとう！」

　ツインテールがふわりと揺れる。

　……可愛い。

　やっと、ツインテールを可愛いと思えた。

　幼い少女の何気ない仕草で愛を取り戻したことを確信し、俺は勇気で

満たされる。
「ありがとう。このことは……秘密だよ」
「うん。きっとママもともだちもしんじないもん。テイルレッドが、おにいちゃんだったなんて。だから、わたしだけのひみつにする！」
　あーちゃんは自分のツインテールを一房掬すくい、俺へと差し出してきた。
「わたしもやくそくまもるから、テイルレッドもやくそく！　かいぶつを、ぜーんぶやっつけてくれるって！　ツインテールきりげんまん!!」
　指の代わりにツインテールを結ぶ。俺にとっては、何よりも固い約束だ。
　たどたどしく毛先でタッチをした後、約束の完了としてツインテールを〝きる〟俺たち。
「あーちゃん、名前聞いてもいいかな？」
「なまえ？　……あすか！」
　俺は頭を撫なでる代わりに、あーちゃんのツインテールを撫でた。
「あすかちゃん、ありがとう……約束するよ。俺は、みんなのツインテールを守る!!」
「あのね、あすか、大きくなったらテイルレッドになりたいの！　なれるかな？」
　いつか、通学路で友達や母に語っていた夢。それを、あらためて本お人れに向けて語るあすかちゃん。
「なれるよ、必ず。──君が、ツインテールを愛する限り」
　そう。ツインテールを愛する限り──夢も、奇跡も、きっと叶かなえられるはずだから。
「がんばって、テイルレッド!!」
　胸熱くなる応援へ、たなびくツインテールを首しゆ肯こうと返し。俺は真なる戦場へと跳躍した。

◇

　何とか自分の分担した分のエレメリアンを制圧したイエローだが、彼女の身体からだを異変が襲っていた。
　力が入らない。というよりも、込めた力が逃げていくようだ。
「……くっ……何ですの、これは……!!」
　レッドがいなければ、イエローの最強形態・アブソリュートチェインは一度の全弾発射でエネルギーを使い尽くす諸もろ刃はの最強形態。
　ゆえにパワーアップをせずにここまでの敵を倒したのだが、それでもなお、イエローは通常戦闘では考えられないほど大きく疲ひ弊へいしていくのを感じていた。
　気付かないほどの小さな傷口から、多くの血が流れ出ていくような。
　否定したくともこの感覚には、覚えがあった。
　初めて変身した自分に、自信の持てなかった時。負の感情に呑のみ込まれてしまった時。
　心を強く持てなかった時に経験してきた、正しくテイルギアの力を引き出せない状態だ。
　ブルーに引き続き、イエローも、心を大きく乱しているのは明らかだった。
　足を引きずる思いで転送ポイントへと向かい、ようやくブルーの元へと辿たどり着いたイエローが見たのは、ティラノギルディに翻ほん弄ろうされるブルーの姿だった。
　イエローから少し遅れて到着したブラックも、メガ・ネに肩を借りて歩いている。
　遅れて到着した救援者を見て、軽口を叩たたくティラノギルディ。
「救援の割りには、皆疲れ切っておるな」

だが、決してその口元に余裕はない。
三人が自分の元に辿り着くこと──それはすなわち、部下の全滅を意味するからだ。
「変われば変わるものじゃな、ティラノギルディ。小心者の御み輿こしの帝王が、随分と偉そうに見てきおる。わらわにもレッドにしたように卑ひ怯きような手を使ってみせよ‼」
揃い踏みした仇きゆう敵てきを前にしたからだろうか。これまで散りゆく部下たちをあえて悪し様に嗤わらってきたティラノギルディが、その瞳ひとみに裸の悲しみを垣かい間ま見せる。
「……プテラギルディ……」
呼びかけるようにしてそう呟つぶやいたティラノギルディの視線は、ブラックへ。
「……ビートルギルディ」
続けてイエローへ。
「トリケラトップギルディ」
そしてブルーへ。
盟友を倒した者たちへ、怒りと敬服が綯ない交ぜになった視線を順繰りに向けてゆく。
「変わったのは貴様たちも同じよ。よくもまあ、その脆ぜい弱じやくな属性力エレメーラを引っさげてこの帝王の前に立ったものだ」
「何じゃと⁉」
いきり立つブラックに、ティラノギルディはなおも吠ほえ立てる。
「結局貴様たちの強さは、テイルレッドに支えられたものだったな。テイルレッドがいなければ自分たちのツインテールへの愛に自信を持つことすらできぬ。だから今、貴様たちは弱いのだ‼」
言い返すのは容易たやすい。だが、今のティラノギルディには背水の陣を超えた超越的な精神力を感じる。ブルーへの怯おびえも、もはやま

るで見て取れない。
　基地で戦いを見守るトゥアールは、冷静にアドバイスを送った。
『……皆さんの出力が低下しているのは事実です。ですが、何も力だけが取り柄の恐いの竜しししと真っ向から戦う必要はありません。ツインテイルズにはエレメリアンにはない力がある。属性玉変換機構エレメリーションを使って攪かく乱らんしながら戦ってください!!』
「……わ、わらわのグラスギアに属性玉変換機構エレメリーションはないのじゃが……」
『イースナは、メガ・ネプチューンとの連係を駆使して戦いなさい！
どの道今の不安定な状態では、インフィニットシステムは発動できませんから……!!』
　方針は決まった。
　ブルー、イエロー、そしてブラックとメガ・ネはじわじわと距離を開き、三角陣トライアングルでティラノギルディを包囲した。
「属性玉エレメーラオーブ――幼馴染属性チャイルドフツド!!」
　攻撃力に不安の残るブルーが、一瞬の時間操作を可能とする最強クラスの属性玉エレメーラオーブを。
「属性玉エレメーラオーブ――母属性マザー!!」
　機動力に劣るイエローが、超高速移動を付加する属性玉エレメーラオーブを。
　同時に高負荷の属性玉エレメーラオーブを使用しようと取り出し―左腕の属性玉変換機構エレメリーションに装そう填てんしかけた瞬間、ティラノギルディは右腕を突き出した。
「ふうううううううううううううん!!」
　稲妻のような衝撃波がブルーとイエローを直撃し、二人のテイルギアの左腕に搭載されている属性玉変換機構エレメリーションが、予期せぬ不意打ちに悲鳴を上げるように放電した。

　二つの属性玉エレメーラオーブは装そう填てんされる前に空中に固定され、ティラノギルディへ向かって飛んでゆく。
　プテラギルディとトリケラトップギルディの属性玉エレメーラオーブだけではない。
　展開した属性玉変換機構エレメリーションから、これまでに倒したエレメリアンの無数の属性玉エレメーラオーブが花の胞子のように弾けて飛び出し、ティラノギルディの元へと飛び去った。
　泥に落とした石のように、難なくティラノギルディの体内に吸い込まれていく属性玉エレメーラオーブたち。
「い、今まで倒したエレメリアンの属性玉エレメーラオーブが……」
「奪い返された⁉」
　イエロー、そしてブルーと、左手を庇かばいながら愕がく然ぜんと呟つぶやく。
「さすがに強固なシステム、その鎧よろいに込められた属性力エレメーラは奪えぬがな」
　ティラノギルディの頭に生えたツインテールが鳴動している。そして、放たれる威圧感も目に見えて巨大になり、今やただ対たい峙じしているだけで強烈な衝撃がブルーたちを襲おそう。
『何な故ぜ……⁉　属性玉エレメーラオーブをエレメリアンが取り込んでも、強化はできません！　ビートルギルディたちのように同属性を共鳴させてパワーアップしても、それは自滅を招くだけ……そんな意趣返しのような真ま似ねをしても、ティラノギルディには何の利もないはずです‼』
　真意を問うためトゥアールのオペレートをブルーがそのまま叫び伝えると、ティラノギルディはマントをはためかせ、前方へと緩やかに跳躍した。
　着地を待たず、空中で掻かき消えるティラノギルディの身体からだ。

　標的を見失ったブルーが警戒して辺りを見回すが、ティラノギルディはその背後に突如として出現した。咄とつ嗟さに反応し、振り向きざまにランスを前面にかざすブルー。
　ティラノギルディは構わず、防御のために突き出されたランスをそのまま殴りつけた。
「……痛つぅ……！」
「空気が読めぬ……そんな醜しゅう聞ぶんを組織に蔓まん延えんさせた最大の理由、それがこの呪のろわれた体質だ」
　ブルーから距離を取ったかと思えば、またも姿が掻き消え、今度はイエロー、ブラックの眼前に現れ、翻ほん弄ろうする。
「この、速度は……!!」
　対戦したブラックが一番味わった、プテラギルディの超高速戦闘。体格差ゆえに本家には劣るが、それでもこれまでのティラノギルディと比すれば雲うん泥でいの差だ。
「……あんた、プテラギルディの能力を……!?」
「俺は自らを鍛きたえることなく無限に強くなることができる……同胞の力を得てな！　克こつ己きと精進こそ誉ほまれと讃たたえるアルティメギルにとって、これ以上の道化もおらぬというわけだ!!」
「……やはり……！　レッドのツインテール属性を奪ったあの日、あなたが急に水流を放ってきたのは、わたくしが発動した濡れ透け属性クリアウエットの属性玉エレメーラオーブを奪っていたのですわね!?」
　トラップとして水流を操作する能力、濡れ透け属性クリアウエットの属性玉エレメーラオーブ……。逃走を許すまいとして発動したあの時、すでにティラノギルディは能力の片へん鱗りんを見せていたのだ。
　ブラックもこれにはしてやられたと顔を顰しかめる。
「あの首領が評価するわけじゃ……。逆に貴様ほどわかりやすく強い手て駒ごまもおらぬ。処罰した数だけ強くなる、まさに処刑部隊の長おさ

に相応ふさわしい能力というわけか!!」
「そうよ！　この力……首領様より直じき々じきに賜たまわったものなのだからな!!」
　だが、高らかに謳うたい上げるティラノギルディがそれを誇っているようには微み塵じんも感じない。
　自分に言い聞かせるように、帝王だと誇示し続けてきた戦士。先ほどティラノギルディは、ブルーたちの力はレッドへの依存が生み出していると言ったが……何かに縋すがっているのは、ティラノギルディも同じなのだ。
「……では今のティラノギルディには、今まで戦ってきたエレメリアン全員分の能力が上乗せされてしまったということですの!?」
　この不調にあり、さらにこちらの奥の手までもを逆手に取られる逆境。イエローが不安を吐と露ろするのも当然のことだった。
「ゆえに危うい……。これだけ豪傑どもの魂を取り込んでなお、一番強大で暴れ狂っておるのがあの少年のツインテール属性だ。いったいどれほど日常がツインテールであれば、これほど恐ろしい強さに成長するのか……」
　総そう二じのことを話題に出され、ブルーたちの目の色が変わった。
　今、何のために戦っているのか。撤退も敗北も許されないことを、改めて悟ったからだ。
「みんな、背中合わせで攻撃に備えよ……！」
　メガ・ネの提案で四人は防御を優先。包囲を放棄して展開していた三角の陣を縮める。
　最高の先読み能力を備えるブラックが、手前やや上空に出現したティラノギルディを補足し、ダークネスグレイブで斬きりかかった。
　ティラノギルディは豪腕を振りかぶり、ダークネスグレイブの刃やいばの腹を殴りつける。

「聞こえておるか、テイルギアの開発者よ！　倒したエレメリアンの力を我わがものとする……このシステムを得て優位に立ったつもりでいたのだろうが、属性力エレメーラを駆使した戦いは我われらがいかな生命よりも優れている！　人間の造る戦闘装備など、全てアルティメギルの後追いにしかならぬのだ!!」
　遠く離れた基地でオペレートしているであろう後方支援者トウアールに向けた侮ぶ蔑べつ。
　イエローは前に踏み出し、絶対服従首輪アブソリユートリングを取り出した。
「……優劣などありませんわ……！　テイルギアは、心の結晶……人間はあなたたちに決して負けません!!」
　だが気迫も虚むなしく、絶対服従首輪アブソリユートリングも反応しない。
　ブルーと同じく最強形態への変身を果たせないイエローは、それならばと現形態の全武装を展開。完全脱衣形態フルブラストモードの一斉発射を敢行した。
　全方位に向けて弾丸を乱射すれば、高速移動してこちらに向かってくるティラノギルディは自分から被弾に行って自爆する。
　そう考えての賭かけだったが──ティラノギルディは、着弾してなお、悠々とこちらに向かってきた。ダメージを受けなかったのではない。ダメージを受けた事実を無に還かえす、世界への反逆。この場の誰だれもがその現象に覚えがあった。
　その強さ恐ろしさを最も知るブルーがいち早く気付いて叫ぶ。
「──トリケラトップギルディの時間操作──!!」
　ほんの一瞬過去へと巻き戻ることで、相手の攻撃を無力化する離れ業わざ。同じ時間操作を以もつてしか、この能力に対抗する術すべはない。

　主武装である、背中から前面に展開した陽電子砲の長大な砲身を掴つかまれ、持ち上げられるイエロー。
「きゃあああああああああっ!!」
　そのまま、地面に全力で叩たたきつけられた。
「貴様らがコックロチギルディを倒すのに使ったのは、誰だれの力だ!?　汗属性スウエットと、腋属性アームピットだったか！　それもまた、どちらも俺の部隊ではないか……!!」
　倒された部下への手た向むけとでも言わんばかりに、次々と属性玉エレメーラオーブの能力を使ってくる。
　全ての属性玉エレメーラオーブを奪われたことで、ツインテイルズは補助能力を失い、自力が低下していることも相まって、もはや一方的な勝負が展開され始めた。
　しかしやはり群を抜いて強力なのは、ブルーとイエローが先だって使おうとした、ティラノギルディの腹心二体の能力だ。
　一つでも攻略に死戦を賭とした強力な能力を二つも有した帝王は、まさに難攻不落。
　自慢の聖剣を抜き放つことさえせず、徒と手しゅ空くう拳けんで充分にツインテイルズを追い詰めていた。
「……互いにかばい合うその姿、実に美しい……。だが悲しいかな、貴様たちの心は全てあの少年に向いている……百ゆ合りにはなれぬということか」
「そういうことはあいつの前で言いなさいよ空気読めないわね!!」
　ブルーの抗議も虚むなしく、ティラノギルディが右掌てのひらの上に球体状のエネルギーを練り込む。
　百合への成長を見限り、ブラック目掛けて破壊弾を撃ち出した。
　体力を消耗し息を切らしていたブラックは、その光弾への反応が遅れる。

「イースナちゃん危ない！」
　背中のブースターを噴き上げ、メガ・ネがブラックの前に躍り出た。
「うわあっ……!!」
「メガ・ネ!!」
　煙を噴き上げるメガ・ネを受け止めるブラック。
　攻撃を受け止めたメガ・ネの左腕の肘ひじから先が、丸ごと吹き飛んでしまっている。
　剥むき出た機械の関節から火花を散らし、メガ・ネは苦く悶もんを噛かみ殺した。
「下がれ、〝テイルシルバー〟……次は腕だけでは済まぬぞ。プテラギルディやブラキオギルディが慕った御身、あたら傷つけようとは思わん」
　メガ・ネはその気遣いを一蹴し、残る右手のガドリング砲の砲口をティラノギルディへと向ける。
「ウチは涙を流せへん……でも、涙を流せるのに我慢して、頑張る子たちがおるんや！　あんた、泣きたいのに我慢しとる子、見たことあるか!?　あんなに苦しいもんはないで!!」
「知らぬな……帝王は涙とは無縁!!」
「そぉか！　ウチもこんなもん、なぁんも痛くない！　好きなだけ撃ってくればええわ!!」
　掃射されるガドリング砲を腕の腹で受け、後退するティラノギルディ。
「ぐっ……！」
「イースナちゃんもウチも、総そう二じ君に救われた身や！　みんな、泣きたいのに我慢して頑張っとる！　ウチはネジの一本になるまで！　ツインテイルズの盾たてになったるで!!」
「ぬう……何という気迫！　おかんというよりもはや雄お漢か

ん……!!」
　いや、メガ・ネだけではない。力弱まりながらなお立ち向かおうとする三人のツインテイルズ。
　その気迫に気け圧おされそうになりながら、ティラノギルディは前進した。
　メガ・ネのガドリング砲を今度は掌てのひらで受け止め続け、こともあろうに豪快なスイングでその弾丸を投げ返した。
「わあっ!!」
　あまりにも虚を突かれた反撃にメガ・ネは返された弾丸をモロに浴び、倒れてしまう。
　範囲の狭い一点集中での攻撃反射は、巨乳属性ラージバストの属性玉エレメーラオーブの力だ。得意の補助能力を逆手に取られ、イエローは歯は噛がみした。
　ブルー、イエロー、ブラックが高速移動からの攻撃を繰り返すティラノギルディに、為なす術すべ無く吹き飛ばされていく。
「くっ……」
「きゃあ！」
「ぐわっ……！」
　ティラノギルディが動きを止め、長く尾を引いていた残像がようやく消えた瞬間、空高く跳ね飛ばされた三人が次々と地面に叩たたきつけられた。
「大丈夫か、みんな……！」
　メガ・ネがボロボロのボディを押し、三人の元へ縋すがり寄る。
「諦あきらめぬと言うのなら諦めさせるまで。──頃合いだ。現れよ!!」
　ティラノギルディの合図を受け、空から次々と新たなエレメリアンが降ってくる。
　その姿は間違いなく古代生物の活性体シルエット。死の二菱ダー・イ

ノ・ランヴアスの戦士だ。
「……馬ば鹿かな、まだ伏ふく兵へいを残していたのか!?」
「言ったはずだぞ、これは貴様たちとの戦いではない、世界への最終侵攻だ！　戦力を分散、逐次投入するは当然ではないか!!」
　ティラノギルディに加えて、十数体の死の二菱ダー・イノ・ランヴアスの残存兵……ブルーたちを絶望が襲おそう。
　だが現れた戦士たちは一切手出しをせず、まるで見守るかのように立ち尽くすのみだった。
　天を指差すティラノギルディ。起たち上がって空を仰ぐブルーたちが見たのは、スクリーンとなって投影されている自分たちの戦いだった。
　ティラノギルディの後ろに立つ戦闘員アルテイロイドが、リアルタイムで映像を中継し始めたのだ。
「貴様たちの無様な負け戦、世界中に中な継がしておる。程なく人類は絶望するであろう。自分たちの護まもり人は、ここまで脆ぜい弱じやくな存在であったのだと！　そして観念するのだ!!」
　周りを威圧的に囲む戦士たちの意義が、ようやくわかった。追加戦力ではない。自分たちではなく、世界へとより絶望を煽あおるため、演出のためにこの場に呼ばれたのだ……!!
「ッ……あんたって奴やつは、どこまで……!!」
　ブルーの憤激を切って捨て、猛襲する帝王。
「嫌いやならばいつものように我われらを恐怖させてみせよ！　鬼神、テイルブルーよ!!」
　プテラギルディの高速移動に加え、トリケラトップギルディの瞬間的な時間逆行をも駆使することで、ティラノギルディは速度という物理の絶対呪じゆ縛ばくから解き放たれた。
　仮にブルーがエターナルチェインになれたとしても、ここまでの規格外の能力行使は負担がかかりすぎて模倣は不可能だっただろう。

　為なす術すべも無く、四人は全ての攻撃を封殺され、一方的に被弾していく。
　そしてその光景は、世界中の人々へと中継されるのだ。

　地下基地ではトゥアールと尊みこと、未み春はるが、無力さを噛かみしめながら、その光景をモニターで見つめていた。
　マクシーム宙そら果はてでは、あすかの母の到着を待つデックとあすかが。
　陽よう月げつ学園の屋上で、理事長・神しん堂どう慧え夢むが。
　いや、テイルレッドの正体を知る者ばかりではない。
　愛あい香かの自宅では、愛香の姉、津つ辺べ恋れん香かが。
　店長マスター不在となった喫茶店アドレシェンツァで、常連客たちが。
「ブルーが、負けてる……」
「もしかして……強いんじゃないのか、アルティメギル……」
　街歩く人々。下校中の学生たち。仕事帰りの会社員。
　時差を離し、就寝中に飛び起きた他の国の人たちまで。
「レッドちゃんは、やっぱり来ないのか⁉」
「まさか、本当に負け……」
「馬ば鹿か言うな、レッドたんが負けるかよ‼」
　テレビで、携帯で、空に投影されたスクリーンで。手も足も出ないツインテイルズの姿を見せつけられていた。
　人々は初めて見る劣勢のツインテイルズを前に、不安を口にする。
　人々は初めてエレメリアンという怪人たちに、人間として始源的な恐怖を呼び起こされ始めていた。
　ティラノギルディが狙ってそうしているのだろうか、ブルーたちの声が何も聞こえず中継されていることが、かえって一方的な敗北を演出し

ている。
「かはっ……!!」
　苦しみに喘あえぐブルー。
　全員、装ギ甲アがボロボロになり、破片が割れ硝子ガラスのように地面に散乱している。
「……ティラノギルディ!!」
　背後からかけられる声に、攻撃の手を止め振り返るティラノギルディ。
「映像を今すぐ止めなさい！　私し怨えんでむきになって、この世界を無価値なものにするつもりですか！」
　仮面をした白衣の少女が、こちらへと向かい駆け寄ってきていた。
　いてもたってもいられなくなったのか、仮面一つを引っさげ、トゥアールが戦場へと駆けつけたのだ。
「駄目、トゥアール……こいつ、マジでやばい……!!」
　ブルーに言われるまでもないだろう。
　トゥアールもその姿を間近で見るのは三度目だ。女のような甲かん高だかい声を上げ、テイルレッドの正体に怯おびえていた初見とは、もはや威圧感が全く違う。
「人々が敗北するツインテイルズを見てツインテールに失望すれば、あなたたちが欲しがるツインテール属性が消えてしまうんですよ！　だからあなたたちは今まで、こんな強硬手段には出なかったんでしょう!!」
　侵略価値を再認させるという、その世界に住まう者として禁きん忌きの挑発。トゥアールも必死だった。
「――属性力エレメーラが消える……誰だれがそう言った？」
「……え？」
「誰からそう聞いた？　実際に目にしたのか？」
　ティラノギルディの予想外の反論に、トゥアールは無意識に後あと退

ずさる。
「なるほど。偶像を消せばツインテール属性も消えると。そう推論していたわけだな、百ゆ合りコスモの中心の科学者……そして、元ツインテールの戦士」
「！　な、なぜそれを……」
　ティラノギルディにはそのことを話していなかったはずだ。
「世界をわたる〝復ふく讐しゆう者〟……貴様がそう名乗っていたと部下から聞き及び、ずっとその背景を思案していた。かつて我われらに世界を滅ぼされたツインテールの戦士……そう考えれば辻つじ褄つまが合う」
　思考戦ではエレメリアンには絶対に負けない。科学者としての誇りを持ち、ツインテイルズのバックアップをしてきた。
　トゥアールは今初めて、思考でも相手に先んじられるという恐怖に晒さらされていた。
「自分が決断し、芽吹かせた属性力エレメーラを消滅できていれば、世界を守れていた……その後悔こそが、貴様の心の支えだったというわけか」
　内に秘めた後悔までもを見透かされ、ぞくりと身を震ふるわせるトゥアール。
「……戦士でない者を徒いたずらに傷付ける意はないが、教えてやろう。そんなことでは属性力エレメーラは消えぬ。テイルレッドの敗北を世界に声高に謳うたったところで、今育ったツインテール属性は断じて消えぬのだ」
　トゥアールだけではない。ブルーも、イエローも、同じくいくつもの世界をわたって来たブラックとメガ・ネも。ごく当たり前のような調子で告げられた事実に、言葉を失って呆ぼう然ぜんとしていた。
「背の伸びきった大人が幼子に戻れるか？　同じだ。育った心は消すこ

とはできぬ。人の命ある限り、芽吹いた属性力エレメーラは決して消えぬわ」
「嘘うそです！　あなたは、レッドの正体が人々にばれて、世界に拡散したツインテール属性が消えることを焦った……だからこうして総攻撃を仕掛けてきたのでしょう!!」
　ティラノギルディはその縋すがるような叫びに返答せず、自分の胸を拳こぶしで叩たたきつけた。
　胸の中心から血管のように全身に広がる、光のヒビ。綺き麗れいだが、痛々しかった。
「……見ての通り、取り込んだ……いや、俺の体内に退避したあの少年のツインテール属性が暴れ者でな。これ以上は俺が自滅してしまう」
　テイルレッドの影響力が消えて、せっかく育てた属性力エレメーラが失われるのが惜しいのではない。
　一刻も早くツインテイルズを倒さなければ、奪ったツインテール属性が原因で自壊する。
　理由はそれだけだと、ティラノギルディは告げる。
「属性力エレメーラは……消えます！　そんな事例は幾度も見てきました!!」
「消えるのではない。探知できなくなるだけだ。わかりやすく説明してやろう、科学者」
　意識はしていないのだろうが、その親切はトゥアールにとって耐え難い屈辱だった。
「一度育った属性力エレメーラは不変の物だ。それを消えたと錯覚するのは、関心を失うなどして接続が断たれてしまうからだ。検索できなくなる、といえばわかるか？」
　コンピュータでファイルを削除しても、実際にはまだ記録媒体に残っている。

　ツインテールを好きな人が、ツインテールへの関心を失う。属性力エレメーラが消える。だがそれは、体内から消滅したわけではない。参照するためのインデックスが消えたに過ぎないのだ。
　ファイルの完全消去──それこそ、アルティメギルが人間から属性力エレメーラを奪う状態だ。
「人間にしては相当な科学力を有するようだが、属性力エレメーラの深しん淵えんは果てしない。完全に理解し、制御できる者など誰だれもおらぬのだ」
　本当は世界を守れたはずだった。自分のツインテールへの愛ゆえに、ツインテールを捨てられず、世界の侵略を座視することになってしまった。
　だからこそけじめとして自らのツインテール属性を、別の世界の戦士へと託した。
　だが、トゥアールを支えてきたその誇りが、今脆もろくも崩れ去ってしまったのだ。
「属性力エレメーラの奪取を止めることはできぬ。侵攻部隊の隊長に勝てなかった時点で、何をどうしようと、お前は自分の世界を守ることはできなかったのだ。百ゆ合りの少女よ……」
「う、嘘うそ……嘘、です……そんな……じゃあ……」
　いやいやをするように首を振る仮面ツインテール。
　仮面を通しても、トゥアールが今どんな絶望を瞳ひとみに宿しているか、その場の誰だれにも伝わるようだった。
「私は……ツインテールへの愛を捨てられず自分の世界を守れなかったのではない……ただ、弱かったから世界を守れなかった、と……」
　泣き笑いに震ふるえる声。
　仮面ツインテールは力無く地面に膝ひざをつき、全てを諦あきらめたように項うな垂だれてしまった。

　そのあまりにも痛ましい姿を見たブルーが、地面を殴りつけて立ち上がる。
「ッ……ベラベラベラベラと！　優勢になった途端饒じよう舌ぜつになってんじゃないわよ!!」
　イエロー、ブラックも、それぞれ力強く立ち上がる。
「何をどうしてでも止めてみせますわ！　属性力エレメーラの奪取も……アルティメギルの侵攻も!!」
「何を高みに立ったつもりである、簒さん奪だつ者が！　その見下した人間を襲わねば生きられぬ欠陥生物どもが烏お滸こがましい！　貴様ごときにトゥアールを馬ば鹿かにする権利などないわ!!」
　怒りで奮起し、一斉にティラノギルディにかかっていくブルーたち。
　だが、もはや彼ひ我がの戦力差は、憤怒だけでは埋められぬほどに開いていたのだ。
　先ほどよりも強く吹き飛ばされ、地面に倒れ伏すツインテイルズ。
「世界の侵攻とは、こうして人間に絶望を与えていくことだ。正々堂々戦い、悔いなく散っていく者たちが、どれだけ恵まれているか……!!」
　憎まれ役を引き受ける覚悟こそ、将に必要なもの。
　向けられる憤怒と怨えん嗟さこそ、将が背負わねばならぬ業ごう。
　ティラノギルディは、ブルー、イエロー、ブラック、仮面ツインテールの悲痛な表情を目に焼き付けていった。
「もう一度言う……ツインテイルズよ、全ては決したのだ……諦めよ……!!」
　精根尽きたイエローへ、無慈悲に歩を進めるティラノギルディ。
「テイルイエロー。ビートルギルディの仇かたき……まずは貴様だ」
　部隊を超えた旧友。恋を知り、銀河に果てた美の四心ビー・テイフル・ハートの隊長。
　当人に悔いなくとも、遺のこされた者にとってその相手が仇であるこ

とに違いはない。
「……あ……」
　呆ぼう然ぜんとティラノギルディを見上げるイエロー。
「そのリボンを砕きツインテールを解ほどけば、変身を維持していられまい。認識の攪かく乱らんから解き放たれた素顔が衆目に晒さらされれば、諦めもつこう──」
　何な故ぜ、その声はそんなにも穏やかなのか。自尊心を砕き、再起を不能にするというよりは、諦あきらめさせることこそ最良と確信した信念すら感じる。
「ふううん!!」
　ティラノギルディの豪腕が、イエローのフォースリヴォン目掛けて放たれた。

　リヴォンが砕け、無惨にツインテールが解ほどかれる。
　イエローの変身が解け──人々の目の前で、慧え理り那なの正体が晒さらされる。
　ブルーたちが、不可避の最悪の結末に絶望しかけた刹せつ那な。

　ティラノギルディの拳こぶしは、イエローの前髪に触れるか否かの距離で止まっていた。

　イエローが、絶望に閉じた瞼まぶたを開き、ゆっくりと視線を馳せる。
　丸太のごときティラノギルディの手首を力強く握り押さえていたのは──小さな子供の手だった。

「───ツインテールに、触れるな……!!」

その手首を握り締めることすらできない、五指を鉤かぎ曲まげることさえ覚おぼ束つかない、小さな手が。
ツインテールを断じて解かせぬと、怪異の豪腕を食い止める。
イエローに遅れて横を向くティラノギルディ。
「ッ……な、お前は……!!」
一体誰だれが、その小さな体たい躯くが駆けつけるまでの様を知覚できただろう。
「うおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお!!」
そこにいた戦士を視認した瞬間。
──幼くも勇ましい裂れつ帛ぱくの叫びと共に、ティラノギルディの横頬ほほに拳が突き刺さっていた。
「ぐっ……わあああああああああああああああ……!!」
アスファルトを抉えぐり砕き、激しく吹き飛ばされるティラノギルディ。
粉ふん塵じんすらも避けて落ちる輝きの只ただ中なかに、赤い戦士が立っていた。

「……レッ、ド……」
仲間の呟つぶやきが。
「テイル、レッド……」
敵の驚きが。

そして。
「あれ……」
「そうだよ……」

やがてそれは、中継を隔へだてて祈るように見守っていた世界中の人々にも伝でん播ぱし、誰だれもがその名を口にする。
「レッドだ……」
「レッドちゃん！」
「レッドたんが！」
錯覚から戸惑いへ。戸惑いから驚きよう愕がくへ。驚愕から歓喜へ。
悲しみに凍いてついていた人々を、小さな少女は太陽のように照らす。

「──テイルレッドが、帰ってきた!!」

眩まばゆいばかりの真紅のツインテールをたなびかせ。
ツインテールと世界の守護者、テイルレッドが再臨した──。

◇

「何だ……何が起こったのだ、何な故ぜここにいる！　貴様は何だ!!」
ティラノギルディは自分でも持て余すほどの狼ろう狽ばいを、叫びに変えて俺にぶつける。
誰あろう、俺のツインテールを奪い去った張本人だ。もはや、テイルレッドが存在していることそのものが恐怖だろう。

「──俺は……テイルレッド！　お前たちアルティメギルから、この世界の全てのツインテールを守る者だ!!」

ならば俺は、偽いつわりなく。ありのままの姿ツインテールをもって、受けて立つまでだ。

「馬ば鹿かな！　気負うだけで物事が罷まかり通るなど、世界は甘くはない!!」
「そうだな……。気合いだけでできることなんて、限りが有る」
　駆けつけるまでの間に通信から漏もれ聞こえた、ティラノギルディの知った風な言葉を思い出す。
「……でも、お前が言ってたことじゃねえか。属性力エレメーラは誰にも完全に理解はできない、ってな……。まさかお前、自分は理解できてたとでも言うつもりか？　背が大分伸びた俺が、こうして小さい女の子になれてるんだぜ!!」
「う、ううっ!!」
　俺は、握り締めた右拳こぶしをティラノギルディへと突き出した。
「信こ念れは……一番最初に教えられたことだ！　テイルギアは心で操る武装……俺の心で御せないはずがないと！　俺が折れない限り……テイルレッドは二度と倒れない!!」
　難しい理屈なんて知ったことか。
　心の強さが、守る強さに転か化わる……トゥアールに教えてもらったこれこそが、俺の属性力エレメーラの真理だ!!
　振り返ると、ブルーたちが未いまだ一言も発せず、呆ぼう然ぜんとしている。
　装甲が砕け、傷つき、ボロボロになりながら、懸命に戦ってくれたみんなが。
「……心配かけてごめん、みんな。俺はもう、大丈夫だから」
　俺が照れ交じりに笑うと、みんなは誰だれからともなく肩を震ふるわせ始めた。

「やっぱり俺──ツインテールが好きだ!!」

その宣言が、張り詰めていたものを決壊させてしまったようだ。
「うっ……あ、わああああああああああああ……」
誰憚はばかることなく、大声で泣くブルー。
「あ、ああああ、う、っあ、ああ……！」
膝ひざをついたまま、いやいやをする子供のように頭を振り、笑顔で涙するイエロー。
「ひぐっ……うっ、ううう、うううううう……!!」
ボロボロのメガ・ネに背中を支えられ、顔をくしゃくしゃにして泣きじゃくるブラック。
そして――
「っ……う、く……ん……」
隠しきれない、仮面の下の涙。首筋にまで伝う雫しずくが、トゥアールが誰よりも大粒の涙を零こぼしていることを、如実に伝える。
何憚はばかることなく涙を見せる仲間たちに、俺は胸を熱くする。
「………………よし、切れい！　切れーい!!」
ティラノギルディが、戦闘員アルテイロイドに中継を止めさせた。空に映っていた映像が、ぷっつりと途切れる。それに続くように、集まっていたエレメリアンたちもそっぽを向き、無言を貫いた。
俺が視線を向けると、ティラノギルディはフン、と鼻を鳴らす。
「姑こ息そくな！　鬼の目にも涙……戦士ではないただの女子おなごの涙を世間に見せ、イメージアップを図ろうという肚はらか！　そうはいかんぞ、ツインテイルズども!!」
……そういうことか。
世界の希望を断つために、世界に正体を晒さらそうとまでした奴やつが……女の子の涙を世界に晒すことは由よしとしない。
何な故ぜなら今、ツインテイルズはただの女の子に戻ったから。戦士ではない少女を、傷付ける真ま似ねはしないと。露悪に塗まみれた口上

の中に、信念を隠しているのだ。
「ほうれ、どうした。貴様は泣きべそをかかぬのか？　ん？」
　そんな百ゆ合りの帝王の気高き矜きよう持じをひけらかさず、ティラノギルディはなお俺に悪態をつく。
「俺のために泣いてくれる仲間がいるのに……俺が涙を見せられるか」
「ほう。ならば流れた仲間のその涙、貴様はどうするテイルレッド!!」
　俺は、胸を張って応えた。
「もちろん拭ぬぐうさ！　この俺のツインテールで!!」
「指で拭えええええええええええええええええええええええええええええええええええええええ!!」
　ブルーの叫びを皮切りに、みんな弾かれたように駆け出した。
　戦場だということを忘れ。戦いの最中だということを忘れ。
　ツインテールを振り乱し……涙を舞い散らせ……イエローに至っては、一緒に武装もぽろぽろと落として。
　武装した普通の女の子が、転がり込むように俺に抱きついてくる。
　この小さな身体からだでは限りが有るが、それでも俺は、できる限り深く、強くみんなを抱き締め返した。
「そーじ、そーじ……!!」
「観み束つか君!!」
「総そう二じ……!!」
　みんな、変身後の名前で呼ぶのも忘れ、俺の名を涙声で繰り返す。
「馬ば鹿かじゃないのあんた！　何でまたツインテールになってんのよ！　ほんと……に……馬鹿！　うっ……うわああああああ……!!」
「ひうっ……う、わ、わたくし、ツインテールで大丈夫ですわ、拭ってくださいまし!!」
「わらわは涙を舌でぺろってしてくれた方が萌えるぞ！　……っく、ちーん!!」

「何でウチの身体で涙はなかむんや、かたいやろ⁉」
　代わる代わるみんなツインテールを撫なで擦さすってあやした後……俺は、一人だけ少し離れて立つ仮面の少女を目にする。
　心細そうに一人立つその肩を、強引に引き寄せた。
「きゃっ……」
　か細い声をあげて俺にしなだれかかるトゥアール。
　彼女は再び肩を震ふるわせ、嗚お咽えつを噛かみ殺しながら謝ってきた。
「そう、じ、さま……。私を、許して……くれますか……？」
　何言ってるんだよ。
　トゥアールが何を悔いようと、謝られることなんて一つもない。むしろ、彼女にどんなに謝っても謝り足りないのは、俺の方だ。
「……トゥアール、ありがとう……戻って来れたよ、俺」
「っ……総そう二じ様ぁ‼」
　トゥアールは仮面を外して地面に落とすと、涙で彩られた顔を惜しみなく俺の肩に預けてきた。
　みんなを慰めながらも、俺はティラノギルディの不意打ちを今度こそ警戒していた。
　だが……全員が落ち着くまで、結局ティラノギルディは手を出してこなかった。
「存分に拭ぬぐい終わったか」
「何だ、やっぱ待っててくれたのか？」
　またぞろ鼻を鳴らし、ティラノギルディは下手な悪ぶりでそっぽを向いた。
「か、勘違いするな！　周りでめそめそとされていては、気が散ってかなわんからよ！　偽りとはいえ、役得な百ゆ合り光景に見入ってもしまったしな‼」

　そして軽くマントを翻ひるがえし、スイッチを切り替えたように俺を睥へい睨げいした。
「……何より今の貴様は、気を散らして勝てるとも思えんのでな。テイルレッド」
　トゥアールと一緒にみんなをできるだけ遠くまで退避させ──俺は、前に進み出る。
「仲間を慰め終わったのなら始めようぞ。英雄きさまと帝お王れ。この世界を懸けた最後の大一番たたかいをな」
　そうだ。これは、世界ツインテールをかけた戦い。
　そして──
「返してもらうぞ！　俺のツインテールを!!」
　俺自身を取り戻すための戦いだ!!
「いいや、今度こそ復活できぬように打倒してくれるぞ!!」
　共に背に仲間を臨みながら、俺とティラノギルディは一対一で向かい合う。
「皆の者！　手出しは不要！　俺が倒したと豪語した戦士だ、後始末も俺がつける!!」
　ティラノギルディもまた、二度目の不意打ちはないと完全決着を覚悟する。
『総二様……気付いていますか!?　テイルギアが見たこともない色になっています……!!』
　トゥアールが、手持ちの端末で直すぐ様さま状況分析を進め、オペレートしてくる。
「トァウール、すまない。また俺、無茶して心配かけるだろうけど……許してくれ」
『許すとか許さないとか……そういうことじゃあ……！　今の状態はいわば、軽ウ結イのー低ク出チカエ形イ態ン……全ての出力が大幅に弱体

化しています！　出力が正規に流動している分、今の愛あい香かさんたちよりは安定していますが……ティラノギルディ相手では同じことです!!』
　テイルレッド・ウィークチェイン……やはりこの変身は、応急処置のようなものか。
　テイルギアの赤い輝きは錆さびたようにくすみ、ツインテールも光彩を失って普通の赤髪となってしまっている。
　ツインテールをゆるく結ぶかの如く、いつ解ほどけてしまうかもわからない不安定な状態。
　まさに、今の俺そのものだ。
「だったら、しっかりと結び直さないとな！　ティラノギルディから、俺のツインテール属性を取り戻して!!」
『……総そう二じ様……』
　観念したように息を呑のむトゥアール。
「ブレイザーブレイド！」
　俺を再起させてくれた相棒を手に、俺は遥はるか見上げる巨きょ躯くへと迫撃する。
　ティラノギルディは自身の剣も抜かず、浴びせかけられるブレイザーブレイドの斬舞をいともたやすく回避していく。
　対比のように鮮やかに舞う、奴やつがその頭に宿したツインテール。
　あやうく、目を奪われそうになる。
「……ふん、何だ。気迫とは裏腹、力が込もっておらんぞ!!」
　バックステップからスウェーへ。さらに、肩や頭を軽く動かす程度に。小さくなっていく回避動作は、瞬く間に俺の剣けん閃せんを見切っていくことを意味する。
「気になるか！　俺のツインテールが!!」
　俺の視線を目ざとく察知し、挑発してくるティラノギルディ。

「お前のツインテールじゃない、俺のを奪っただけだろう!!」
「これは奪ったのではない……我われら死の二菱ダー・イノ・ランヴアスの全ての戦いの果てに手に入れた勲くん章しようだ!!」
「□□□□□□!!」
　そこには、簒さん奪だつ者としての負い目など微み塵じんも無い。
　敢かん闘とう精神。武士道。数あま多た存在するフェアプレーをかなぐり捨ててなお誇りある、強部隊の長おさとしての自負に溢あふれていた。
「遊びはせん、全力で葬ほうむる!!」
　ティラノギルディが急加速し、眼前から忽こつ然ぜんと姿を消す。
　直後、暴走してきた大型車に跳ね飛ばされるように、俺の身体からだは軽々と宙を舞っていた。
「ぐあっ……！」
『総二様、ティラノギルディはテイルギアの属性玉変換機構エレメリーションと同等の能力を備えています！　攻撃のバリエーションは予測できません、接近戦は避けてください!!』
　トゥアールにオペレートされ、俺は咄とつ嗟さに後方へと跳躍する。
　予備電源で動いているような今の状態で、どこまでやれるかはわからないけど……俺も切り札を出す！
「プログレスバレッター!!」
　ティラノギルディの攻撃の第二波の到来に先んじてツインテールを下結びへと結び直し、俺は下結の超速形態フオーラーチエインへとチェンジ。
　大気を連鎖破裂させながら、高速戦へと突入した。
　高速と高速が交錯し、互いのツインテールがスローモーションで揺れる。
　やはりフォーラーチェインも、速度がいつもよりかなり低下してい

る。これでは焼け石に水だ。速度に速度でぶつかっても、勝ち目はない。

　心を乱すな。動きを読め。奴やつのツインテールの揺れから、次の挙動が察知できる!!

　プログレスバレッターをブーメラン形態──スラッシュモードに変形させ、ティラノギルディが辿たどる軌跡を予測して投とう擲てきする。

　だが、俺の先読みをさらに遥はるか抜き去り、ティラノギルディが眼前から掻かき消えた。

「何!?」

　高速移動ではない。

「……トリケラトップギルディの時間移動……!!」

「つまらん能力だ。こんな僅わずか一秒にも満たぬ時を巻き戻して、何から逃げる……!!」

　軽口の端はしに同胞への賞賛を滲にじませ、俺に拳こぶしを振りかぶった瞬間。

「うっ……ぐうううううう……!!」

　ティラノギルディは、胸を押さえて立ち止まった。

　胸から全身に、網の目のように細かく走る光……それは、ヒビのように見えた。

「……お前、俺のツインテール属性で苦しんでいるのか……!?」

「おかげで欲しい人も徳のが手に入ったのだ、どうということはない！」

　気合いを込めてヒビを押し込めるティラノギルディ。

「……貴様こそ……せっかく絶望という地獄から這はい上がったのだ、戦いになど舞い戻らず、その僅わずかに遺のこった属性力エレメーラを後生大事に生きればよかったものを……!!」

「お断りだ！　今ここで俺が挫くじけたら、そのたった一度の絶望を全

ての人が味わうことになる!!」
　それが、最後通つう牒ちようだったと言わんばかりに──。
「ならば抜こう──我わが聖剣、輪廻の百合受攻アロンダイト!!」
　ティラノギルディは、最強の聖剣を抜き、頭上に掲げた。
「ぬうううん!!」
　黄金こがねの軌跡を描いて振り抜かれた聖剣は、受け止めた俺のブレイザーブレイドの刀身を易やすすやすと素通した。
　円となって空を舞う真紅の刃やいば。
「……な……!?」
　ブレイザーブレイドが折れた……いや、斬ったのか、剣で、剣を!!
「これで貴様の希望も砕けた……！」
　間かん髪はつ容いれず迫る追撃を、刹せつ那なの結び変えで応戦する。
　上結の強攻形態ライザーチエイン……だが、流動する属性力エレメーラを攻撃や速度に特化した強化形態は、いずれも防御力を低下させる。普通に受け止めることはできない。
　プログレスバレッターを腕に装着し、円状の力場フイールドを展開して盾たてを形成する。
　残ったもう一本のブレイザーブレイドと盾を重ね、ティラノギルディの一撃を受け止めた。
「今までそう言って心を挫こうとしてきたエレメリアンたちに、俺は必ずこう言ってきたぜ！　俺には、まだツインテールが残っていると!!」
「ツインテールなら、俺にもあるわああああああああああ!!」
　聖剣を受け止めた体勢のまま、俺はブレイザーブレイドを完全解放ブレイクレリーズする。
「ライジング……ブレイ
ザーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーッ!!」

本来なら二刀で放つ炎の斬ざん撃げきを一刀に集束し、力任せに押し切ろうと試みる。

だが、ツインテールを手にしたティラノギルディの気迫が、僅かに勝った。

ブレイザーブレイドツインが弾き上げられ、無防備となった俺の身体からだに全衝撃が叩たたきつけられる。

ライザーチェインの追加装甲が粉々に砕かれ、俺とティラノギルディの間に大爆発が巻き起こったその瞬間。

（今だ──!!）

先の見えぬ夜道で光を求めるように。

俺は、ティラノギルディの胴体目掛け、右腕を渾こん身しんの力で突き出した。

全身を苛さいなむ激しい衝撃。

「ぐああああああっ……!!」

苦く悶もんを叫びを漏もらしながら吹き飛んだ俺は、地面に叩きつけられ、バウンドし……二度目に地面に伏した瞬間、変身は解けてしまっていた。

やはり低出力の形態……ダメージの加積で変身解除されるという、テイルギアの初期の弱点がそのまま反映されていた。こいつが撮影を止めてなかったら、一巻の終わりだった……。

「属性力エレメーラを奪われてなお、ツインテールを燃え上がらせた奇跡、素直に賞賛しよう。だが、あくまでそれは微かすかな残り火。やはり万全のお前には遠く及ばぬ」

ティラノギルディは、全身傷だらけの俺を見て、何かを確信した。

「む、その手傷……今の戦いで負ったものではないな、少年」

「……変身する前に、お前の部下と一勝負やらかしてきたんだよ」

「何と……！　その傷ついた身体で俺に勝負を挑んできたというの

か!?」
　敵からの労ねぎらいに応えるように、俺はよろめきながら起たち上がった。
「――――けど、その甲か斐いはあったぜ」
　俺は、握り締めた拳こぶしを開く。
　属性玉エレメーラオーブではない、眩まばゆい光の凝縮体。そこには、ツインテール属性が輝いていた。

「□□□□□□」
　一瞬我われを失った後、ティラノギルディは弾かれたように自分の身体からだを見た。まさぐり、叩たたき、遅れて異変を察知する。
「貴様、まさか……!!」
「俺のツインテール属性！　確かに返してもらった!!」
　賭かけだった。
　取り込んだツインテール属性の影響で、奴やつの身体に走った光のヒビを見た時。その放射状のヒビの中心点こそ、俺のツインテール属性が取り込まれた場所だと洞察していたのだ。
　何の根拠もない推論に賭かけ、俺はライジングブレイザーの爆圧でティラノギルディの視界が遮さえぎられたその瞬間。ツインテール属性のこもった右腕……テイルブレスを装着した右拳こぶしを、その一点目掛けて突き出していたのだ。
　ツインテール属性は、掴つかんだ手から溶け込むように俺の身体に吸い込まれていった。
「俺だけの力だけじゃ、奪還は無理だった……。取り込んだ属性力エレメーラが顕在化するほどお前を追い詰め、懸命に戦い抜いてくれた仲間たちのおかげだ!!」
　離れていた時間が長すぎたのだろう。ツインテール属性が固着した感

慨が、全く湧わかない。まだ不完全だ。
「そん、な……ツインテールが……俺の勲くん章しようが……!!」
　むしろ、それを呆ぼう然ぜんと見つめていたティラノギルディの方が、著いちじるしく取り乱し始めた。
　俺のツインテール属性を失ったことで、ティラノギルディの頭からツインテールが消えかけていた。
「駄目だ、消えるな！　ツインテールが無ければ……ツインテールを失ったら、俺は帝王のままではいられなくなる！　テイルレッドの属性力エレメーラなどもういらん！　ツインテールよ、ただ残ってくれえええええええええええ!!」
　ともすれば組織への反逆ともとられかねない懇こん願がんは、偽いつわらない願い。
　俺は血を吐はくように息を溢こぼしながら、パニックを起こしたティラノギルディへと語る。
「……それが全ての人間の悲しみだ、ティラノギルディ」
　エレメリアンが、人間の心を奪わなければ生きていけないのは、十分理解している。
　しかし、業ごうを背負うことはできても、心を奪われる痛みを理解できないエレメリアンには、悲しみを理解することは出来なかったはずだ。
「お前は理解したんだ、人間の悲しみを。今までは『奪わなければいけない』……それが、『奪わないでくれ』になったんだ」
　ほんの日常の只ただ中なかに、喪失を何度もフラッシュバックしてしまう悲しさ。
　それを覚悟なくもたらされた人たちの苦しみを、お前は理解したんだ……!!
「お前らは一度でいいから、属性力エレメーラを奪われた人たちのこと

を顧かえりみろ……！　永遠に解き放たれない呪じゆ縛ばくに囚とらわれた人たちの、その後の人生を!!」
　ティラノギルディは双そう眸ぼうを禍まが々まがしく光らせ、
「渡さん……渡さんぞ！　俺は帝王……人の心を理解するなど愚にもつかぬ！　奪い返すなら何度でも奪ってくれるわ！　人類の怨おん敵てき、エレメリアンとしてなあああああああああああ!!」
　ティラノギルディは、せめてそのツインテールだけは失うまいと渇望した。
　魂の叫びが、これまで見せることのなかった全力を解放よびおこしてしまったのだ。
「ツインテエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエエル!!」
　得意げに叫んでいた百ゆ合りという気合いも超え、かつてなき雄お々おしき咆ほう哮こうが大気を破は砕さいする。
　マントが弾け飛び、聖剣を大地に突き立て、頭を抱えて猛たけるティラノギルディ。
　消滅しかけていたツインテールは輝きを取り戻し、更なる躍動をもって帝王を彩った。
「これが我わがツインテール……!?　これが、我が最終闘体!!」
　自分だけの、真白いツインテールをなびかせ、帝王は極大の闘気を迸ほとばしらせる。
「……おお、ティラノギルディ様……!!」
　不安げに見守っていた部下たちが、その威容に感嘆の声を上げる。
「貴様と同じだ、テイルレッド！　俺の中の僅わずかなツインテール属性を爆発的に燃焼させた！　我われらエレメリアンは、生まれ持ってツインテールへの愛があるのだからな……！」
　だが今まで、ツインテール属性を極めたのはドラグギルディだけだっ

た。
　生まれ持った愛を貫き通す、それがどれだけ難しいことかは、こいつらが一番よく知っているはずだ。
「〝二〟を冠する部隊の隊長──元々ツインテールへの素養は極めて高かったということか!!」
「ロマンチストだな少年……だが心ここ地ちよい。ときめくぞその推論！　この帝王に、ツインテールの才能があったなどとはな!!」
　先ほど見せた身体からだのヒビが、身体の器官のように完全に刻み込まれた。
　穢けがれ無き肉体を無敗の誇りとしていた帝王が、力の代償にその桂けい冠かんを失ったのだ。ただ一つ、頭に輝くツインテールだけを残して。
「いくぞ、少年！　覚悟はよいな……!!」
　ティラノギルディは、躊躇ためらいなく俺目掛けて突進してきた。
「テイルオン……くっ……！」
　さっきから、変身しようとしているのに全く上う手まくいかない。
　自身の属性力エレメーラを失った状態で変身していたのに、それが急に戻って身体が混乱しているのか……逆に、残り火で戦ったことで異常をきたしてしまったのか。
　いずれにしろ、このままでは今一度ツインテール属性を奪われてしまう。
「や、やめろティラノギルディ……！　生身の人間に攻撃をするつもりか!!」
　遠く離れたブラックが制止するが、覚悟を決めたティラノギルディに届くはずもない。ブルーたちもこちらへ向かおうとしているが、もはや立ち上がることもままならないだろう。
　受けて立つぞ、ティラノギルディ。

振りかぶられた拳こぶしから右腕を庇かばうように、無意識にブレスのない左腕を突き出した瞬間――意識が、広大な純白に塗り込められていった。

◇

像を結んだ瞬間、俺の瞳ひとみには一人の少女が映っていた。

見上げる星空のような儚はかなさと美しさをそのツインテールに宿した、小柄な少女。

「……ソーラ……」

純白で覆おおわれた空間でなお輝く綺き羅ら星ぼし―ソーラが、再び俺の前に姿を現したのだ。

「総そう二じ……」

そっと歩み寄る俺を、心底哀かなしそうに見つめてきたソーラは―

「…………って、馬ば鹿かでしょ」

唐突に、可愛かわいく唇くちびるを尖とがらせた。今までとのあまりのギャップに、俺は目を丸くする。

「……えええ!?」

「そんなに辛つらくて苦しい思いをしてまで、どうしてツインテールを好きでい続けるの？　あんなの、ただの髪型なんだよ？　馬鹿馬鹿大馬鹿！　いい加減愛あい想そも尽きちゃうんだから!!」

夢で見た時の、泡ほう沫まつ夢む幻げんの繊せん細さいさはそこにはなく……まるで、無邪気に拗すねる子供だ。

近寄りがたい神聖さが薄れたからというわけではないが……俺は意を決して尋ねた。

「なあ……君は一体、何者なんだ？　俺が女の子になった姿……ってだけじゃないのか？」

どこまでも続く空へ思いを馳はせるように……ソーラは後ろ手に組み、寂しげに微笑ほほえむ。
「私は、総二の反対。……ツインテールが大嫌いな女の子……かな」
極めに極めた完璧なツインテールを翻ひるがえし、ソーラはおどけるようにそう嘯うそぶいた。
「これは正真正銘、私の身体からだだよ。だから、男の子……あなたが私の身体になった時は、すっごく恥ずかしかったよ。全部見られちゃったんだもん」
「それは……ごめん」
「本当にね、もどかしいの。私の身体を直接見られたり触られたりするよりも、ずっと恥ずかしいんだよ！　幽体離脱して、自分が勝手に裸になってるのを見る感じなの！　わかる⁉」
そ、そう言われると罪悪感が……。俺もあの状況ではただ必死だったんだけど……。
「でも、それ以上何もしないんだもんね。やっぱり総二は、ツインテールといい距離でつき合わないと駄目だよ。ちゃあんと女の子のことも見てあげないと」
上目遣いに俺を見つめるソーラ。何な故ぜだろう、逆に咎とがめられているような。
「ツインテールのために戦うなんて……争うなんて、馬ば鹿かげてるよ。ツインテールなんて……好きにならない方がいい。世界にない方がいいんだよ……」
軽はずみな提案の中に、俺は痛切な優しさを垣かい間ま見た。
途方もなく抗あらがい続けた果てに受け容いれたからこそ、滲にじみ出る失意。それを彼女から感じ取ることができたのは……俺もまた、その諦てい観かんを受け容れかけてしまっていたからだろう。
この子もまた、ツインテールにまつわる悲劇を知っているんだ。

「私はね、全ての世界で一番ツインテール属性が強い君を見つけて見守っていた……ああやっぱり、って思ったから、止めたかった。でも君は、また戦うことを選んだんだね……」
　ソーラは俺の思案顔を見るや、含み笑いを浮かべた。
「総そう二じは、ツインテールを求めすぎたの。失われた属性力エレメーラを取り戻したい。ツインテールを無くした女の子を、もう一度ツインテールにしてあげたい……。究極のツインテールに近付いたのは、君自身の望みなんだよ」
　……トゥアールのツインテールを見たい。
　文化祭でそう告げた時、トゥアールは悲しんだ。彼女が危き惧ぐした通りだ。大それた願いは身を滅ぼす。俺が、俺でなくなってしまうかもしれないと……。
　それが、強制的にツインテール属性をもたらす特性に合がつ致ちしてしまった。叶かなわないはずの望みを持って戦い続けた日々が、俺を究極のツインテールという存在へと導いていたのか。
「ねえ、総二。まだ、力が欲しい？　もっと苦しい思いをしても、戦いを続ける？」
　逡しゆん巡じゆん無く首しゆ肯こうする。真実を告げられてなお、俺には一片の後悔も生まれなかった。
「自分で苦しんで、悩んで決めたことだからな。その〝ただの髪型〟がどれだけ大切なものか……失ってあらためて気付いた。だから俺はもう、ツインテールを愛することをやめない。そしてこれからも、全てのツインテールを守るために戦い続けるよ」
　もう、傷つかなくていいと……暗に俺を諭さとすソーラに、俺は胸を張って応えた。
「じゃあ、もうしょうがないね。男の子だもん、私の手に負えないぐらいで丁ちよう度どいいよ」

貫禄というか……同い年に見えて、すごくお姉さんのようにも感じる。
「……こんな俺に、力を貸してくれるのか？」
「違うよ……あるのは全部君の力。私は、君のストッパーの役目を放棄するだけ」
ソーラは、俺の左腕を取り、両手で包み込んだ。
「総二ならきっと、ツインテールでみんなを幸せにできる。諦あきらめて、逃げて、いじけちゃったばかな女神おんなのこを……見返してやって」
俺は、ソーラの手に自分の手を重ねて応える。
「ソーラ……やっぱりツインテールは世界にあった方がいいよ。俺が、それを証明する」
ソーラは微笑ほほえみ、ツインテールを結ぶ両のリボンを引き抜いて俺に手渡してきた。
「あ……」
ツインテールを解ほどいたことがきっかけだろう。ストッパーを名乗る少女が消えていく。
託された赤いリボンを握り締める。
彼女はツインテールを結ぶことで、別個の存在として俺の心に留とどまってくれていたのだろう。それを解いたということは──切り離されていた心が、一つに溶け合う。俺の心が、ツインテール属性そのものが、完全解放ブレイクレリーズされる。
俺は、取り戻した自分のツインテール属性がついに、身体からだとの繋つながりをも取り戻したのを感じた。
それは俺に、〝あいつ〟との再会をも予感させる。
俺は確信に近い期待を込めて、後ろを振り返った。
果たしてそこに輝いていたのは……かつて対話し、俺を導いてくれ

た、俺のツインテールそのものだった。
「観み束つか総そう二じよ」
　空間全体を包み込むような、重厚な声が響き渡る。
　男性か女性かも定かではない。多くの声が重なっているように聞こえる不思議な声こわ音ねは健在だった。
「よく……ツインテールを諦あきらめなかった」
「何言ってんだ、ツインテールはお前だろ？」
　目にしたのは、ツインテールだけが人の頭を離れ、形を保っているような輪りん郭かく。
　俺のツインテールだった。
「本当にごめん…もう迷わないと誓ったのに。また迷って、過ちを犯して、お前を失ってしまうところだった」
「私も言ったはずだ。時として迷うからこそ、人間なのだ。心がある証なのだ。乗り越えてくれて嬉うれしいぞ」
　厳おごそかな口調の中に、神秘的な温かさを見せるツインテール。
「これより私は、真なる意味でお前と共に戦おう。私を振るい、私を駆るのだ……！」
　神のように遠い存在だったこいつと……頼もしき相棒と、今こそ一体になれると確信する。
「さあゆくぞ、観束総二。全てのツインテールを──」
「ああ！　俺たちが救う!!」
　俺は再びその片房を己おのが手に取り、互いの思いを溶け合わせた。

◇

　猛襲したティラノギルディを、俺の左腕から放たれた閃せん光こうが弾き飛ばす。

「ウオオオオオオッ!?」
　凜りん然ぜんと輝く左腕。吹き出した赤と金の光は、旋風を伴って集束する。
　左手首に赤い粒子が爆裂し、もう一つのテイルブレスが実体化した。
　ソーラが解放してくれた、俺自身のテイルブレス──いわば、ツインテイルブレス。
　テイルレッドと同じ赤のブレスレットに、さらに重ねて走る神々しい金色のライン。
　その輝きに当てられて理性を僅わずかに取り戻したティラノギルディが、二つのブレスを前に吃きつ驚きようする。
「何ィ!?　二つのブレスだと!?」
「伊だ達てにツインテールじゃねえ……ってな!!」
　いくぞ、ソーラ。そして、俺のツインテール。
「よく聞けエレメリアン──そして、アルティメギル！　大切な心を失う悲しみ……この世界で、この痛みを知るのは……俺が最初で最後だ！」
　二つのテイルブレスを輝かせた両腕を、胸の前で交差させて構える。
「もう二度と！　誰だれ一人、心の輝きを奪わせはしない!!」
　二つの思いを重ねるように。
　そして、大切な思いを二度と離さぬよう……強く、強くこの胸に抱き締めるように。

「ツインテイルオン!!」



　敵にも、戦友にも、これ以上進化すれば、俺はツインテールになってしまうと言われた。
　確かに今この瞬間、俺はツインテールそのものかもしれない。
　ツインテールへの愛が全身を満たし、装甲を形成していく様を、神経伝達を超えた速度と情報量を以もつて、かつてないほど鋭敏に感じ取っていた。
　一秒にも満たないその時間で、駆け抜けてきた戦いの日々が、乗り越えてきたツインテールの愛が、新たなる装甲となって身体からだを取り巻いていくのを知覚する。
「あの日、お前たちが究極のツインテールを求め俺たちの世界にやって来た日から、全てが始まった……」
　言葉なく俺の進化を見届けるティラノギルディへ、胸に去来する万感を紡つむぐ。
「世界最強のツインテールだと言われて……色々なツインテールと出会って……俺は迷い続けていたのかもしれない。本当に、俺でいいのかって……」
　変身時の繭まゆ状の球体は、鮮烈な真紅のツインテールを型取り、爆裂する。
「けど今、その思いの全てを力に変えて！　俺は、俺自身のツインテールで到達したぞ！」
　止めどなく溢あふれ出る粒子を煌きらめかせ、俺は頂へと到達したテイルレッドの姿に魂を震ふるわせた。

「俺のツインテールは――究極だああああああああああああああああああああああ!!」



咆ほう哮こうと共に放たれる属性力エレメーラの余波が、大気を激震させる。
　リボンに。肩に。胸に。腰に。足に。
　暴走形態フオーライザーチエインを経たからこそ見極めた、攻防共に究極を体現した超越装甲が重なる。
　そして完全復活し羽ばたき舞うツインテールを象徴するように、背には翼型の装甲が加積されている。
「進化……いや、二段変身か!?」
　瞠どう目もくするティラノギルディ。
　究極のツインテールは、アルティメギルの理想。人間にとっては、悪魔の具現と言われた。
　だが、どんなに厳かに語り伝えられる伝説も神話も、今を生きる人間が超えられない道理はない。
　ツインテール神話サーガは、この俺が続きを継か承たる。
〝真の〟究極のツインテールとなって!!
『属性力エレメーラの摂理を超え……悪しき伝説を超えて、総そう二じ様は今！　全ての人々のツインテールと心を守るために真の究極のツインテールになったんです！　その神こう々ごうしい最強の姿こそ──』
　トゥアールの万感を引き継ぐように、俺は宣言する。
「テイルレッド・アルティメットチェインだ!!」
「アルティメットチェイン……それが、貴様の真のツインテールか!!」
　ティラノギルディは、驚きよう愕がくを超えた昂こう揚ように自らのツインテールを震ふるわせた。
「皮算用が外れたな。どうやら俺は、お前たちの望む究極のツインテールにはなれなかったみたいだぜ」
「ああ、まったくだ。ここまで期待させておいて勝手に伝説を覆くつがえすとは……貴様も相当に空気が読めぬらしいな、テイルレッド!!」

　ツインテールをたなびかせ歩みを進める俺を前に、武者震いするティラノギルディ。
　その時、背後に控えていたエレメリアンが二体、俺の眼前に躍おどり出た。
「ツインテール様、お供仕つかまつります!!」
　かける声も勇ましく、大将を守るかのように俺たちの間に立ち塞ふさがる。
「貴様ら、これは一対一の勝負だと言ったはず！　帝王に泥をかける気か!!」
　ティラノギルディの叱しつ責せきに、部下のエレメリアンが堂々と答える。
「全ては、あなたの栄光のため！　ツインテール様の勝利を疑うわけではありませんが……恐るべきはテイルレッド、何という可愛かわいさ！　まずは我われらが小こ手て調しらべを!!」
　そのうちの一体が問答無用で肩口へと振り下ろしてきた大剣を、俺は素手で受け止めた。漲みなぎる力のままに、受け止めた刃を強引に握り砕く。
「何だ、このパワフルな幼子は!?」
　刀身を失った剣の柄つかだけを呆ぼう然ぜんと見つめるエレメリアンの胸元へ、無造作に拳こぶしを繰り出す。
「ごっ――――ふぅうううううううううううううううううううううう!!」
　命中インパクトの瞬間、炎が周囲の大気もろともエレメリアンを取り巻いて爆裂し、凄すさまじい勢いで吹き飛ばす。
　炎を飛行機雲と残して吹き飛んだエレメリアンは、遅れて飛んだ二体目のエレメリアンに空中で直撃。二体もろとも吹き飛んだ後、激突した地面にクレーターを残し、爆散した。

「……何て力だ……!!」
　自分自身の放った力に戦せん慄りつする。伝説に語り継がれる究極のツインテールとは、このとてつもない力を制御できなかったのだろう。
　今ならばわかる。寂しさに、恐怖に押し潰つぶされそうになったあの日々が、俺に決して切れぬ手た綱づなを与えてくれた。
　皆にツインテールを愛して欲しい。
　心を共有したい。
　寂しさゆえに溢あふれ出す欲望を制御できず、この力を世界に向けて振りまいてしまった時……なるほどそれは、大いなる厄やく災さいと呼ばれるはずだ。悪魔と畏おそれられるはずだ。
　だがこの力を正しく使うことができれば――ツインテールを守るため、俺はどこまでも強くなれる!!
「お、おおお……。もうよい！　下がっておれ雑ざ魚こどもが！　貴様らごときがどれだけ束になろうと、今のテイルレッドの足元にも及ばんわ!!」
　驚きよう嘆たんも早々と、ティラノギルディは残る部下を諫いさめつけた。
「なんの、及ばねばなりますまい！　この身に代えても!!」
「似合いますぞツインテール様……いいえティラノギルディ様！　借り物のイメチェンではない、あなただけのツインテール……!!」
　賞賛を残してティラノギルディの制止を無視し、飛びかかろうとするエレメリアン。
「ゆくぞ！　我われらの女神のため、女神テイルレッドを打倒せん!!」
　そうだったよな……お前たちは……。
　あんな思いをして……あんな目に遭ってまだ、俺は懲こりないみたいだ。
　俺たちと同じ！　仲間を助けたいという思いで戦えるお前たちを、

やっぱり尊敬する……！
「俺はもう迷わない……！　大切な仲間とツインテールのために、お前たちと戦い続ける!!」
　背の翼から炎を噴き上げ、俺は天高く飛び翔しようする。
　地を歩くように大気を掴つかむ翼──。
　その翔しよう跡せきが描く赤き紋様は、まさしくツインテール。
　まるで、この地球そのものが、俺のツインテールと一つになったかのようだ。
　巨大な全能感に押し潰されぬよう、俺は自分自身のツインテールを操そう縦じゅう桿かんとしてエレメリアンへと迫撃する。
　この背の翼は、フォーラーチェインに搭載された腰の姿勢制御装置スタビライザーが、更なる進化を遂げて生まれ変わったもの。
　ならば──
「飛べ、セイバーーーーーーーーーーーーーーーーーッ!!」
　背の翼を展開させ、強化された全方位斬撃装備サテライトソード、ブレイザーセイバーを射出。
　さらに数を増した暴れ馬をことごとく舞い飛ばせ、次々とエレメリアンを撃破した。
「まだテイルレッドのツインテールに未練があるか、見とれおって馬ば鹿かども！　あれほど役割分担をしたであろう！　貴様らは自分の仕事をせぬか!!」
　ティラノギルディは、残る部下を一喝し、俺に向かってきた。
　互いに走り出した俺たちは、相手の掌てのひら目掛けて自分の掌を衝つき出す。
　身長差を強固な滞空力で補い、俺はティラノギルディの巨腕と真っ向から組み合った。
　行き場を失ったエネルギーが、周囲の地面を弾けさせていく。

　そしてはためき合う、俺とティラノギルディのツインテール。
　ティラノギルディが送った一いち瞥べつで、命令を汲くみ取ったのだろう。残る二体が、俺たちの遥はるか後方で傷ついた身体からだを休めているブルーたちを強襲する。
「恐れるな！　ブルーの胸を凝視してかかれー!!」
　ブルーの胸を凝視し、恐怖を克服したのか……！　凄すさまじい形ぎょう相そうだ!!
「させるか！」
　満ち溢あふれる力が新たなる武装に変わることを予感した瞬間──俺が思い描いたのは、やはりツインテールだった。

『さあ、私を……ツインテールを使え、観み束つか総そう二じよ──!!』

　現実世界では聞こえないはずの、頼もしき相棒の声が耳じ朶だを叩たたいた瞬間。
　俺は天そ空らに、あの光り輝くツインテールを幻視した。
「……ツインテール……ああ、行くぜ!!」
　己おのが放つ光を収束させ、紅あか鋼がねの身体を獲得していくツインテール。
　ツインテール属性の紋章を形にしたかのごとき、勇ゆう壮そうな双房戦闘支援機ツインテールアーマーの名を、俺は高らかに喚ぶ。
「テイルレガリアーーーーーーーーーーーッ!!」
　俺の肉体を離れてなお、俺の心で駆動する愛機。
　それは、遠く離れた己おのれのツインテール属性を求め続けた俺だからこそ到達した最後の武装。最強の神レガ器リアだ。
「おお……ツインテールが空を飛んでいる!!」
　武器を構えたまま、羽ばたくツインテールに目を見張る死の二菱

ダー・イノ・ランヴアスのエレメリアンたち。
　だが、心奪われたのも一瞬。奴やつらは、自分たちの大将ツインテールを援護し、護まもるという堅固な使命感に燃えている。
「ツインテール属性、獲とったり‼」
　あまりにも尚早な勝ち鬨どきを上げたエレメリアンたちは──
「何⁉　うおおおおおおおおおおおおおおおおお⁉」
「このツインテール……攻撃を仕掛けてくる⁉」
　急旋回したツインテールが放つ光弾を身に受け、爆散していく。
　ツインテールと共に戦う……その思いの究極形。
　テイルレガリアは、俺の信念が生み出した相棒だ‼
「来い！　テイルレガリア‼」
　ブルーたちの護衛を終えたテイルレガリアを、傍らに召還する。
　ティラノギルディの聖剣に対抗するために、俺もこの炎えん刃じんをさらに磨みがき上げる時が来た。
　テイルレガリアが翼を折り畳み、長大な一本の刀身へと変形する。
　一文字に構えたブレイザーブレイドを鞘さやのように納刀し、テイルレガリアは巨大な刃やいばを形成した。
「合体しただと⁉」
　刃の幅も柄つかも、実にブレイザーブレイドの一・五倍はあろうか。
　ツインテールより生まれた大剣の柄を握り、炎を吹き散らして一いつ閃せんする。
「究極双房剣テイルカリバー！　俺たちツインテイルズの心を……全てのツインテールを束ねた、最強の剣だ‼」
「面白い……その究極剣、我わが聖剣に打ち合わすに相応ふさわしき刃と認める‼」
　地面に突き立てた聖剣を、轟ごう然ぜんと抜き薙なぐティラノギルディ。そして高速移動を駆使し、俺の眼前に迫撃する。

　剣を打ち合わす度、炎をまとったソニックブームが周囲を爆裂させる。
　充分に距離を取ったとはいえ、これ以上後退したらブルーたちが危険だ。
　俺の意識が僅わずかにブルーたちに向いた一瞬。鍔つば迫ぜり合いを切り上げ、ティラノギルディは高速時空跳躍で俺を翻ほん弄ろうし始めた。
「テイルカリバーはただの大剣じゃない……俺の心と繫つながっている！　俺が今まで自覚してきたツインテールの神髄！　俺のツインテールを、力に変えて発動できる!!」
　高速移動と時間跳躍を身にまとった難攻不落の攻撃と、ツインテール属性を獲得したティラノギルディだが、それこそが付け入る隙すきになる!!
「テイルカリバー！　道標装填リーデイアモード!!」
　テイルギアで増幅された超人的反射神経をさらに先取り、時間から解放された敵の動きさえも捉える。
　テイルカリバーの能力で、俺はティラノギルディの動きを捉えた。
　回避不可能なはずの死角からの斬ざん撃げきを、バックハンドの一いつ閃せんで跳ね上げる。
「見えているのか、俺が!?」
　間かん髪はつ容いれず、テイルカリバーに更なる能力を付加した。
「無限装填アンリミテツドモード!!」
　剣速を加速させるため、柄つかのツインテールが角度を開き変形する。
　一いち斬ざんで百斬。
　渾こん身しんの一閃の後に放たれたのは、尾を引き標的へと殺到する紅くれないの剣けん閃せん。

「ぐわあああああああああああ!!」
　時間跳躍の着地点……一瞬の間かん隙げきを縫ぬい、ティラノギルディへことごとく着弾していく。
「ぐっ……な、何な故ぜ俺の動きを捉えた……その剣は一体……！」
「見えたんじゃない、感じたんだ！　お前にもツインテールを愛する心があるからこそ探さ知がせた……！」
「……ツインテール属性の強弱は関係ない……アルティメギルに属するエレメリアンならば、誰だれもがツインテールへの愛と敬意を忘れない……幹部ともなればなおさらだ！　貴様のその能力、まさに天敵アンチエレメリアン……これより先は我われらも侵略されることを覚悟せねばならんということか!!」
　自分でも不思議なくらい、力が湧わいてくる。
　強制的にツインテール属性を生み出すという究極のツインテールの力。
　それを正しく内に向けた結果、この恒常的に全身から噴き上がる粒子となって、テイルレッドの力を極限まで強化しているんだ……!!

◇

　総そう二じの復活と進化を見守っていたトゥアール。その手にした端末に、基地で自動解析されたデータが転送される。
　アルティメットチェインを取り巻く未知の粒りゆう子し。
　科学を超越したその分析結果に、トゥアールの声も踊る。
「すごい……総二様の創り出した粒子……原子がツインテールの形に結合しています!!　まさに究極物質！　ツインテリウム!!」
　全ての科学を過去へ置き去りにし、今、新たなる粒子が元素の羅列に加わったのだ。

隣でその常軌を逸した吉報を聞いたブルーは、身体からだに障さわるとわかっていても大声でツッコミをせずにはいられなかったようだ。
「どこまで行くのよあいつはあああああああああああああああ!!」
それを聞いたレッドは、真正直に返答する。
「どこまでだって行ってやるさ！　ツインテールと！　……お前たちと一緒にな!!」
そう断じられては、是非も無い。ブルーはそれきり黙りこくってしまった。
「相変わらずナチュラルに女を濡らしますね総そう二じ様は」
「ほんとにね……」
トゥアールのボケをスルーするどころか、顔を真まっ赤かにして軽く頬ほおを膨ふくらませているブルー。トゥアールも揚げ足を取ろうというものだ。
「……えっ……濡……」
「わーーーーーーーーーーーーーーーーー違ーーーーーーーーーーーーーーーうっ!!」

そんないじり甲が斐いのある反応を基地で見ながら、未み春はるは笑みも溢こぼさず呆ぼう然ぜんとしていた。
逐ちく次じ未春と通信を交わしていたトゥアールが、不思議そうに尋ねた。
『……未春将軍……お義か母あ様？』
どんな時でも、何を見てもマイペースを崩さず余裕を忘れなかった未春が、息子の晴れ姿を前に珍しく狼狽うろたえている。
「ど、どうしよう……総ちゃんが、あまりにもすごすぎて……何も言葉が出ないわ……」
そんな母に向け、テイルレッドは戦いの最中に感謝を贈った。

『見てるか、母さん。これで、名前負けしないよな？』
「……え？」
『──生まれた時、つけようとしてたんだろ？　俺に……〝アルティメット〟って名前』
　有ある帝てい滅めつ人と……子供のような無邪気が生み出したひどい名前。夫と一緒に考えたと語り聞かせたその名前を、息子は覚えていたのだ。
　感激に肩を震ふるわせたその時、似合っていたはずの女幹部衣装は、場違いなものと化した。
　今未春は、母に戻ったのだから。
「……本当、親孝行なんだから……」
　この日未春は……世界の守護者・テイルレッドの母は、初めて涙を流しながら、我わが子の戦いを見守った。

◇

　劣勢のティラノギルディを庇かばい、津波のように土砂を噴き上げ、巨大なエレメリアンが姿を現した。二足歩行の首長竜とでも言うべきか……その異様は筆舌に尽くしがたい。
　俺が最強の武装を手にしたことで、死の二菱ダー・イノ・ランヴアスも最後の戦士がその姿を見せたのだ。トゥアールの通信では、その大きさ、実に六〇メートル強。
「アンフィコギルディ……その体たい躯く、最終闘体か!?」
　ティラノギルディが驚いているということは、まさに秘蔵の戦士だろう。
「アンフィコギルディ……？　何よあれ!?」
「アンフィコエリアス……地球史上最大の生物ですわ！　ですがあまり

にも情報が不確定で、幻の生物ともいわれています……！」
　ブルーの疑問に即座に答えるイエロー。実在の可能性が五分五分の生物まで網羅しているのか。
　実在するかわからない生物……なんて、神話や伝説の怪物と変わらないよな……。
「あれが正真正銘、死の二菱ダー・イノ・ランヴアス最後の戦士……！」
　背後に臨む古城さえ眼下に臨む巨体。無言で腕を振りかぶるアンフィコギルディ。
　一撃が地面を陥かん没ぼつさせる拳こぶしを躱かわし、俺は天に掲げるようにテイルカリバーを構えた。
　主を守るため死力を尽くす相手を前に、俺は仲間の絆きずなを以て応戦する。
「絆装填ネクサスモード!!」
　テイルカリバーに、ブルー、イエロー、ブラックの武器から分離した柄つかが装着されたそれは、フュージョニックバスターの剣。
「おお……わ……わらわの武器も！　合体しておる……！　ちゃんと……わらわも……!!」
　背に聞こえるブラックの歓喜。
　その声は、心なしか震ふるえているようだった。
『総そう二じ様！　どうやらアルティメットチェインは、左腕にツインテイルブレスを装着したことで、属性玉変換機構エレメリーションが完全にオミットされています……！　その代わり、テイルカリバーの希望装填ホープモードの能力を同時発動すれば、属性玉エレメーラオーブの能力を刀身に付加できるはずです!!』
　トゥアールのオペレートを受け、俺はテイルカリバーに更なる力を付加する。

「相手はあんなデカブツだ！　お前の力も借りるぞ、ユグドラシルギルディ──！　希望装填ホープモード!!」
「うぐう!?」
　教師属性テイーチヤーの属性玉エレメーラオーブが、ティラノギルディの体内から奪還され、勢いよく飛び出す。
　発動した希望装填ホープモードに導かれ、ツインテールを模したテイルカリバーの柄つかへと吸い込まれていった。
　武装を極大化させるというとんでもない発動効果のため、俺はもちろん愛あい香かでさえ全く使用しようとはしなかったが……相手があれなら、存分に使いこなしてみせるさ。
　愛香たちがあらゆる属性を体現し、俺を励ましてくれたあの日々があったからこそ……俺はより身近に、ツインテール属性以外の属性を感じることができた。
　トゥアールに、振り下ろした巨大剣がもたらす被害範囲を計算してもらう。
「でっ……やあああああああああああああああああああああああああああああ!!」
　刃渡り二〇〇メートルの超弩ど弓きゆうの斬ざん撃げきが、アンフィコギルディを両断した。
「我われらが女神よ……そのツインテールに、勝利あれ……!!」
　ただ一言のエールだけを遺のこし、粒子となって崩れていくアンフィコギルディ。
「……何が女神だ、馬ば鹿か者共……！　俺は、帝王だ!!」
　震ふるえる手で聖剣を構えるティラノギルディ。
「何な故ぜ今頃になって！　俺が……俺が、その言葉をどれだけ待ち望んでいたか！　基地でそれを言わぬか!!」
　偽いつわりの暴君の仮面が剥はがれ、部下を悼いたむティラノギル

ディ。
「さあ行くぞ、ティラノギルディ!!」
　テイルカリバーを振りかぶり、ティラノギルディの聖剣アロンダイトを撃ちつける。
「お前も、一皮剥むけたみたいだな……!!」
「俺の皮を剥いたのは貴様であろう！　テイルレッド!!」
　加速する剣と剣。ツインテールとツインテール。
　斬ざん裂れつの軌跡すら掻かき消え、いつ終わるともなく結び合う。
「貴様は剥けたどころではあるまい……！　人間でなくなるのが怖くはないのか!!」
「それは何度も自分で問いかけ、そして自分で答えを出した……」
　凄せい烈れつに返じる俺をまざまざと注視し、ティラノギルディは記憶を手た繰ぐるようにほんの一瞬、空を見上げた。
「首領様の占われた通りであった……。我わが身脅おびやかす戦士！　艱かん難なん辛しん苦くを乗り越えて裏返り、究極の可能性をその手にしたか！　純粋なる愚ぐ者しゃよ……!!」
　何を占ったか知らないが……俺が愚者だって？　上等だ!!
　渾こん身しんの一斬を撃ち込んだ俺と受け止めたティラノギルディを中心とし、周囲の地面がクレーターとなって陥かん没ぼつした。
「見ろ！　この荒廃してゆく大地を……！　これが、今のお前と俺たちの戦いだ！　やがてこの光景は地球全土に及ぶであろう!!」
「お前たちに心の輝きを奪われた人間は、この光景が自分の心の果てまで広がるんだ!!」
　俺は二度と、恐怖に屈しない。
「傷つき……荒廃し……それでも！　ここにはツインテールがある!!」
　もはや、思考も反射も超越し、俺たちは互いの剣を我が武む者しゃ羅らに撃ちつけ合った。

　剣撃の余波が、大地を微み塵じんと砕いてゆく。
「何が絆きずなだ……！　何故だ！　何故お前はそこまで人望がある！」
　帝王が、恥も外聞も無く哭ないていた。
「人望なんか俺にあるわけねえだろ！　ただ、俺があんまりにも馬鹿だから、おかしくてみんなついてきてくれた……それだけさ!!」
「俺とて……俺とて馬ば鹿かだ！　だが部下は、誰だれも笑いかけてはくれなんだ！　皆と笑い合いたかったのにだ……！　俺と貴様、何が違う！　俺は……俺は、どうすればよかったのだああああああああああ!!」
　模倣を恥じていた帝王が。まるで教えを請うように、慟どう哭こくをぶつける。
「その馬鹿なことを、部下が笑うまで、一緒に笑えるまで諦あきらめなければよかったんだ！　そうだろう、帝王!!」
　今の俺の、全力のツインテールを。
　恐怖も悲しみも絶望も、全て乗り越えた先に手にした、真の究極を解放する。
「完全解放ブレイクレリーズ！　究極装填アルテイメツトモード!!」
　テイルカリバーの……炎の紅あかき刀身が、全てを超越した黄金の輝きに包まれる。
　万象の悲しみを断つ最後の一いち斬ざん。これが、俺が辿たどり着いたツインテールだ！

「ファイナルブレイザーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーッ!!」

　遥はるか大宇宙へと一直線に突き抜ける、灼しやく熱ねつの次元斬ざ

ん撃げき。
　疾はしり抜けた衝撃はティラノギルディの背の空に、ツインテールの星座を描く。
「ぐああああああああああああああああああああああああああああああああ……!!」
　永えい劫ごうに続くかと思われた究極大戦テイタノマキアは、ここに決着を迎えた。

◇

　全身から激しく放電しながら、大地に落下するティラノギルディ。
　だが、五体を地に叩たたきつけられるかと思った矢先、奴やつは両の足で着地した。
「あいつ、まだ……！」
「待て！」
　反撃を恐れて反射的に構えるブルーを、俺は腕を掲げて制止した。
「……ティラノギルディ……」
　息を荒らげながらなお、膝ひざをつかず。倒れず。立ったまま散るが帝王の本懐。
　そう言わんばかりに……今いま際わの際、全身を放電させてなお、ティラノギルディは凜りんとして俺たちの前に立っていた。
「……これで……全て敗れたか、死の二菱ダー・イノ・ランヴアス……。だが、己おのれの生涯を顧かえりみず挑んでくる戦バ士カが相手だ、それも仕方がない」
　最期まで二本足で立とうとするその生き様こそ、こいつが追い求めた生き様。恐竜の帝王テイラノサウルスの覇は様ようが確かに見えた。
「全てをツインテールにするのではない。ツインテールを守るため、全

てのツインテールから力をもらう……。よき仲間たちに支えられ、よき長おさであったからこそ、お前は究極のツインテールを超越したのだろうな……」
　……お前と俺は、色んな部分で似ていたんだな。求め、怯おびえ、そして抗あらがって……。
　俺たちの違いは、今お前が言ったこと……本当に、ただそれだけだ。
　俺は最後の最後で気付くことができた。だからこの勝利けつかが待っていた。紙一重の分岐だったんだよ。俺たちは。
「皮肉なものだ……。百合属性ガールズラブを持つ俺が好敵手と認めたただ一人のツインテールが、男とはな……」
　戦闘員アルテイロイドが残っていないことを確認し……俺は変身を解き、男の正体すがたを晒さらす。背中で皆が見守る中、放電するティラノギルディへと近付いていく。
「まだちゃんと名乗ってなかったな、ティラノギルディ。俺は、観み束つか総そう二じだ」
「……男の名前など覚えておく趣味はないが……ミツカソウジ、か。ふふ、どこかツインテールじみた名前だ……」
「何だよそれ」
　調子を取り戻した軽口に、思わず俺は苦笑する。
「お前、結局俺の正体は……」
「トリケラトップギルディも、上官である俺に何か隠し事をしながらくたばりおった。大方テイルブルーの正体であろうが──今ならわかる……奴やつの気持ちが。誰だれが教えてやるものかよ！　この秘め事こそ、戦った我われらだけの勲くん章しよう!!」
　テイルレッドの正体が男だったこと。
　テイルレッドが究極のツインテールになったこと。
　何一つ組織に献上せず、帝王は武ぶ勲くん無く散ろうとしている。

「まあ、戦った者になら明かしても構うまい？　先に逝いった戦友やくたたずたちへの土産みやげ話にするさ」
「いいぜ。ブッたまげるだろうな」
　ただ一つ。先に散った友への笑える土産話だけを、輝かしい勲章として。
「よいか、ソウジよ。貴様はこの帝王を倒した。死の二菱ダー・イノ・ランヴアスから世界を救ってしまった。ならば観念して、地獄に落ちよ。その美しきツインテール、血けつ泥でいにまみれさせよ。そして……引き続き、世界を守れ」
　初めてエレメリアンに名を呼ばれ……俺は、しかと頷うなずいた。
「――あぁ」
　待ち受ける最強の軍団との戦いは、地獄だと。その引き金を引いたのは、他ならぬ俺だと。
　だから……責任を持って、最後まで戦え。ティラノギルディは、そう言っているのだ。
　気配を感じて振り向くと、ブルーたちが互いを支え合いながら、トゥアールと一緒に歩み寄ってきていた。
　トゥアールは、その美しき銀髪を。
　アルティメギルを倒すために失ったツインテールを。
　ティラノギルディに何憚はばかることなく見せつけていた。
「そこで止まれ。それ以上は近付くな。百ゆ合りよりも正道を選んだ女どもめ」
　放電を増したティラノギルディが、近付くトゥアールへぶっきらぼうに言い放つ。
「愚ぐ者しやと……あと一人……俺を脅おびやかすと言われた、恋人のカードが……」
「恋人……？」

　また、タロットのカードの名前だ。トゥアールが不思議そうに呟つぶやく。
　戦いの最中で言っていた、占いの結果とやらを呟き、笑いをもらすティラノギルディ。
「……そうか、フェニックスギルディではない……お前だったのか、復讐者……。お前の祈りが……愚者を究極たらしめた……。未いまだ完成を見なかった二つの可能性ツインテールが、俺を見事滅ぼしたのだな……」
　敗北を受け入れるその声音は、どこか誇らしげだった。
「しかし……お前は裏返ったのか？　恋人よ。それとも……」
　それ以上は何も言わず、ティラノギルディは俺に視線を戻した。
「痛快だな。最後に俺より空気を読めぬ男に出会えた……。上には上がいるものよ」
「俺が……？」
　訝いぶかしがる俺に向け、得意げに続ける。
「貴様の仲間から百合を感じたのも事実……片方の思いは真実だということだ。いつまでも応えてやらねばいよいよ、百合の方が勝るやもしれぬぞ！」
「応えるって……俺はちゃんと、みんなの絆きずなに応えたぞ!!」
　だからこその勝利じゃないか。
「百合属性ガールズラブの俺が言うのも何だが……お前の仲間が望んでいるのはお前の志とは違う。いつかちゃんと応えてやれい。百合を愛する俺に指摘されたことを恥じながらな!!」
　どこか浮かれるように呆あきれながら、ティラノギルディの身体からだが閃せん光こうを発する。
「空気を読め、ソウジ！　わーーーーーーーっはっはっはっはっはっはっはっはっはっは!!」

　帝王らしき豪笑を空に響かせ──ティラノギルディは、厳おごそかに爆散した。
　止まれと言われた位置、まさにそのギリギリで、俺たちの鼻先に爆炎を掠かすめながら。
「……そうだな、もっといろんなことに目を向けるよ……」
　確かに俺は……空気が読めない。まだまだ、世界が見えていないだろう。
　でもそこで自分に焦あせったら、また同じことを繰り返してしまう。
　奪われていた無数の属性玉エレメーラオーブが爆発で全て弾け飛び、ブルーたちのギアへと戻っていった。
　最後に俺の手元に飛んできた、たった一つの属性玉エレメーラオーブを除いて。
　俺は死戦を共にした仲間たちを振り返り、笑顔を分かち合った。
「……終わったな」
　俺は、みんなと一緒にゆっくり歩いて行くさ。
　二度と、道を踏み外さないようにな……。

『────全然わかっておらぬ……』

「え？」
　手にした百合属性ガールズラブの属性玉エレメーラオーブから、最後に、帝王の溜ため息いきが聞こえたような気がした。

エピローグ　神々の胎動。

　最大の戦いを乗り越えた次の日の朝。
　いつも通り俺の家に集まった愛あい香かたちだが、昨日までとは少し様子が違っていた。
　リビングのソファに座る俺。
　その周りを愛香と慧え理り那なとイースナがトライアングルに取り囲み、自分のツインテールを俺の頭や腕や肩に乗せていた。伸びたとはいえ愛香たちに比べれば髪が短めのイースナは、俺の手を取って手の平の上に房を乗せている。ついでに、俺の肩に顎あごを乗せている。
「あの、これは……？」
「いいから数日分のツインテールを補給しなさい！　全然足りてないでしょ！」
　俺の疑問をぴしゃりと一蹴する愛香。
　確かにまあ……自力でツインテール属性を生み出せるようになったとはいえ、アルティメットチェインはあまりにも危うく強大な力だ。
　それを御するには、俺がこれまでより遥はるかに強い心を持たなければいけない。
「本当は観み束つか君が眠っている間にもこうしていようと思ったのですが、わたくし一緒に寝てしまいそうで……」
　俺の腕に頭をもたれる慧え理り那な。
　ツインテール成分の補充はありがたいが、あまり密着されると恥ずかしい……。
「……密着されると恥ずかしいとか思ってるでしょ」
　俺の背中に自分の胸……あ、背中か……いや胸……やっぱり背中だ、背中を合わせている愛あい香かが、俺の心を読んだかのような正確さで

言い当てた。
「そ、それは……」
「ツインテールは恥ずかしくないのに。そーじはちゃんと、女の子に慣れないと駄目」
　愛香の言葉を合図にしたかのように、三人とも身体からだとツインテールの密着度を高めてくる。
　く……ツインテールが、己おのれの身体の一部と化したかのようにまざまざと感触が伝わる。
　朝から桃源郷か。せっかく命を燃やして勝利を得たのに、あっさり天の国へと連れて行かれそうだ……!!
「はーいそこまでです皆さん！」
　床が一メートル四方ほど横に開き、中からトゥアールがリフトアップしてきた。
　この家、俺の部屋以外まで、どんどん不可解な改造されていないか……!?
「またツインテール成分だけを補給していたら、いつ暴走するかわかりません！　バランスが大事です。ね、総そう二じ様？」
「そうだな。それはその通りだ」
　適度な距離でツインテールと付き合えなかったことも、今回の反省点だ。トゥアールの言葉には説得力がある。
「というわけで！　世界を守った記念に童貞を守ることを放棄しましょう！　皆さんは十分くっついたんですから離れてください、次は私が総二様に補充したり私の下腹部に補充されたりする番です!!」
「うわっ!?」
　俺の頭に胸を乗せてくるトゥアール。髪越しでも頭皮に吸い付くようなその感触に、たじろいでいると──
「そろそろ朝ご飯食べないと、遅刻しちゃうわね。一度授業サボったん

だから、これからは真ま面じ目めに学業も頑張らなくっちゃ」
「ちょ、やめ、ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー女をサボる女!!」
　制服のポケットから取り出したヒモをトゥアールの腰に括くくり付け、人体ヨーヨー化。それを雄お々おしく操るヨーヨーチャンプと化した愛香が、スーパープレイを見せる。
「……愛香さん、トゥアールさんがおっぱい乗せる前に、迎撃できた、のに……ふふふ、その青臭いフェアプレー精神、で、女は出し抜かれる……」
　二人を見送りながら、含み笑いを浮かべるイースナ。
「観み束つか君、わたくしも……あれを……」
　そして、ヨーヨーにされたトゥアールを羨うらやましげに見送っていた慧え理り那な。
　安全な遊びだと勘違いしているのかもしれないが、あのヨーヨー、床にガッツンガッツン着弾してるぞ。高い高いをねだるような気軽さでは受けられないな……。
「おっ」
　テレビに映った人物に、俺は思わず口角が上がる。ニュース映像に映っていたのは、デックさんだった。
　テイルレッドの復活を大々的に特集し、その裏で、という体で取り上げられたようだ。

〝エレメリアンから幼い子供を救う〟
〝ツインテイルズへの取材が目的で極秘来日か〟

　どうやら、失踪報道もめでたく誤解は解け、むしろ作品のクオリティを底上げする要因として好意的に捉えられているようだ。

「あの役ひ者と、復帰したみたいね」
　苦笑する愛あい香か。テイルブルーの役者なのだから複雑だろうが、かつて製作発表を見た時ほどの険は顔にない。
　実は俺も愛香も以前にコミケでデックさんと会っていて……何より、俺の復活を後押ししてくれた恩人の一人がデックさんだと知ったら、驚くだろうな、愛香。
　デックさんと、あすかちゃんと、俺。あの日のことは、三人だけの秘密だけどな。
　そしてもう一人の恩人、ソーラについて思いを馳はせる。
　俺を見守っていたという少女。俺のツインテール属性が暴走して変化してしまった姿。
　久しく疑問に思うことすらなかった、自分の変身原理について、あらためて思案する。
　趣味が反映されたとはぐらかしてはいたが、実際のところテイルギアで女体化したりする理由は、トゥアールも完璧には把握していないと言っていた。
　結いわ翼ばね唯ゆ乃のは、フェニックスギルディが憧あこがれた最高のポニーテールの少女を理想として到達した奴やつの最終闘体だが……同じように俺が女の子になった姿──ソーラも……あるいは、いつか見た本物がどこかにいるのではないか。突とつ飛ぴな憶測だが……。
「観束君……わたくしのツインテールを触ってくれませんの……？」
　思案しながらトーストを食べる俺に、付け合わせにどうぞといわんばかりにツインテールを差し出してくる慧理那。
　無意識に手に取りかねないので、成長した精神力で俺は慧理那を諭さとす。
「大丈夫だよ。手が離れていても、俺はいつもみんなのツインテールに触れているから」

　愛あい香かが白目になってこっちを見ている気がするが、きっと俺の成長に目を見張っているんだろう。
「で、でも！　すみません。観み束つか君と繋つながっていないと、わたくし……不安で……」
　しゅんとする慧え理り那な。
　イースナに至っては、俺の制服のズボンの穿き口を引っ張り、隙すき間まから髪を差し入れようとしてくる。愛香に子猫のように抱きかかえられ、軽々と引き剥はがされる。悲しいかな、引きこもり体質では武闘家と力で対抗する術すべはないようだ。
「とうとう慧理那さんも寂しさを口実に男を求めるまでに……巣立ちを見守る母の心境ですね……つき合いますよ私も!!」
　何かしみじみと頷うなずきながら、トゥアールはこの登校前の忙しい時間に反逆して制服を脱ぎ始めた。間かん髪はつ容いれず、イースナと力加減が違う！　と悲痛な叫びを上げながら、愛香に排除される。
　慧理那だけじゃない。先ほどまでの行動を見るに、愛香たちはまだ不安に違いない。
　それだけ俺は、みんなを心配させたんだよな。
「今回、みんなには本当に迷惑をかけちゃったな」
「何言ってんのよ。今までそーじがあたしたちにしてくれたことでしょ」
「そうですわ、結局最後は観束君自身が頑張ったのですし、むしろ恩を返し足りないぐらいですのよ」
「そ、総そう二じさん……本当に、かっこよかった……」
　愛香と慧理那のさっぱりとした笑顔に続き、イースナもグフフフと笑う。多分イースナなりの爽やかさがあれなのだろう。
　俺は昨日考えたことを、みんなに伝えた。
「だから、みんなそれぞれ、一つだけ言うこと聞くよ。俺にできること

なら何でもするから、遠慮なく言ってくれ」
　小さな子供が日頃の感謝の気持ちに母親に肩叩たたき券をあげるぐらいの気軽な提案だった。
　しかし、周囲の空気が一変。突如として張り詰めてしまった。
「……………………………………あれ？」
　真剣を構えて向かい合うような、真顔の視殺戦が繰り広げられているような。
　俺、何かまずいことを言ってしまっただろうか。
　キッチンから顔を覗のぞかせる母さんだけが、邪悪な微笑ほほえみを浮かべていた。

◇

　音が響き渡っていた。
　妙たえなる旋せん律りつ――とは到底言い難い、耳じ朶だを侵す不協和音。
　聖布ヴエールを隔へだてて鳴りはためく、音子の爆撃。
　アルティメギル首領が、首領の間で厳かにパイプオルガンを演奏している。
　黄よ泉みの果てより木こ霊だまする死音が如く、底知れぬ不安をかきたてるメロディー。
　生まれて初めて鍵けん盤ばんハーモニカのチューブを咥くわえた子供の演奏が天上天下に名を馳せる名曲に聞こえるほど、首領が奏でるハーモニーは破滅していた。
　だが、首領は完全なる世界を自身の周りに構築し、何人の意見をも許さない。
　奏でる音に酔いしれるのではなく、しなやかに鍵盤を踊らせる己が指

に酔っていた。
　とりあえず動かす。映画で天才ハッカーが活躍する場面……ディスプレイには目まぐるしくプログラムが踊るが、視線を落としてタイピングをする手元を見ると、凄すさまじく適当に指を動かしているだけだったのを見た時のようないたたまれなさを感じる。

　白いローブをまとった長ちよう躯くが、目め眩まいによろけながら首領の間で歩を進める。
　先日ここを訪れたマーメイドギルディとは違う。
　ローブから出た両の足は、歩むその地面すらも引き裂くかのように禍まが々まがしい三本爪づめが光っている。
　ローブのフードから覗のぞく瞳ひとみは、向かう先の聖布ヴエールの天面から羽ばたく白い影を見た。
（――鳩……!?）
　人間界に棲せい息そくするごく普通の鳩が、何な故ぜかスローモーションのような緩やかさで天へと羽ばたいていた。
　一体何がしたいのかはわからないが、ともあれこの壊滅的なオンチはびこる空間で力強くはばたく鳩の強さだけは、認めざるを得ないだろう。
　フードを下ろして、浅黒い頭部を露あらわにするエレメリアン。
　現れた面おもては、神々の国に住まう大鳥グリフォンを思わせる精せい悍かんさを備えていた。
「―グリフォギルディか」
　首領に名を呼ばれて畏かしこまるエレメリアン。
「マーメイドギルディに声をかけたのだが、あやつは如何いかがした？」
「どこぞに放ほう蕩とうしていたかと思えば、急に帰還し、今度は研究

室に籠こもる有様……何ぞ、新しい研究資料でも手に入れたのでしょう」
「ふむ。して、何用か」
「死の二菱ダー・イノ・ランヴアスが壊や滅ぶれたとのことです」
　報告し、恭うやうやしく頭を下げてなお、演奏会がフィナーレを迎える気配はない。
「ほほう。ティラノギルディが斃たおれたか──」
「……首領様。この音は一体」
　止めてくれるとありがたいですと隠しきれぬ本音を言外に滲にじませ、グリフォギルディは丁てい重ちように答えを仰いだ。
「聞けばわかろう。余が直々に鎮魂歌レクイエムを与えておるのだ。ティラノギルディにな」
「はっ……」
　報告をする前から、ティラノギルディの陥かん落らくを察知していたということだろうか。
　聞いていると鎮ちん魂こんどころか地じ縛ばく霊れいになってしまいかねない騒音だが、グリフォギルディは報告を続けた。
「美の四心ビー・テイフル・ハート。貴の三葉ノー・ブル・クラブ。死の二菱ダー・イノ・ランヴアス。四し頂ちよう軍の三角までもを崩した戦士……どうか首領様にも御覧いただきたく」
　四つの頂のうち、三極が滅びた。
　ティラノギルディの言葉通り、人間ある限り無限に生誕すると言っても過言ではないエレメリアンだが、強戦士は有限だ。
　グリフォギルディが胸の前で構えたのは、貴の三葉ノー・ブル・クラブなどに資料として回っていた、古いテイルレッドの画像だ。脅威の戦士の参考画像は、設定資料のように丁てい寧ねいな三面図だ。
　帝王の誇りに懸けて約束した秘密は、いかばかりも露見していない。

　ひときわ大きな音を立てるオルガン。
　いかなる時も泰然とした態度を崩さなかった首領が、初めて驚きよう愕がくに我われを忘れたのだ。
「ティラノギルディよ……よくやった」
　鎮魂をむしろ妨げる不協和音は止やみ、首領の口から、真なる鎮魂が紡つむがれる。
「この戦士と戦い、その存在を余に知らしめた。それだけで、かの者の生には大いなる意味があったのだ」
「……首領様……!?」
　いたく昂こう奮ふんした様子の首領を目まの当たりにし、グリフォギルディは動揺を隠せない。
「グリフォギルディ。そなたはこの戦士をどう見る」
「……はっ。よき尻をしております。尻にはその者の人生が宿る──この幼と少しにてこれだけの生き様を尻に宿すとは、相当の手練れかと」
　明らかに三面図の中の背面図、しかもそのさらにごく一部にのみ特化し注がれる熱き視線。
　首領の前での熱弁を恥じ、居住まいを正すグリフォギルディ。部位への属性の中でも王道にして難関、尻属性ヒツプを持つ者は少ない。その頂点を極めた戦士となれば、なおのことだ。
「──この幼子。古代ツインテール文明の女神に生き写しなのだ」
「古代ツインテール文明……本当に存在したのですか」
　存在しないゲームの裏技を得意げに語る小学生を見るような生温かい目で聞いていた、首領が度々幹部に語り聞かせたその存在……古代ツインテール文明。
　それに連なる存在を示唆され、グリフォギルディは聞き返さずにはいられなかった。
「そうだ。全ての宇宙……全ての異世界の始まり。原初のツインテー

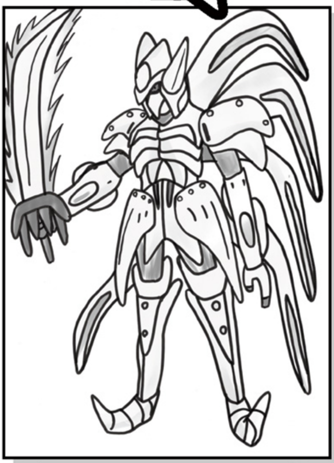
ル……その女神の魂を受け継ぐ者こそ、まさしく究極のツインテール」
　パイプオルガンが消滅し、風化していく。
「余の力の一端を授けておったのだ。ティラノギルディを斃たおすこと──それが何よりの証明。彼の者は自ら名乗った。〝本物だ〟となし」
　聖布ヴエール越しに垣かい間ま見える首領のシルエットは───初めて、玉座から立ち上がっていた。

「アルティメギル最大最強部隊、神の一剣ゴー・デイア・ソードよ──首領の御名において、出撃を是する」

　グリフォギルディは畏かしこまり、そして不敵な笑みを浮かべた。
　決して出撃してはならなかった部隊。
　世界に終しゆう焉えんをもたらす、神のごとき力を持つエレメリアンたちが。
「そして今こそ、我われらアルティメギルの最終標的の認識を宣言しよう」
　今、その封印いましめを解き放たれたのだ。
「究極のツインテールへと到達した者──テイルレッドを、アルティメギルの女神と迎え入れよ。我らが紡つむぐ、新たなツインテール文明のために──」

ぼくのかんがえたエレメリアンのコーナー

No.007 ロンギスギルディ



群馬県・A・Mさんの作品

水沢夢の選んだポイント

設定を非常に細かく書いてくださっていましたが、その中の「少年のようなテイルレッドのお転婆さが好き」という点から発展し、本編に登場となりました。お転婆属性という物語にぴったりな属性もさることながら、ヒーローものにはなかなか登場しない珍しい古代生物「ロンギスクアマ」がモチーフなのもポイントです。ティラノギルディ様のために買った資料「絶滅生物の図鑑」によると、羽根っぽいヒレが生えているらしいです。テイルレッドのお転婆さの元である総二との決戦はいかがだったでしょうか。最初で最後かもしれない、総二が生身で戦い、倒したエレメリアンです。



こちらの3作品も次点ですが本編に登場しています。マンモギルディは昔公式ブログでも紹介したものです。

マンモギルディ
（応募時はマンモスギルディ）
東京都・ぼっきーそーどさん（19歳）の作品

ハルキゲギルディ
（応募時はハルキゲニアギルディ）
〈虚ろ目属性（ホロウアイ）〉
福岡県・MAX-Aさんの作品

TEXT ONLY
（ケントロギルディ）
〈多弁属性（メニイトーク）〉
（※属性のみの応募）
TEXT ONLY
秋田県・S・Tさんの作品

応募のポイント

絶滅生物軍団との戦いも終わり、本格的に登場した一の軍団はどんなエレメリアンたちなのでしょうか……？ 残存部隊の兵士も残っていますので、普通のモチーフのエレメリアンでも大丈夫です！ 出オチ、一発勝負、ニッチな属性の応募大歓迎ですので、どしどしご応募ください！（ただ、他作品のパロディや流用はすみませんがNGで……）

応募方法

ハガキの表に住所・氏名・ペンネーム・年齢・電話番号を、裏にエレメリアンの名前とデザイン、属性力を書き、下記のあて先までお送りください。また、デザインのみ、属性力のみでの応募も可能です。

▶▶▶ **〒101-8001**
東京都千代田区一ツ橋2-3-1 小学館
ガガガ文庫編集部「ぼくのかんがえたエレメリアン」係

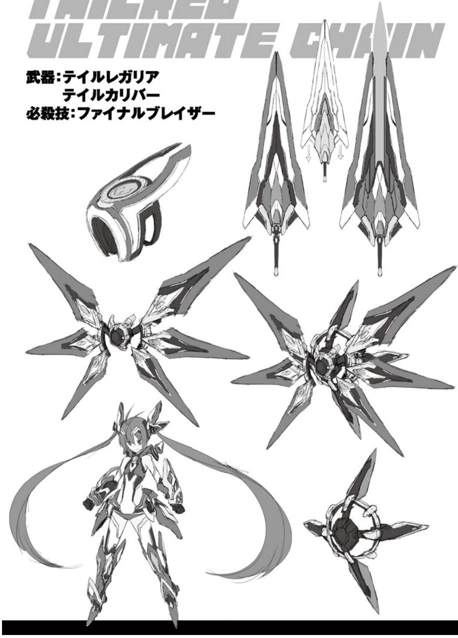
メールでのご応募の場合は、
データファイルを添付してこちらのアドレスまで。

▶▶▶ **sukisukitwintail@gmail.com**

なお、採用したエレメリアンの著作権は著者およびイラストレーターに帰属されます。また、応募していただいたハガキ、ファイルの返却は行っておりません。

TAILRED ULTIMATE CHAIN

武器：テイルレガリア
**　　　テイルカリバー**
必殺技：ファイナルブレイザー



テイルレッド アルティメットチェイン



究極を 超えた究極。

観束総二(みつかそうじ)がツインテール属性そのものを完全解放(ブレイクレリーズ)し、真の究極のツインテールへと到達した姿。トゥアールの属性力(エレメーラ)が宿った右のブレスに加え、自在に操れるようになった自身の属性力(エレメーラ)をツインテイルブレスとして左腕に装着することにより、禁忌の同属性共鳴を完璧に発動。二つのテイルブレスを、無限補充される補助ツインテール属性で稼働させるため、その力は全てを超越。全次元最強の戦士へと進化した。厄災の力と恐れられた究極のツインテールの無尽蔵の力を、究極粒子ツインテリウムに転換し全身にまとうことにより、暴走を完全に制御している。一方、自分自身の属性力(エレメーラ)をブレスへと可逆変化させるため、極めてハイリスクな最強変身でもある。

あとツインテールがき

　お久しぶりです、水みず沢さわ夢ゆめです。最近、生まれて初めて健康診断にめっさ引っかかりました。皆様も健康には気をつけてください。
　この十巻は、ここまで続いてきた俺ツイの集大成となるよう書きました。ちょうど同じ節目の五巻で、同じく総力戦を描いたのと同じように。楽しんで頂けましたでしょうか。
　ボス格では最長登板キャラとなったティラノギルディは、今まで以上に思い入れの強い敵キャラとなりました。総そう二じたちと一緒に、皆さんの心に残れば嬉うれしいです。
　バトルも一段落。次巻は心機一転、思いっきりラブコメとか変態全振りとかがいいかな！
　謝辞です。帯コメントを寄稿してくださった、てれびくん編集長の吉よし田だ伸のぶ浩ひろ様、ありがとうございます！　歴史ある御誌で特集されてきた数あま多たのヒーローたちに比べればまだまだ発展途上、というか問題も多いヒーローたちですが、皆に夢を届けたいという思いは同じと信じています！
　イラストの春日かすがさん、まさにテイルギアの集大成、最強のヒーローを完成させていただきありがとうございます！　世界中の子供たちにこのヒーローを届けましょう!!
　担当の濱はま田ださん、念願の変身シーンの連続挿絵を認めてくれてありがとうございます!!
　今回も、本書の完成と出版に携たずさわる全ての方と読者の皆様に、感謝とツインテールを！

水沢　夢

Yume Mizusawa

北国在住のツインテール作家です。皆様の応援のおかげでいよいよ10巻まで来ました！　本当に大切なものを失ってしまった時、人はどうするか。変態だ変人だと言われてはいるけれど、本当にヒーローに必要なものは何か。大台へ到達した今回は、試練と決断の巻です。

小学館ｅＢｏｏｋｓ
俺、ツインテールになります。10

２０１５年10月30日　電子書籍版発行

者　水沢　夢

人　立川義剛

人　野村敦司

集　濱田廣幸

所　株式会社　小学館

〒１０１-８００１

東京都千代田区一ツ橋２-３-１

s-ebook@shogakukan.co.jp

本　２０１５年10月25日　初版第１刷発行

　ISBN978-4-09-451576-3